弘前大学農学生命科学部・農学生命科学研究科

令和３年度　教育改善に向けたアンケート調査

報　告　書

令和４年２月10日

弘前大学農学生命科学部

自己評価委員会

目　次

巻頭言　2
はしがき　3
Ⅰ．学部卒業時学生対象教育評価アンケート
　１．アンケート調査内容　4
　２．調査結果　9
Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート
　１．アンケート調査内容　67
　２．調査結果　70
Ⅲ．教員対象教育評価アンケート
　１．アンケート調査内容　94
　２．調査結果　96
Ⅳ．教員対象授業アンケート（学部授業及び研究科授業）
　１．アンケート調査内容　115
　２．学部授業に関する調査結果　118
　３．研究科授業に関する調査結果　128
Ⅴ．アンケート調査結果に対する各学科の見解
　生物学科　136
　分子生命科学科　137
　食料資源学科　137
　国際園芸農学科　138
　地域環境工学科　138
Ⅵ．教育改善委員会（令和 3 年度教育改善にむけたアンケート調査についての意見 ）
　学部卒業時・研究科修了時学生対象アンケートについて　140
　教員対象授業アンケートについて　142
　教員対象教育評価アンケートについて　142

巻頭言

農学生命科学部長　東　信行

本アンケート調査は、学部の教育改善のポイントをそれぞれの学科や各教員が把握するために開始されました。今年度で19回目となり、経年経過も含めて学部教育の効果や改善点を俯瞰できる内容となってきています。毎年、自己評価委員会が多大な解析の労を執り整理し、教育改善委員会とともに検討した後、構成員と共にFDセミナーとして公開することで、効果的な利用を継続してきているものです。長期にわたるデータ蓄積や年度ごとの評価結果、個別の意見は特に新任の教員には重要な情報源になっています。また、近年では経済的に厳しい学生が相当数いることなども浮き彫りになり、大学全体の行動指針にもかかわる情報が抽出されています。

今日では、大学及び学部も学生教育における質の向上を図るため、学生の意見を聞きながら改善を図ってきております。学部・研究科の教育理念、教育目的、教育目標、学科の教育目標さらにはアドミッションポリシーなどの指針に基づき教育がなされております。こうした明確な指針に沿った教育は、教育の質の保証には重要なことと考えられます。また、内容や評価の公表は、大学あるいは学部の個性的な教育の深化に大いに貢献すると思われます。

近年、アクティブラーニングなど教育の現場でも現代社会に則したよりよい教育方法を模索しながら試行し、さらに多様な教育方法に挑戦しています。アンケートが始まってからの約20年の間には、学問の進歩はもとより、社会や教育方法、学生の世代的な変化など常に新たな対応が求められてきました。さらには、コロナ禍以降では遠隔授業も取り入れられるようになりました。現在では、PCやスマートフォンを介した講義や出欠確認、レポート提出などもストレスなく進められるようになり、図らずもDXが進められてきました。しかしながら、デジタル技術による利便性の向上は認められつつも、対面のいわゆる「ライブ」の授業や実習の重要性や楽しさも浮き彫りになってきているようです。

教育そのものに限らず施設への要望なども、本アンケートなどを参考に改善に努めています。教育環境を含め、すべての面で質の向上を目指し、今後もこのような整理作業を続けてゆく予定です。

最後に、本調査に関して多大な協力をいただいた自己評価委員会の各位に、またアンケートに協力いただいたすべての方に感謝申し上げます。

はしがき

農学生命科学部の自己評価委員会は、学部ならびに研究科の教育の適正化、カリキュラムの改善などを目的に、学部 4 年次の卒業予定学生および研究科 2 年次の修了予定学生を対象にした授業評価と、各教員を対象とした専門科目の授業評価についてアンケート調査を実施してきた。平成 14 年度（15 年 2 月実施）以降、これまで 18 回行われ、今回は 19 回目である。平成 17 年度からの調査では、それ以前の内容に加えて学生と教員を対象として教育評価アンケートを実施している。そのアンケートにおいては、学生および教員対象の各アンケートに同種の質問項目を設けており、学生と教員との間における意識の相違についても読み取れる。また、 各年のアンケート結果の比較によって、カリキュラムの改変や施設状況の変化の実態やそれらの影響、学生の意識・要望の変化、 教員の取り組みの変化なども読み取れる。

以上のような背景から、 本年度もこれまでのアンケートとの継続性に配慮し、それらの内容を踏襲して次の 4 事項についてアンケートを実施した。

Ⅰ．学部卒業時学生対象教育評価アンケート

Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート

Ⅲ．教員対象教育評価アンケート

Ⅳ．教員対象授業アンケート（学部授業および研究科授業）

各アンケートの設問内容は、それぞれのアンケート調査結果の冒頭に示した。設問は、 選択肢式のものと、その回答理由を記述させるもので構成した。選択肢として、「強くそう思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そう思わない」、「全くそう思わない」等の 5 段階を設定した。設問の回答に関する分析では、「強くそう思う」と「そう思う」を併せて「肯定的な評価」とし、「そう思わない」と「全くそう思わない」を併せて「否定的な評価」とした。また、学生の回答理由の記述は、個人名や特段に指摘内容にかかわらない職階以外は、原文のまま箇条書きで記し、各学生が選んだ選択肢番号を行頭に付し、学科あるいはコース別に記載した。「大学の生徒」、「大学の教諭」など、明らかに誤っている表現もそのまま掲載した。一方、掲載には事実関係の調査を要すると判断された内容は、回答者の趣意を変えない範囲で改変した。昨年度から、Forms を使用したアンケート調査を実施しているが、回答対象者や回答回数の設定を行うなどのシステム改良が望まれる。今年度の設問内容にも大きな変更を行わず、設問の趣旨が的確に受け取られる範囲の変更にとどめた。本報告書の内容は、教育改善や組織評価等に活用されると想定され、さまざまな取り組みの成果や問題点の把握を可能にする経時的データの役割もあるためである。

本アンケートの結果は教育改善に活用されるべきことから、 昨年度と同様に教育改善委員会と各学科の学科長にも本報告の一読を願い、それに対する見解、意見を提出してもらい、本報告の最後に掲載した。

今回の卒業・修了時学生によるアンケート結果にも、本学部・研究科の授業や教員の教育方法に対して厳しい意見や、教育体制に関するさまざまな意見が含まれている。関係各位および教育改善委員会におかれては、カリキュラムの教育内容や方法の改善のためにはもちろん、教育体制の充実を図るためにも、それらを大いに参考にされることを望む。

Ⅰ．学部卒業時学生対象教育評価アンケート

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、4 年間この学部で教育を受け、今まさに卒業しようとしている学生を対象に、学部教育について総合的な評価を得ることを目的とした。

調査方法：電子メールで学生に本アンケートについて周知し、Forms で回答を依頼した。なお、アンケートは個人を特定できない設定にして行われた。

調査対象：令和 4 年 3 月学部卒業予定者 216 名

調査期間：令和 4 年 2 月 8 日～3 月 23 日

有効回答者数：112 名　（回答率 52%）

調査項目：設問は以下のとおりである。（ただし、下記の[　]の項目名は、回答結果の分析にあたってグループ化のために設けたものであり、実際のアンケート用紙にはそれらの記載はない。） 回答は、選択肢から選ぶものと記述によるものの 2 種類とした。実際のアンケート用紙の例を 1 ページ目と 5 ページ目を設問の項目の後に示した。可能な限り回答者の負担を軽減させるために選択肢で回答する設問を工夫したが、記述式による回答に重要な指摘が含まれていることが多いため、2 種類の回答方法が混在する形をとった。

[学部・学科の教育目標等の認識]

設問 1. あなたの所属学科をお答えください。

設問 2. 本学部の教育理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属する学科の教育目的を知っていますか。

設問 4. あなたが所属する学科の入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

設問 5. あなたが所属する学科の教育目的は以下の通りですが、学科のカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。

設問 6. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[学科の専門教育について]

設問 7. 本学部では年度初めに学年毎にガイダンスを行っていますが、ガイダンスの内容は適切だったと思いますか。

設問 8. シラバスは受講科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

設問 9. あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか。

設問 10. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[教員の指導について]

設問 11. 所属する学科の教員の、講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足していますか（卒業研究については設問 25 で別に聞きます）。

設問 12．上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 13．履修した科目の成績評価について質問します。成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

設問 14．疑問や異議があったときは、学部教務に「成績評価の問い合わせ」を提出し問い合わせできることになっていますが、あなたはそれをしましたか。

設問 15．問い合わせをした場合、その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

［学生の主体的学習について］

設問 16．講義の受講に当たり、受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準では、２単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間にはインターネットを利用した関連情報の収集、課題やレポートの作成、外書講読・文献講読・専門英語の予習、小テストのための勉強、中間や期末試験のための勉強、研究室内でのプレゼン準備なども含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。

設問 17．大学教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。あなたは講義に対してどのような姿勢で取り組みましたか。

設問 18．実験・実習についてはどうですか。

設問 19．大学在学中のカリキュラム（教養教育も含む）の中で、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

［学生への教育支援、施設・設備について］

本学部や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんのニーズを把握するために、下記のような 10 のルートを用意しています。

1．学生センター	2．クラス担任と面談	3．指導教員と面談
4．指導教員以外の教員と面談	5．学科長と面談	6．学生総合相談室
7．保健管理センター	8．就職支援センター	9．学部長直言箱
10．学長直言箱	11．その他	12．利用したことはない

在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。

設問 20．(1) 学業

設問 21．(2) 学生生活

設問 22．(3) 進路

設問 23．本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

評　価 施　設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（４階）					
5. 学生自習室・学生控室（２階）					
6. 卒業研究を行った研究室					

設問 24．各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

［卒業研究について］

設問 25．卒業研究を行ったことに満足していますか。

設問 26．上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 27．あなたの卒業後の進路は次のどれですか。

設問 28．本学部のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。

設問 29．本学および本学部の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

［本学部の教育のあり方について］

設問 30．あなたが本学部を卒業するに当たり、大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと感じていますか（大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です)。

設問 31．上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 32．本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。

設問 33．上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

設問 34．総合的に判断して、本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

設問 35．上記のように回答した理由を記入して下さい。

設問 36．食料資源学科と国際園芸農学科の学生のみお答えください。皆さんの受けたカリキュラムは「食」（主に食料資源学科の皆さん）または「国際化」（主に国際園芸農学科の皆さん）の知識を身につける上で役立ったと感じていますか。

設問 37．上記のように回答した理由を記入して下さい。

以上の設問が実際にどのようなアンケート用紙によって行われたかを示すため、次ページに設問 1、2、24、25、26、27 を例示した。2 通りの回答形式（選択式と記述式）の実際の例を示した。

R3年度卒業学生対象　教育評価アンケート

農学生命科学部では平成14年度から卒業生・修了生を対象に教育評価アンケートを実施しています。調査結果は詳細に分析し、報告書としてまとめられ、今後の農学生命科学部の教育の向上に役立てられています。
本年度も実施いたしますので、回答へのご協力、どうぞよろしくお願いいたします。
回答はFormsで行いますが、個人の特定はできない設定にしてあります。また、このアンケートの調査内容は報告書の作成以外の用途に使われることはありません。

【回答期間】　2月8日（火）～3月23日（水）まで延長

農学生命科学部自己評価委員会

設問は、選択肢から選ぶものと、空欄に記述するものの2種類があります。前者の場合は、とくに断りのない限り、該当する番号を一つだけ選択してください。後者の場合は、指示に従い分かりやすく記入してください。

* 必須

1. あなたの所属学科をお答えください。 *

- ◯ 生物学科
- ◯ 分子生命科学科
- ◯ 食料資源学科
- ◯ 国際園芸農学科
- ◯ 地域環境工学科

2. 本学部の教育理念、教育目的及び教育目標を知っていますか。

- ◯ 知っている
- ◯ ある程度知っている
- ◯ 知らない

5/12/2022

24. 各施設に対する要望がありましたら具体的に記入してください。

25. 卒業研究を行ったことに満足していますか。

- ◯ 強くそう思う
- ◯ そう思う
- ◯ どちらとも言えない
- ◯ そう思わない
- ◯ 全くそう思わない

26. 上記のように回答した理由を簡潔に記入してください。

27. あなたの卒業後の進路は次のどれですか。

- ◯ 就職（専門関連の企業）
- ◯ 就職（専門とは関連しない企業）
- ◯ 就職（公務員）
- ◯ 就職（その他）
- ◯ 進学（本学）
- ◯ 進学（他大学）
- ◯ 自営(農業)
- ◯ その他

5/12/2022

２．調査結果

設問 1．あなたの所属学科をお答えください。

表Ｉ－ 1．各学科の卒業生と回答者数の推移

	令和 3 年度			令和 2 年度			令和元年度		
	卒業生数	回答者数	回答率（%）	卒業生数	回答者数	回答率（%）	卒業生数	回答者数	回答率（%）
生物学科	37	23	62	38	38	100	37	35	95
分子生命科学科	43	19	44	40	37	93	36	31	86
食料資源学科	56	29	52	56	46	82	55	53	96
国際園芸農学科	48	24	50	53	34	64	46	43	93
地域環境工学科	32	17	53	30	26	87	27	25	93
合　　計	216	112	52	217	181	83	201	187	93

卒業学生対象教育評価アンケートの回収率が低いと卒業生全体の現状を反映していないことになるため、毎年、アンケートの回収率を上げるためにいろいろな改善が試みられてきている。一昨年は、卒業研究発表会前の 1 月末からアンケートを実施し、卒業研究発表会の際に学科長が回収する試みを行って、回収率を約 10%上げている。昨年は、世界的なコロナ感染症の問題が発生したために、急遽、Forms を用いたオンライン回答で実施された。Forms での回答方法の改善による回答率の向上が期待されたが、回答者にとって回答方法の不慣れさのためか回収率が低く、締切直前に回答期間の延長と再度のアナウンスにより、回答率を 83%までに約 7%上げた。この回答率の改善をもとに、昨年度はオンラインでのアンケート方法の周知方法の改善による回答率上昇は十分に期待できるとの結論であったが、本年度の回収率は大幅に下がり、約半数にとどまる学科が多かった。オンラインでの方法が逆に回答しにくいのか、今後の結果をみて解析しなければならない課題である。しかし、回収率をあげることだけにとらわれすぎて、回答用紙を提出しないと講義室から出らないような方法はとるべきではない。一般的に、回答率は、回答欄が多く回答時間がかかるなどの回答方法に起因する場合、後輩の学生によりよい教育環境で学習してほしいなど先輩としての後輩への心遣いに関する問題など回答する側の意志に問題がある場合、または、双方に起因することが考えられる。

[学部・学科の教育目標等の認識について]

設問 2. 本学部の教育理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

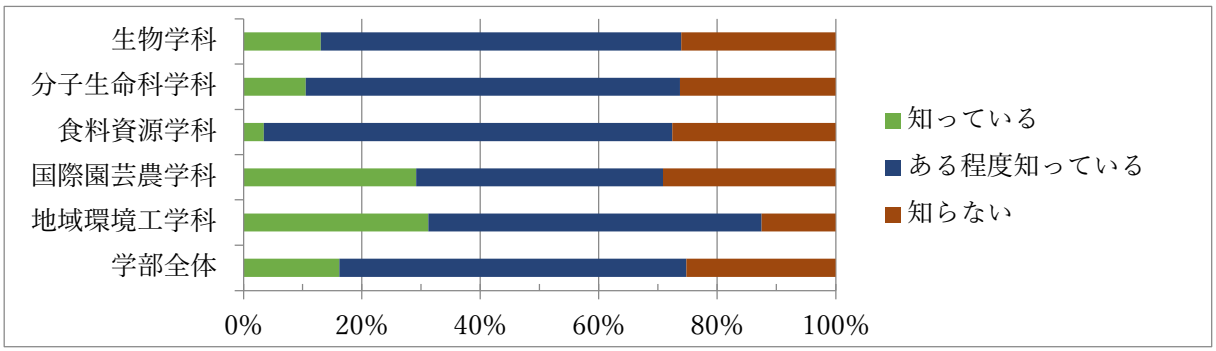


図 I－ 2a. 理念、教育目的および教育目標の認識

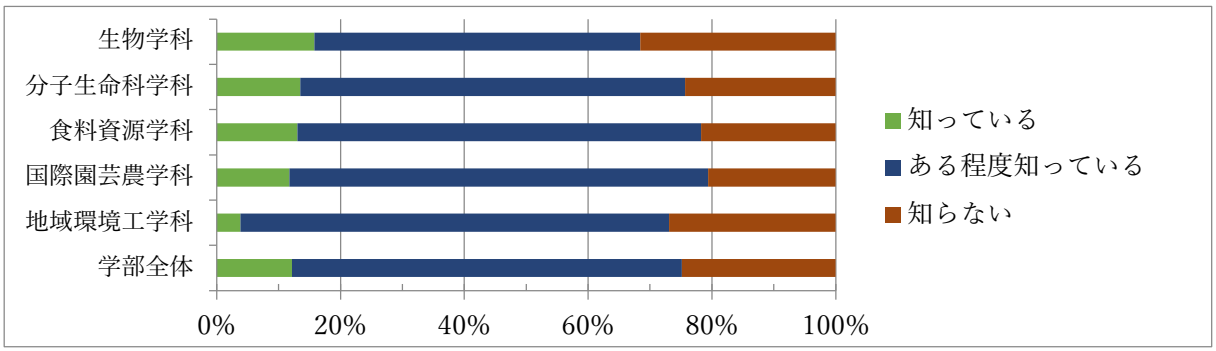


図 I－ 2b. 令和 2 年度の理念、教育目的および教育目標の認識

前年度の理念、教育目的および教育目標の認識と比較を行った。昨年度の結果は、平成 29 年度から令和元年度のそれぞれの年度での結果である 54%から大きく高くなり 7 割半との結果を得た。今年の結果も昨年度に続く 7 割半を維持した。その要因は、掲示板を利用した学生への周知効果と思われる。

設問 3. あなたが所属する学科の教育目的を知っていますか。

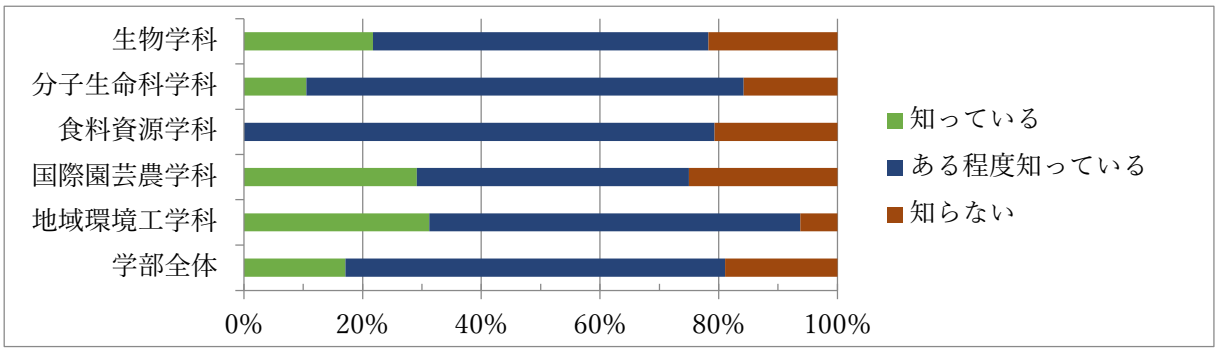
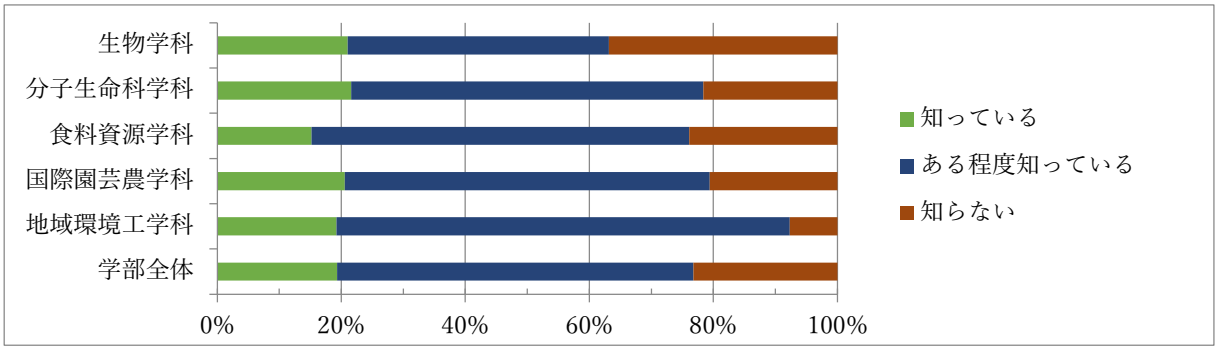


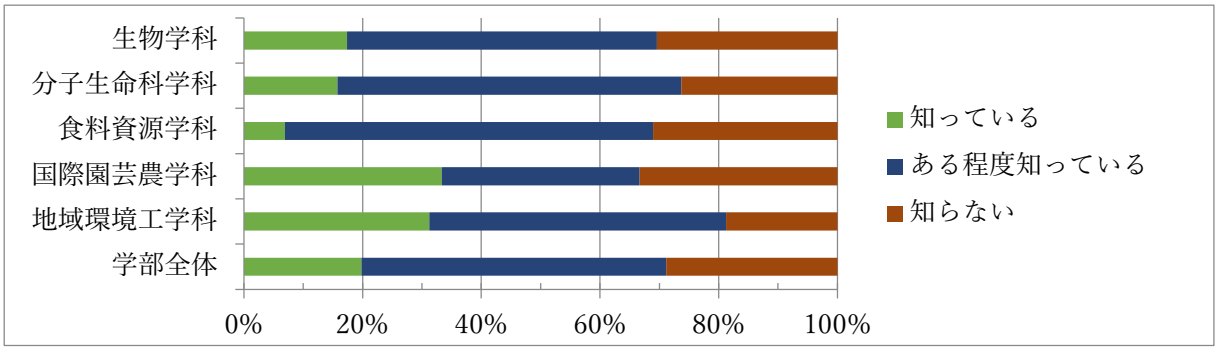
図 I－ 3a. 学科の教育目的の認識



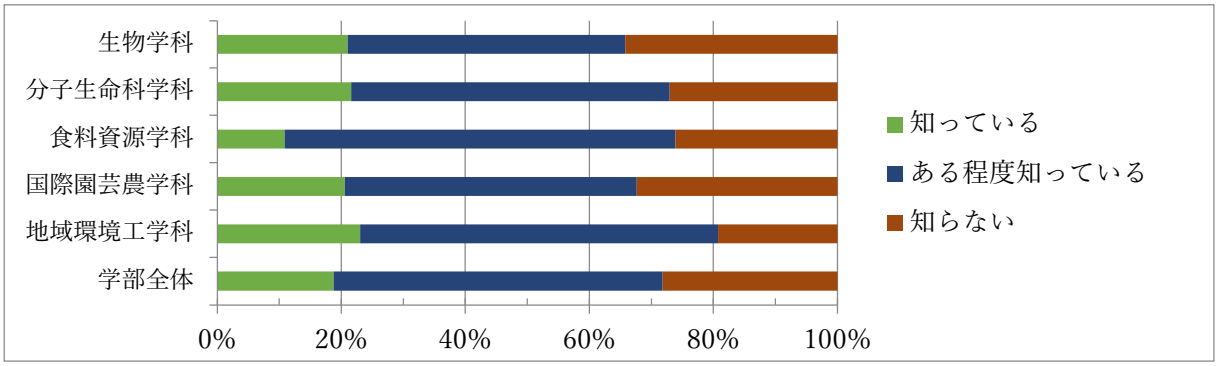
図Ⅰ－ 3b．令和 2 年度の学科の教育目的の認識

ほぼ 8 割の卒業対象学生は、学科の教育目的を「知っている」と「ある程度知っている」と回答している。調査の年度によって、多少の増減はあるが、地域環境工学科の卒業対象学生に「知っている」と「ある程度知っている」と回答する比率が高い。

設問 4．あなたが所属する学科の入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。



図Ⅰ－ 4a．学科の入学者受け入れ方針の認識



図Ⅰ－ 4b．令和 2 年度の学科の入学者受け入れ方針の認識

学科の入学者受け入れ方針の認識も、平成 29 年度から令和元年度の 45～49%から大きく上昇した前年度 72%とほぼ同値である 7 割を得た。

設問 5. あなたが所属する学科の教育目的は以下の通りですが、学科のカリキュラム（教養教育科目および専門教育科目）はその目標に合致していると思いますか。

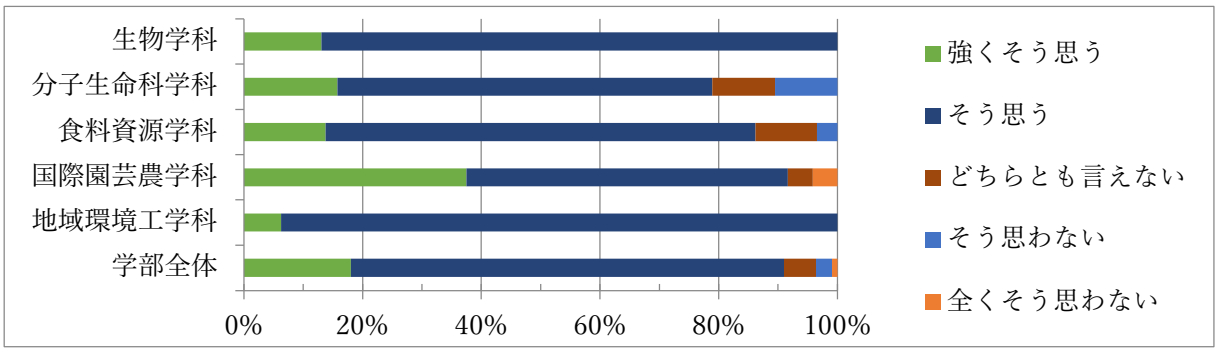


図 I－ 5a. 学科の教育目的とカリキュラムの合致

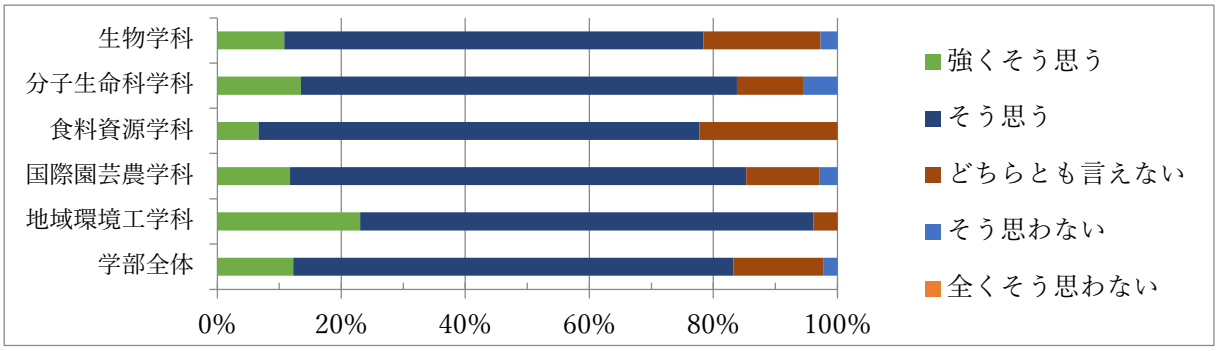


図 I－ 5b. 令和 2 年度の学科の教育目的とカリキュラムの合致

8 割以上の卒業学生が、学科の教育目的とカリキュラムが合致していると回答していた。『強く思う』と『そう思う』の肯定的な評価は、学科により多少のバラツキはあると考えても、平成 29 年度と平成 30 年度は 7 割弱、令和元年度では 8 割弱、令和 2 年度では 8 割強になり、本年度では 9 割を超えた。

設問 6. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【生物学科】

1. このポリシーを読んでこの大学を選んだから
1. フィールドに出る授業の内容も充実していた
1. 沢山のことを課外活動等を経て身に付けられたから
2. 地域と国際についてはさほど力を入れているように感じなかったが、他は目標に合致していると感じたため。
2. 4 年間で様々な分野について学ぶことができて視野が広がったと感じたから。
2. 生命的な学問の理解や専門的な知識は身に付いたと思うが、国際的に貢献できるかはわからないため。
2. 基礎についてはミクロからマクロまで幅が広いと思った。専門性の深さについては学生によると思う。
2. 授業内容が教育目的に合っていると思うから。

2. 実感、体感によるもの。
2. 十和田湖というフィールドを活用した研究を行えたため
2. 卒業研究で今まで学んだことを活かせた
2. カリキュラムと食い違う講義があるようには感じなかったため
2. 学部の目的(３)はよく分からないが、知識や考える力は増したと思うから
2. 教育目的を読んで違和感がなかったから。
2. 生物学の基礎から豊かなフィールドを活かした生態学に至るまで学ぶことができたから。
2. 他学科に比べて、基礎的な純粋な生物学を学べたと感じているため
2. 地域のフィールドを活かして専門的な知識を得ることが出来たため
2. 実際受けた教育が教育目的とおおむね合致していると感じたから.
2. ある程度授業と合致している

【分子生命科学科】
1. 実際に学んだ内容と合致するから。
1. 酵素について研究して色々わかったから
1. 貢献できるようになったと考えるから
2. 授業での学習内容は教育目的に沿っていると感じたが、自分が学習できている自信がないため。
2. 履修した内容と合っているから
2. 学科の教育目標を研究活動を通して学び、発信することができたため。
2. 授業内容のレベルが高いため
2. 講義を通して学ぶことができたと思うから
2. 実際に４年間学んだ内容だから
2. 履修した講義を通して教育目的に書かれていることを達成できたから
2. 特にありません
4. 高等学校で扱う内容の講義があり、最先端科学技術を十分に学べていないと思うから。
4. 学部の教育目的を満たすカリキュラムがほぼないと感じられた。

【食料資源学科】
1. 講義や研究室の内容と合致するため
1. 必修科目等でさまざまな専門分野をまんべんなく学べるから
1. 専門技術を身につけ、将来的にはそのような技術を生かせる職に就きたいと考えているから
1. 農業から食品まで広く、興味を持てるようになり、興味が湧いたから。
2. その目的に合うカリキュラムだから
2. 食品そのものの栄養や物質だけでなくできあがるまでの過程、またそこから起こりうる害や事故など食品について幅広く学ぶことが出来た。
2. 授業等で食品の機能性や食品の品質管理について理解が深まったから。
2. 書いてある内容と実際に学んだことがある程度合致しているため。
2. 授業内容が目的に沿っていると思うから。
2. 研究活動を通して、ある程度の専門性は身につけられたと感じるから。

2. 授業の内容が教育目的に沿っていたから
2. 授業や研究室でそれに関して学べる機会があったから
2. 専門の授業は、それにつながるものであったから。
2. 必修授業などで教わった内容と合っていると思ったから。また、研究室に所属し各々が研究に取り組むことで技術は得られると思ったから。
2. 講義や研究、ゼミを通して学べたと思うから
2. そのような授業が多かったから
2. コース選択前は農業や生物等の幅広い分野を学ぶ機会があり、コース選択後はある程度の専門的な知識を身に付けられる機会があると思うから。
2. 幅広い知識を講義で学習することができたため。
2. 専門的な内容を学ぶことができる。
2. 講義内容から
2. 食品系だけではなく、様々な知識を学ぶことが出来るため幅広い知識をみにつけることが出来たから
3. 食品以外を扱う研究室も多いため。
3. 覚えていなかったから
3. カリキュラムだけでは達成されるものではないし、カリキュラムも学生を伸ばし切るものになってないから
4. 食料とは縁遠いテーマの研究室が複数あるから。

【国際園芸農学科】
1. 教育目的に合致するような授業が組まれていたから。
1. 講義が農学全般の分野にしっかりと結びついていると公務員勉強をしていて強く感じたから。
1. 講義や研究を通じて農業、特に園芸の分野の将来を担う人材としての能力を養うことができたと思う。
1. 世界の地域の農業についてよく学べたと思うから
1. 海外研修などで国際的な視点を持つことが出来たから
1. 学んだことを実用段階までさらに深く学習できるため。
1. なんとなく
2. 農業生産領域と食と農業をめぐる社会的経済的課題を総合的に学ぶことができるようなカリキュラムだったと思うから。
2. 必修となっている講義の傾向や内容からそう判断しました。
2. 日常でそう感じる場面があった
2. 農場実習など面白かった
2. 講義で教育目的の対象について多く学ぶから.
2. カリキュラムの内容に沿った講義内容が行われていたため
2. 農場実習など、技術を学べる機会があり、経験豊富な先生のお話を聞けるため
2. 目的にある学問を学ぶことができるから。
2. 特に学科では、国際的な食料経済なども学べるし、実習や研修で身をもって学べるから。
2. 講義で農業生産領域と食と農業をめぐる社会的経済的課題を自分なりに意識し、卒業論文制作

を通して考えることができたと感じているから。

2. 講義内容から
2. 教育目標にある知識や能力を身に付けることができたと感じるため
5. 国際とはついているけど、実質国際色豊かではない。グローバルに興味がある人が入ってきたら物足りないと感じる。英語のレベルや、異文化理解のレベルが低い。

【地域環境工学科】

1. 授業内容が一致している
2. 教育目的に合った知識が得られるから
2. 授業内容が目標に合っていると思ったから。
2. 様々な部門ついて学ぶことが出来た
2. 必修科目にその教育目的らしきものが見えるため
2. 座学だけでなく見学や実習も取り入れて進めていたから
2. 専門分野を学べたため
2. 大学 4 年間を通して、授業で学んだことが、どのように活かされていくのかを少しながら知ることができたから。
2. 関係ない授業も一部必修になってるため
2. 一つの物事に対して多面的に指導してもらえたから
2. 農業土木技術者として必要とされる知識を学ぶことができたから
2. 専門を学ぶ科目が豊富だから

[学科の専門教育について]

設問 7. 本学部では年度初めに学年毎にガイダンスを行っていますが、ガイダンスの内容は適切だったと思いますか。

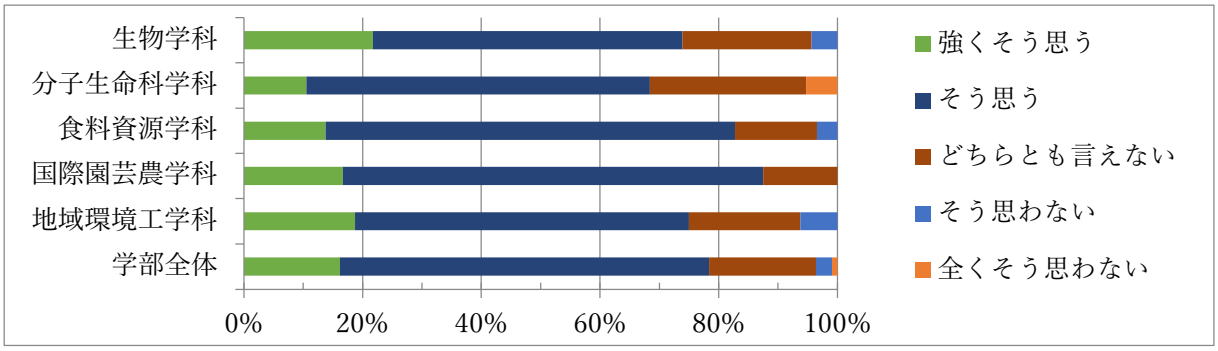


図 I－ 7a. ガイダンス内容が適切だったか

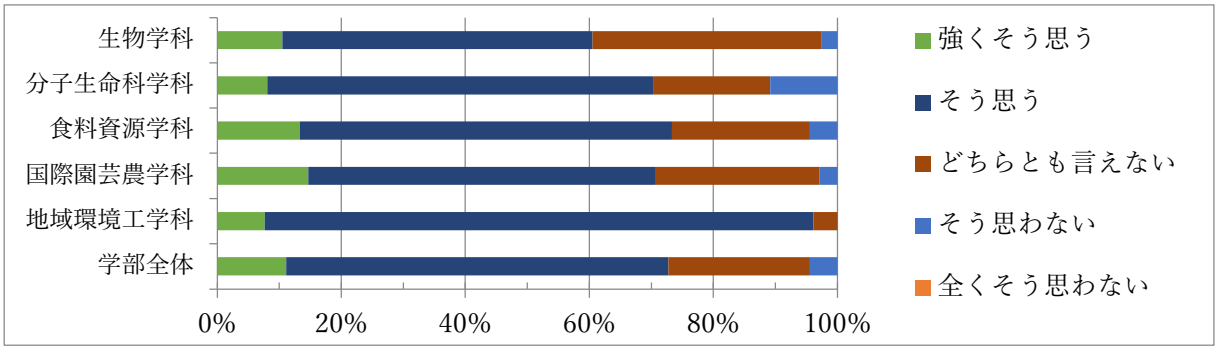


図 I－ 7b. （令和 2 年度実施例）ガイダンス内容が適切だったか

学年初めに行っているガイダンスの内容の適切性を問う質問に対して、最近 3 年間では 7 割強の卒業学生が、『強く思う』または『そう思う』と肯定的な評価をしてきており、今年度においても 7 割ないしは 8 割近くの卒業学生が肯定的な評価をしている。昨年度の結果で、地球環境工学科がやや高く、生物学科がやや低いとの結果であったが、他学科での実施年度による変動を考えあわせると、実施した年度によるバラツキである可能性が高いと思われた。

設問 8. シラバスは受講科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

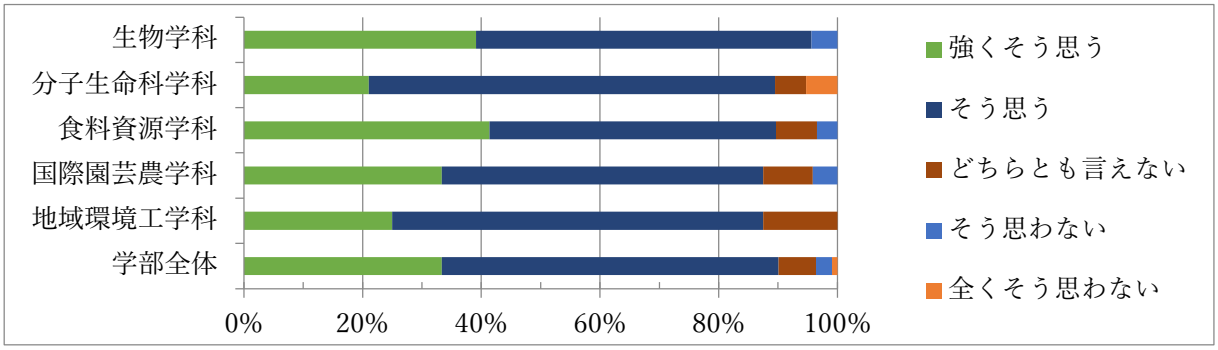
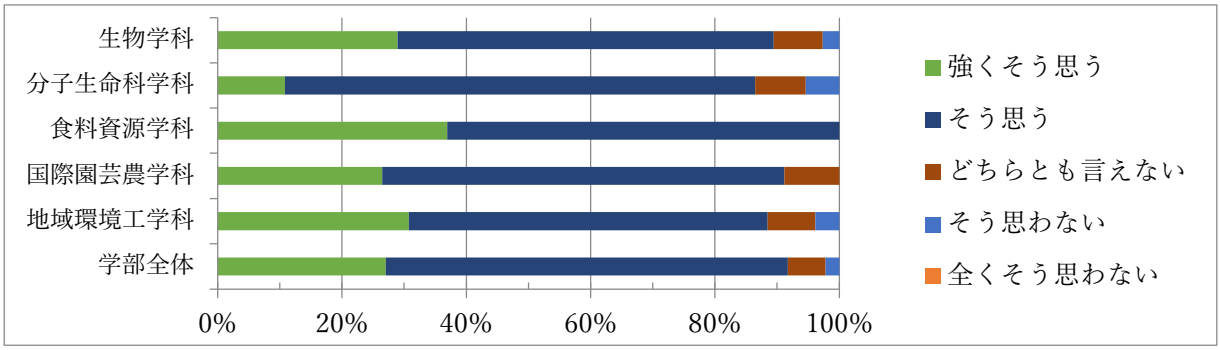


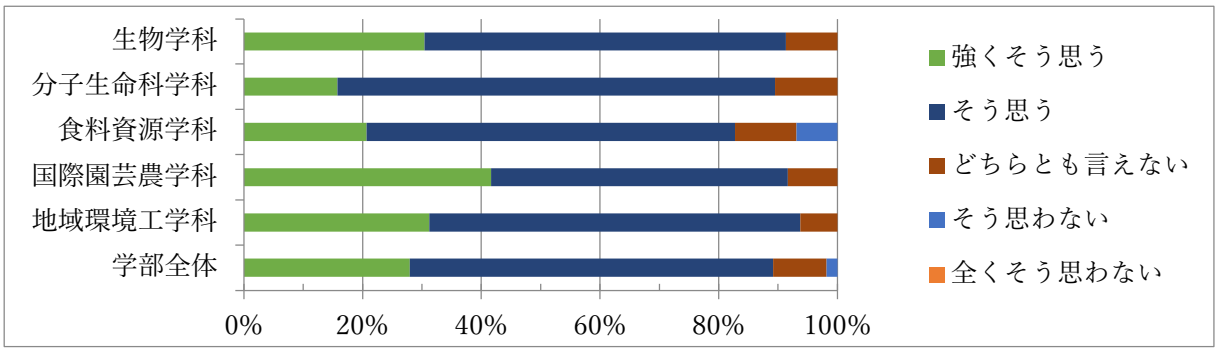
図 I－ 8a. シラバスは役立ったか



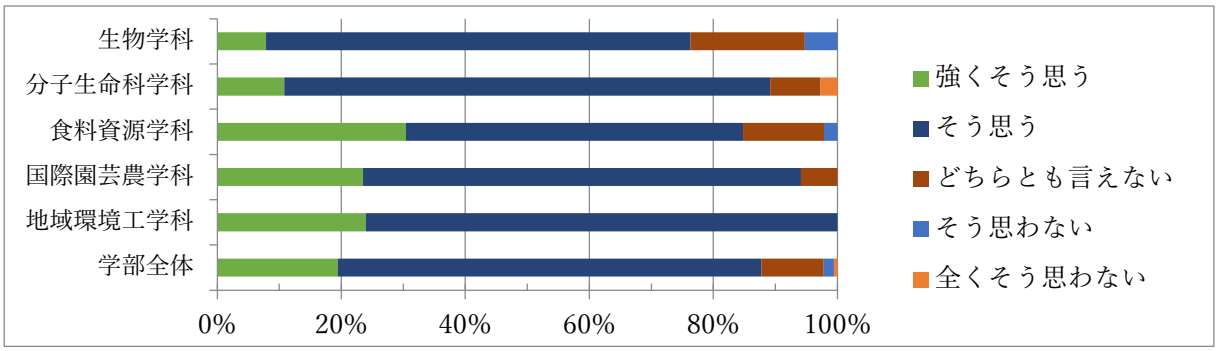
図Ｉ－ 8b.　（令和２年度実施例）シラバスは役立ったか

例年、肯定的な意見の回答比率は高く、ここ３年間では８割から９割を占めている。したがって、シラバスが受講科目の選択や授業の全体的な把握に役立っていると考えられる。

設問 9.　あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか。



図Ｉ－ 8a.　あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足しているか



図Ｉ－ 8b.（令和２年度実施例）あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足しているか

８割から９割の卒業学生が、自分が所属している学科での専門教育に満足している結果を示している。本学部卒業学生全員の肯定的な評価の比率の変化を調べたところ、平成 29 年から令和元年度では８割であったに対し、ここ２年間は９割近くに届くまで上昇している。

設問 10. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【生物学科】

1. 選択科目をある程度自由に選べたのが良かった。興味のある講義は全て受けることができた。
1. 無事に卒業できそうだから
1. 興味のあった生物学について学べたこと、加えて、別の分野に特化した人とも触れ合えたため
1. あらゆるスケールの生物学についての知識が増えたと思うから。
1. いままでにない専門知識を学べたから
1. そこまで特に不満を感じたことがなかったから
1. 生物学の様々な分野を学ぶことが出来たため
2. 特に不満はなかったため。
2. 興味がない、と思っていた分野でも面白いと感じることが出来たため
2. 農生の他学科と比べると、教員による授業の質のムラが小さいのではないかと思う。
2. 幅広く生物学に触れる機会を得られたから。
2. 実感、体感によるもの。
2. 学びたかった学問分野を学べたから
2. 特に研究室において専門性の高い教育を受けられたと感じるため
2. 十分な教育を受けられたと感じたから。
2. 生物学のさまざまな専門的分野に触れることができたから。
2. 理解しやすい授業と、工夫してもらいたかった授業があったため
2. やりたい研究はできたし、学びたいこともある程度学べたから.
2. 新たに学びを深められた
3. そうである授業もそうでない授業もある
3. 講義の内容に惹かれないことが多かったから

【分子生命科学科】

1. 面白かったから
1. オンラインでも対面でも熱心にご教授して頂けたから。
2. 面白いと感じる授業がいくつかあったから。難しくて理解し切れていない内容もある。
2. 広い範囲の学問を学べたから
2. 化学系が多く、生物分野の勉強をもう少ししたかった。
2. 指導教諭のレベルが高いため
2. 学びたいことを深く学ぶことができたから
2. 自分が学びたかった学問の理解を深めることができたから
2. 分子生命について幅広く学べたから
2. 高度で実践的な内容だったから。
2. 幅広い分野を学べたから。
2. 特にありません
3. 実験などの専門技術は研究室所属後に身につけることができたと感じられるが、それまでに得た専門知識で印象に残っているものは少ないため。

【食料資源学科】

1. 食品に関する事柄を幅広く学べたため
1. なんだかんだで楽しかったから。
1. オンラインでも満足に学ぶことができたから
1. わかりやすい上に楽しかったから。
2. 専門教育で自分が興味のある分野の理解を深められたから
2. 配属された研究室に縛られず、様々な分野の授業を受けることができた。
2. 入学時とのギャップは少なく、専門性を高めるのに役立った。
2. 学びたかったことがある程度十分に学ぶことができたため。
2. 勉強した分だけ知識が付いたし、日頃の生活で役立つこともあったから。
2. 専門的な授業があったから
2. 実習がオンラインだったため、実践を身につけることがあまりできなかった。
2. まんべんなく色んな分野を学べる所は良いが途中で他の学科の講義も興味が湧いたとき現学科の必修の講義と被っていると受けられないから。
2. 楽しく学習できた
2. シラバスを見て受講したい講義があっても、重複することが少なく、受けたいと思った講義を受けることができていたため、ある程度満足している。しかし、内容が重複している科目が多いことに加え、先生方も情報共有されていないことによる教わることの重複と簡略化が起こっていたことが気になった。
2. 実習をもう少し充実してほしいから。
2. 専門的な内容を学ぶことができた。
2. 試験が難しい科目もあったが、それ故に知識がしっかり身についたと思うから
3. 満足度が高くない
3. 専門教科にも様々な分野があり、興味のないものもあったから
3. 今後の役にたてられなかったため
4. 仕方ないのですが、実習などがオンラインになってしまい、実際に体験できなかったから。
4. 教授の大半が受動的な姿勢の講義なので学生がそれを能動的に学ぶわけがないので

【国際園芸農学科】

1. 自分が学びたかったことがたくさん学べたから。
1. 基礎から専門までの流れがきちんとしていて、体験しながらも学べるから。
1. 専門的知識に加えて教授の方々が蓄えている知識、経験に基づく考え等を聞けたから
1. 農業の生産に関わる分野と経済的な分野を学ぶことができた。
1. 実際に海外に行く機会もあり、実践的に学べたと思うから。
1. 他学部学科と比べ、テストやレポートにおける理不尽さが低いため
1. 興味深い講義が多く、特に実習は農業の知識を体験を通して学べる良い機会だったと考えるため
1. なんとなく
2. 専門的な知識が身に付いた
2. カリキュラム通りであり、大変勉強になったから。ただ、統計学のように生徒が置いていかれ

ても先生が何も気にせず進めてテストが散々な人ばかりな事があったから。
2. 海外研修入門でリンゴ農家をまわれてよかった
2. 取りたかった授業は受けられたため。
2. 園芸と農業経済を幅広く学ぶことができたため
2. ほとんどのカリキュラムを対面で受けられたため
2. 不満はないから。
2. 講義内容から
2. 農場実習でそれまで体験したことがないことを経験できたから
2. 英語以外の農学分野は概ね満足している。
3. 先生によるから。
3. もう少しひとつひとつの科目に時間をかけて学びたかった

【地域環境工学科】
1. 就職後も役立つ内容だと感じるため。
1. 教員が分かりやすく対応してくれたから
1. 授業内容が一致している
1. とても興味深かったから
2. 教育目的に合った知識を得られたから
2. 専門的知識が身についた
2. 専門分野の知識のきっかけを学べたため
2. 知識はそれなりに身についたと思うため
2. 大体は理解できて、就職後も役に立つものだから
2. 特に不満がないから
3. 内容が完璧に理解出来ていない部分があったから

[教員の指導について]

設問 11. 所属する学科の教員の、講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足していますか（卒業研究については設問 25 で別に聞きます）。

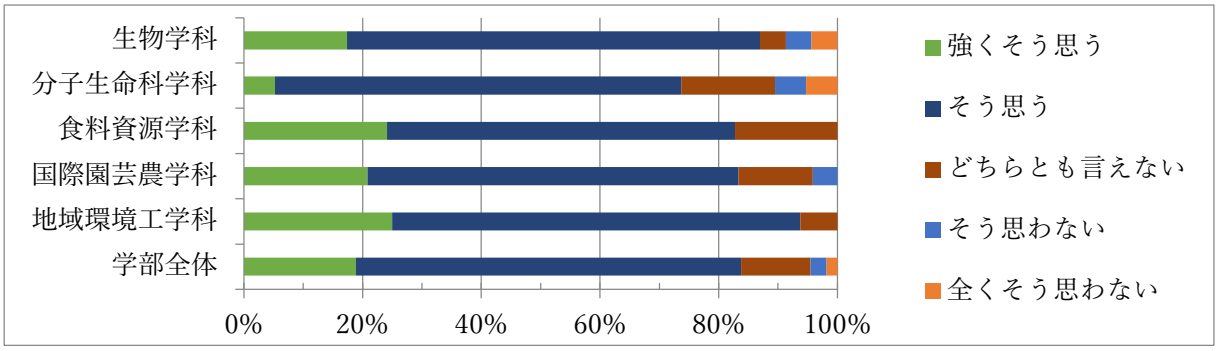
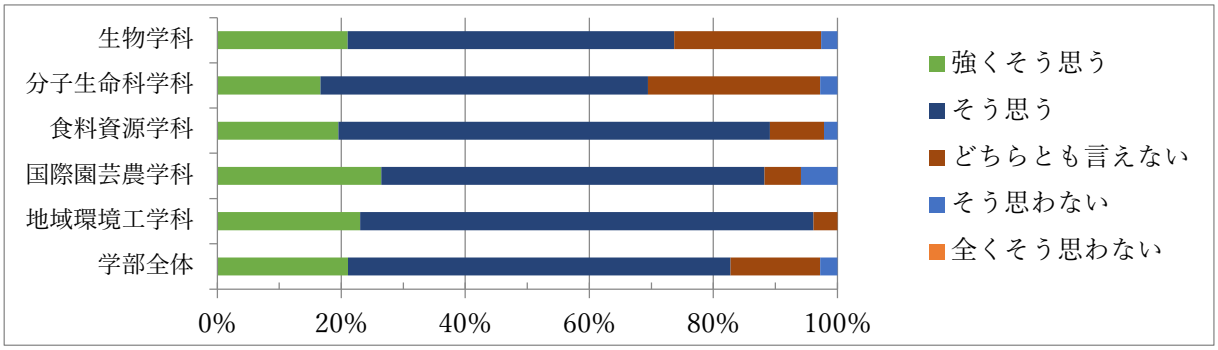


図 I－11a. 教員の指導や対応に満足か



図Ⅰ－11b.　（令和２年度実施例）教員の指導や対応に満足か

図Ⅰ－11a と図Ⅰ－11b を比較すると、実施年度により変動はあるが、『強くそう思う』が約２割で、『強くそう思う』または『そう思う』の肯定的な評価は８割前後と判断される。平成 27 年度の 69%から実施する年を重ねるにつれて微増ではあるが増加し続けてきている。現在では、８割強の卒業学生が、講義・実習・演習などでの所属学科の教員の指導や対応に満足している結果を示した。学科別では、地域環境工学科での肯定的意見が多かった。

設問 12. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【生物学科】

1. 色々勉強になったから
1. 親切にしてもらった方がたくさんいるので
1. 学生との距離が近くてよいと思った
1. どの教科も丁寧に対応してくださったから
2. 概ね満足しているため。
2. 授業や実験演習については教員によって熱意の差があり、レポートの指導まで面倒を見る教員もいる一方放任する教員もいた。森林生態実習と臨海実習は各教員の専門知識を実体験と共に教わることができ、非常に満足度が高かった。
2. ほとんどが適切な指導だったと思うから。
2. 実感、体感によるもの。
2. スライドなどを用いてわかりやすく学べたから
2. 少なくとも私は、何事もなく単位の取得ができたし、疑問等の解消にも十分なお力添えがいただけたと思っているため
2. 迷惑をかけることがあったが、真摯に対応していただいたため
2. 不満の残る指導を受けたような記憶は存在しないため
2. 教え方が分かりやすい人と分かりにくい人がいたから
2. 特に不満なことがなかったから。
2. わからないことを質問した際によく答えてくれていたから。
2. 疑問に真摯に向き合ってくれたから
2. 分かりやすく指導してくれたため
2. 専門的に広く学べたから.

3. かなり個人差があると思う。
4. 学生と教員の立場が平等でないと感じる場面がある
5. 何が言いたいかわからない。

【分子生命科学科】
1. 質問等、わからないところに対して答えてくれたから
2. 特に不満がないから
2. 先生方によって異なるから。
2. 熱心に指導していただける先生がいたから
2. 特に研究室の先生に大変お世話になったから
2. 丁寧でわかりやすかったため。
2. 質問に丁寧に答えていただいたから。
2. 特にありません
3. 教員の方々によって基準に差があると感じ、どうするのが正解か困ることがあるから。
3. 専門的な検索ツール(論文検索サイト、その他のデータバンクなど)について事前に説明をするだけでも、講義や実習の内容について学生自身で更に学びが深められたと思うため。
3. 教員によっては対応が満足した人もそうでない人もいるから
4. 性格の悪いネチネチしたひどい教員がいるため。

【食料資源学科】
1. ちゃんと対応してくださる先生が多かったから
1. コロナ下で学校での加工学実習は行えなかったが、オンラインでの対応が考えられていたため。
1. しっかりと対応してくださっていると思う。
1. 丁寧に指導してもらえたから
1. ご指導いただいた教員には大変おせわになりました
1. わかりやすいから。
2. 授業外でも授業について訪ねに行ったら丁寧に教えてくれた。
2. 親切で話しかけやすい先生が多かった。
2. 丁寧に指導いただき、わからない点などについても理解できるまで教授いただいたため。
2. 真摯に向き合ってくださる先生方が多かったため。
2. 授業がわかりやすかった
2. 総合的には良かったから
2. 特に問題はなかったから
2. 親切だった
2. 楽しく学習できた
2. 少ない時間の中でも重要なところをおさえられるよう工夫されていたから。
2. レポートや小テストの実施があってよかった。
2. わかりやすい講義内容だった

3. 質問しても自分で調べなさいということが多く時間がかかったため
3. 学生の理解度を考えず、自分のペースで授業を進める教員もいたため。
3. テストや小テストが基本的に難しいものが少ないので、もう少し難化させると、勉強への学習意欲が出ると感じたから。
3. 先生方によって、対応の丁寧さやわかりやすさ等が大きく違うため。
3. 先生によって差があるように感じるから

【国際園芸農学科】
1. 講義内容から
1. 丁寧な対応をしていただいたため
1. なんとなく
2. 講義を受ける上で問題に感じた点がなかったため。
2. 熱心に指導していただいた
2. きちんとレポート等見てくれた
2. 特に不満もなく講義などが受けられたから。
2. 人数が少し多いからか先生が一方的に話している印象がある。ただ、態度や口調は優しい方が多く講義自体は勉強しやすいから。
2. する事が分からず困惑する時間はあまりなかったから。
2. 特に不満がなかったため
2. 配布物や添削が適切だったし、個別での相談にも乗ってもらえた。
2. 不満はないから。
2. どの先生にも丁寧に指導していただきました。
2. 講義内容を理解するためにサポートしてもらえたから
2. 全体的には講義の膿瘍に満足しているが、教員によって講義のレベルに大きく差があるように感じた。
2. 班で行うことでみんなで協力し合いながら先生に聞きながら学習できたから
2. 外での実習がかなり充実していた。
3. 先生によるから。
3. 講習などの機会は少なかった。
4. パワハラ、セクハラ、ストーカー、アカハラ、人格否定を多く目撃したし、私自身も性差別的な対応や人格を攻撃された。生徒との距離について、感覚がおかしい先生が多いと思う。ゼミや授業でみせる自分が全てでは無いし、みんなさまざまな理由や考え方がある。そのような理屈が全く理解されていないようだ。後輩には、このコースに参加することを本当に勧めたくない。

【地域環境工学科】
1. 専門知識が身についたと思うため。
1. 問題なく生活できた
1. 丁寧に教えてもらったため
2. 熱心に指導していたから

2. コロナ禍でも工夫した授業を受けることが出来た
2. 補講などの対応が見られたため
2. 適切な指示がなされていたと思うため
2. 分かりやすい授業が多かったため
2. 丁寧に指導頂いたため
3. 多少分かりにくいことがあった

設問 13. 履修した科目の成績評価について質問します。成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

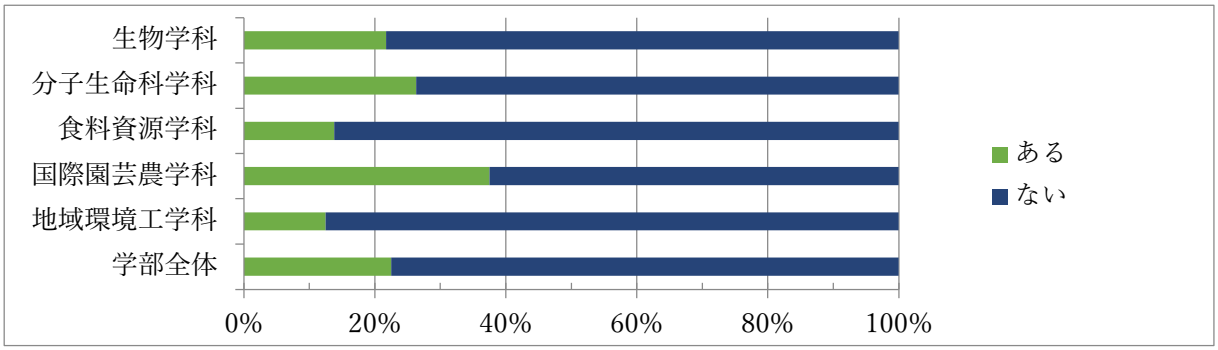


図 I－ 13a. 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはあるか

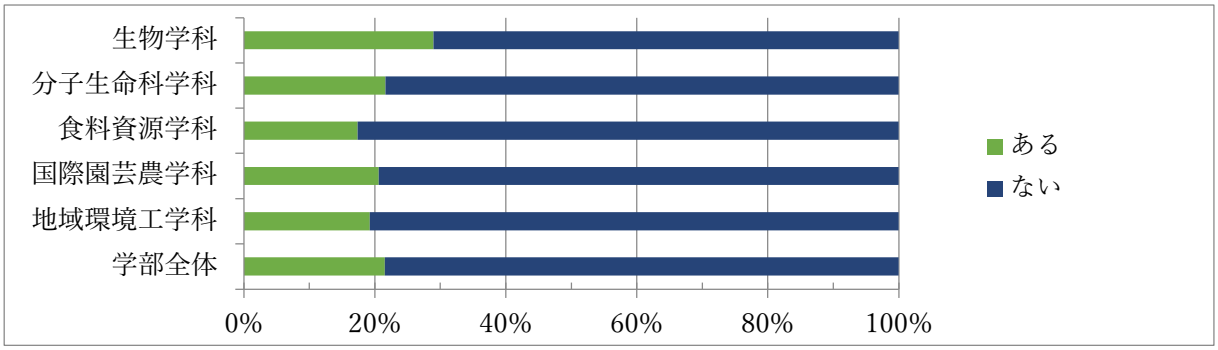
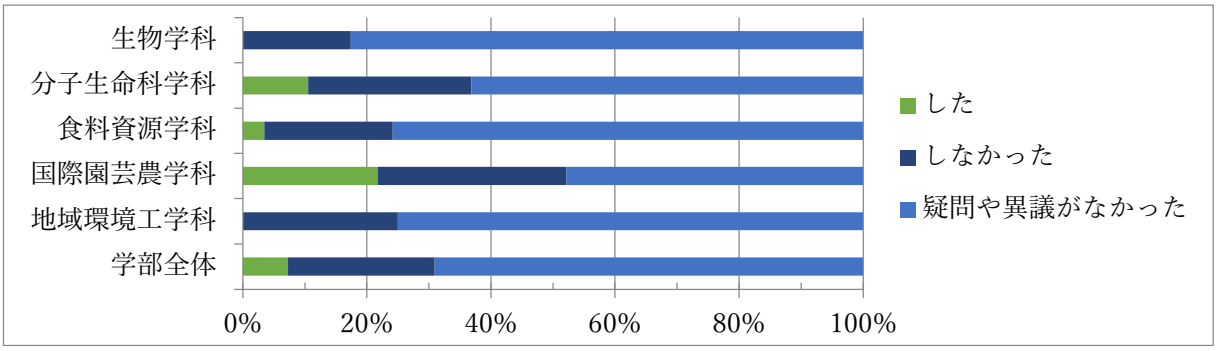


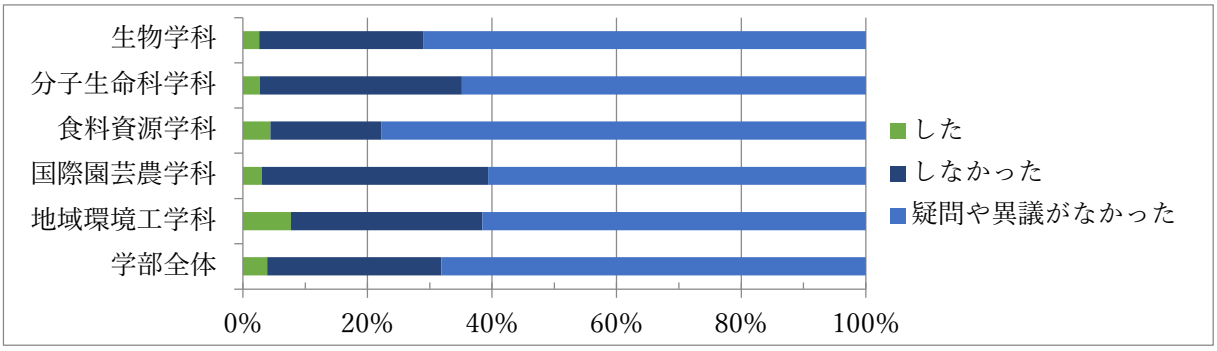
図 I－ 13b. (令和 2 年度実施例)成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはあるか

成績評価結果に疑問や意義をもった経験がある卒業学生は、約 2 割に上った。この比率は、昨年同様であった。

設問 14. 疑問や異議があったときは、学部教務に「成績評価の問い合わせ」を提出し問い合わせできることになっていますが、あなたはそれをしましたか。した場合、その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。



図Ⅰ－ 14a. 成績評価の問い合わせをしたか



図Ⅰ－ 14b. (令和 2 年度実施例)成績評価の問い合わせをしたか

設問 15. 問い合わせをした場合、その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

【生物学科】

1. 曖昧なものもあったが満足できた。
1. 具体的な点数を教えてくれたから
3. したことがない。

【分子生命科学科】

具体的な記述なし。

【食料資源学科】

1. 欠席回数の把握不足ということがわかり満足できた。
2. していない

【国際園芸農学科】

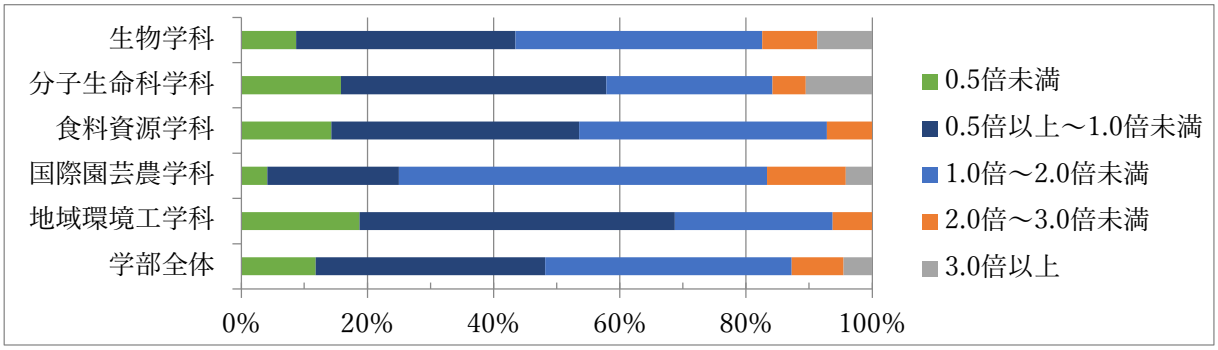
1. 満足した。ちゃんと評価が上がっていたから。
1. 教養科目で先生側の処理ミスによる不可だったが、すぐに謝罪と訂正があったため助かった。

1. 授業に全て参加し、試験も自信があったのに評価が不可になっており、問い合わせたらミスだったことがわかり、修正してもらい満足した。
1. 概ね満足しました。私の捉え間違えだったので。

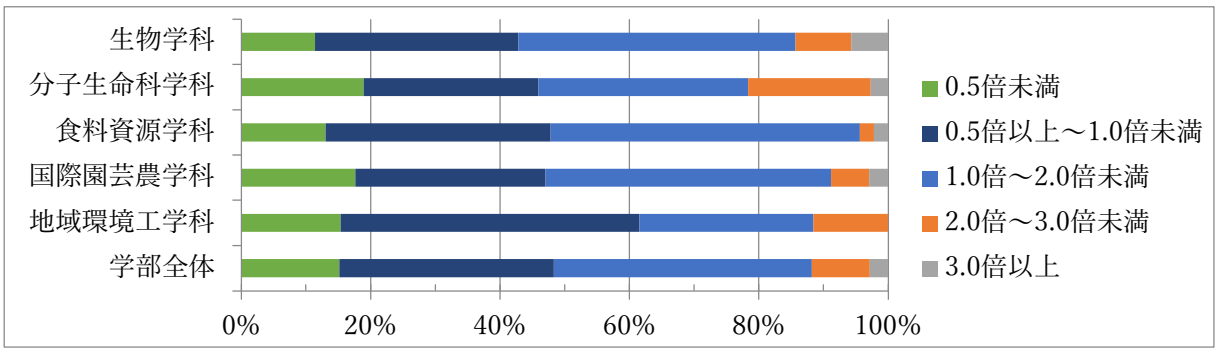
【地域環境工学科】
具体的な記述なし。

[学生の主体的学習について]

設問　16. 講義や演習の受講に当たり、その講義の受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準では、2 単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間にはインターネットを利用した関連情報の収集、課題やレポートの作成、外書講読・文献講読・専門英語の予習、小テストのための勉強、中間や期末試験のための勉強、研究室内でのプレゼン準備なども含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。



図Ｉ－16a. 1日平均どの程度の時間を予習や復習に充てたか



図Ｉ－16b. (令和 2 年度実施例)1日平均どの程度の時間を予習や復習に充てたか

ほぼ例年通り、「1.0 倍未満」の割合が約 5 割であり、少なくとも平成 30 年からほとんど変化がない。「1～2 倍未満」と回答する割合が 4 割、「2.0 倍以上」の割合が約 1 割である傾向は、例年ほとんど変わらない。

設問 17. 大学教育では、 学生自身の主体的、 意欲的な学習が要求されます。あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

講義室外での学習時間が講義時間の 1 倍以上と回答した学生の割合は約半数以上に上り、講義室外での学習が講義時間の 0.5 倍未満と回答した学生数は 1 割から 2 割であったことは、昨年度とほぼ同様な比率である。

ここの質問項目では、講義に対しての主体的な学習や意欲的な学習を対象としているので、単位を取り進級することを最優先にしたなど単位を取得することのみを目的とした記述が目立った。

【生物学科】

・基本的には前向きな姿勢であった。
・講義の内容を通して教員がなにを伝えたいと思っているのか汲み取ろうという姿勢。
・真剣に取り組んだ
・質問などはあまりしなかったが、意見を言うべきところなどではきちんと答えていたと思う
・必要な知識量や授業スピードに合わせ、予習もしくは発展的な内容の自主勉強などをしていた。
・講義の内容を忘れないためにメモを取ることを意識した。
・主体的に取り組んだ。
・自信が興味のある講義については授業外でも学習した
・欠席だけはしないと決意し、より高い評価がもらえることを重視して取り組みました。
・少し受け身な姿勢だった
・予習はほぼしなかったが、復習はしっかりやるようこころがけた。
・なるべく質問するという意欲をもって抗議をきちんと聞いた
・主体的ではなかった
・興味を惹かれた科目に対しては自発的な学習に取り組んだ。
・意欲はあまりなかったと思う。
・疑問点は自分で調べ、わからなければ積極的に質問するように努めた。
・寝ないで聞く姿勢
・欠席も少なく積極的に取り組めたと思う
・興味のある分野は積極的に学習した.
・あまり意欲的でなかった

【分子生命科学科】

・予習はあまりしなかったが、自分が苦手な科目は図を見直すなどして復習に力を入れるようにした。
・理解し身につけられるように話を聞いた
・質問し、わからない点を早めに解決するようにした。
・積極的に質問した。
・専門科目にはまじめに取り組んだ
・授業をきっかけに興味を持ったことは自主的により詳しいところまで勉強した
・主体的な姿勢で取り組んだ。

・学んだことのない内容に関しては吸収して自分のものにしようと取り組みました。
・講義のノートをとり、復習としてノートをもう一度まとめる。友人に質問されたら回答することで理解を深める。
・真摯な姿勢
・自分なりに意欲的に
・真摯な姿勢で取り組みました
・主体的に予習をした。

【食料資源学科】
・受動的だった
・全く分からない内容においても授業に行く前に教科書を読んで授業に行った。
・あまり意欲的ではなかった。
・その講義によって変わる。
・単位を取り進級することを最優先にしていた。
・授業でわからない内容・授業に関連した事柄などを文献・ネットで調べるという姿勢で復習を重視していた。
・ご教授いただいたことについて、受け身になるだけでなく、疑問点を見いだしたり、更なる深い知識を得ようといていた。
・意欲的な姿勢
・疑問を持って取り組んだ
・テストが取れる程度の学習
・ノートを取ることはしていたが、質問とかはできてなかった
・楽しんで受けた。
・疑問に思ったことはネットで調べたり友人に聞いた。
・意欲的に取り組んだ
・次の講義内容をシラバスで確認してある程度予習をしていた
・講義を聞いていて気になったことについては、メモをして調べるように意識した。また、日常的なニュースでも講義で習ったことを意識するように自然となっていた。
・講義の内容に疑問点がないかを意識し、あれば、調べたり、担当教員や友人に聞いた。
・しっかり聞く。
・講義を聞いてみて興味があれば意欲的にしていたと思います
・興味があるという姿勢。
・主体的
・レポート課題が出された際は、図書館にいき、複数の資料を読んで理解を深めるように取り組んだ。

【国際園芸農学科】
・意欲的に取り組んだ
・講義の板書をとり、帰宅後に復習をしていた。
・もう少し真面目に取り組むべきであったと思う

・きちんと聞きました
・講義内容を理解しようと努力した。
・聞き逃しまいとひたすらメモをし、後悔しないようテストに備えていた。
・講義についていかなきゃ
・その講義内の疑問点をメモした。
・一定ではないものの意欲を持ち続け、学習に取り組んだ
・メモを欠かさず取り、先生の声が聞こえやすいよう出来るだけ前の席で受けていた。
・講義で教えられるものを一つも漏らさないように、集中して受けていた。
・特別な理由がある時以外は遅刻・欠席しなかった。
・講義で伝えられた内容は忘れないように努めました
・他の学生に比べて勉強する時間も多く、講義に関する質問も多くしていました。
・積極的に取り組んだ。
・分からないところは調べて復習した
・みんなで意見を出し合って答えを導けるように主体的にできた
・わからないことは基本的に自分で調べて、それでもわからないなら友達、教員に質問する。）
・非常に意欲的だった。農生の授業だけでなく、他学部の授業もよく受けていた。
・専門的な知識を身に付けるため積極的に講義に参加した
・行われた講義に対して深い理解を出来るように意欲的に取り組んだ。

【地域環境工学科】
・受身な姿勢
・他の科目との関連を意識し、取り組んだ。
・課題はしっかり行った
・主体的ではなかったかものが多かったかと感じる
・やや受動的だったと思う
・それなりにがんばった
・集中して取り組んだ
・重要なことは基本メモするようにした
・資格取得に必要な知識を身につけたい
・予習と復習がちゃんとやっていました
・課題に対する予習や試験に対する勉強
・将来的に使う知識だと思い、取り組んだ

設問 18. 実験・実習についてはどうですか。

実験・実習に関しての主体的学習について問う項目である。実験や実習を『楽しめた』という記述が散見される一方で、『面白くない』との記述もあった。学科全員が受講生になる実験・実習は、すでに行われていてその結果がある程度わかっている題材であることが多い。したがって、新しい知見を見出した達成感を味わえることは少ないが、受講生自身が今まで知らなかった事実を直接体験することができる。その点で、講義に関する主体的な学習よりも積極的に取り組んだとの回答が多かった。

【生物学科】

・研究室配属前のお試し実験としては満足できる内容だった。
・指示通りに行動できるように話をしっかりきく姿勢。
・真剣に取り組んだ
・比較的積極的に取り組んでいたと思う
・意欲的に取り組めたと思う
・生物学を純粋に楽しみながら取り組んだ。
・主体的に取り組んだ。
・意欲的に取り込み、レポートを提出した
・周囲の人と交流しながら、高め合うことを意識して取り組みました。
・意欲的に取り組んだ
・学生実験だけでは研究室配属後のイメージが全くできなかった。
・細かな手順や気を付けるべきところを先生、先輩方に自分から質問しにいった
・上に同じ
・楽しく取り組んでいた。
・積極的に手を動かすようにした。
・教科書で学ぶよりも実感があり、とても満足出来た
・自分で考えて先生に質問できたと思う
・指示に従い，その内容を理解しようと勉めた.
・あまり意欲的でなかった

【分子生命科学科】

・とりあえず進めるので精一杯だった。なぜその操作を行っているか理解できていないことが多かった。
・理解が進むように過程を確かめながら取り組んだ
・なし
・積極的に仲間と討論しながら行った。
・有意義だった
・主体的な姿勢で取り組んだ。
・率先して器具の準備や実験を行いました。
・自分だけではわからないことが多すぎたため、同一班のメンバーで内容の確認を複数回行い、理解できるまで教え合った。

・楽しかった
・自分なりに意欲的に
・実際に手を動かして学習するので身につきやすいと思います
・自分が率先して実験を行った

【食料資源学科】
・意欲的だった
・実験を行う前に前例をよく調べ、結果の予想をよく行ってから実験を行った。
・実験自体には意欲的に参加したが事前学習や実験について調べることは少なかった。
・その後の研究室でも役に立つ実験はあったので、いいと思います。
・インターネットや書籍で様々調べていた。
・どのように実験を進めていくか、指導教員と相談しながら、うまくいかなかった場合はどのように実験を行ったらよい結果が出るかを考えていた。
・少し内容がハードな時もあったが率先して行動した。
・積極的に取り組んだ。
・実験の意義を明確にするようにした
・実験はTAの人の助けを借り、スムーズに行えた
・オンラインになってしまった部分は実践する機会がへって残念だったけど、学生実験は身になった。
・勉強になった。授業で習ったことを実際に手を動かすことで記憶に残りやすくなった。
・少しでも成果が出るよう努めた。
・意欲的に取り組んだ
・教授やアシスタントから丁寧に指導してもらったので技術を取得できた
・自分なりの考察をした上で、友達とディスカッションしてより考えるようにしていた。
・分からないことは聞きながら、積極ｔ歴に取り組んだ
・実験の結果に対する考察をするために、関連する知識を調べ、深い理解に努めた。
・手順通りにこなす。
・あまり意欲的ではありませんでした
・楽しかった。
・主体的
・あんまり主体的には取り組まなかった

【国際園芸農学科】
・自ら疑問に思ったことは質問するようにしていた
・指示されたことに取り組み、帰宅後に何をしたかまとめていた。
・熱心に取り組んでいたと思う
・しっかり受けました
・実習内容を理解して、自分でも行動できるように努力した。
・ヒヨコの解剖など興味深いものが多く、同じ班の人と協力しつつ積極的に取り組んだ。
・疑問点をつくり、先生の発言に注意して聞いた.

・意欲的に取り組めていた
・家畜の世話など命を扱う講義では不明な点をすぐに聞くようにしていた。
・ミスの無いように、教授の説明を集中して聞き、実験中も手順を確認しながら行った。
・体を使って身をもって楽しく学べました。
・貴重な体験なので指示に従い丁寧に取り組んでいたと思います
・17 の質問と同様です。
・意味を理解しながら進められた。
・非常に有意義だった
・なかなか経験できないことが多かったので、チームで考えながら取り組めた
・オンラインで実習では IOT 機器を扱う良い機会となった。海外研修は充実していたが、もう少し事前準備や知識を取り入れてから渡航すべきだと思った。分野についての知識が乏しいまま研修に行ってもただの海外旅行に過ぎないのではないか。
・実験は正直面白くない。
・自ら道具の準備や片付けを率先して行い、担当教員ともコミュニケーションをとりながら活動に取り組んだ
・安全に気をつけ、人為的失敗が起こらないよう細心の注意を心掛けた。

【地域環境工学科】
・受身な姿勢
・チームでの役割を考えながら取り組んだ。
・teams が多かったがレポートを通して理解出来た
・受動的なものが多かったかと思う
・やや受動的だったと思う
・それなりにがんばった
・楽しく取り組めた
・オンラインだったので、少し難しい状況だった
・協力して効率的に進め、結果を調べよう
・楽しみに、たくさん勉強しました
・授業を復習し真剣に臨んだ
・講義と同様、真面目に取り組んだ

設問 19. 大学在学中のカリキュラム（教養教育も含む）の中で、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

生物学科では臨海実習、分子生命科学科、食料資源学科、国際園芸農学科では海外研修入門が、複数名の卒業学生が印象に残った科目としてあげている。

【生物学科】

・芸術－音楽と哲学Ａ－作曲を通して考察する－　PC ソフトを用いた最新の作曲方法を学ぶことができたため。
・農場実習　牛の世話やトラクター運転といった滅多にやらない事を、専門的な知識を学びつつ体験できたから。
・昆虫学
・臨海実習　一週間の泊まり込みで大変なことはあったが、たくさんの経験や生物基礎の魅力に気付くきっかけとなった
・臨海自習。生物研究の流れ(生息域の観察、生物の観察、採取、実験)を全て実体験することができ、有意義だった。
・臨海実習　生物学に対する興味をかきたてる内容だったから。
・生物学実験
・昆虫生態学
・情報処理入門 B
・卒業研究で、今まで学んだことを実際に活かせる場になったから。
・臨海実習 すべてが未知との遭遇で充実した一週間だった。
・臨海学習　泊まり掛けの実験で沢山の学びだけでなく実験に臨む姿勢や根気を学んだ
・動物行動学、単純に内容が自分の興味のあるものだった
・科目:生態学野外実習 理由:宿泊があったから。
・生物学野外実習が印象的だった。白神山地や海での実習は豊かな自然に触れることができたからである。
・生殖学
・臨海実習 辛かったけどとても楽しくてためになる授業だったと思う。
・複数あるので選べない。
・教職関係　　さまざまな考えに対する肯定的な見方の大切さを学んだ。

【分子生命科学科】

・農場実習：大学で実際に動物とふれあう機会がなかったので、貴重な機会で印象的だった。
・糖鎖工学 大変わかりやすく、興味をもって望めた。
・生体物理化学Ⅰ
・細胞生物学Ⅱ　興味ある内容だったから。
・海外研修入門　日本と海外の違いについて体感することができたから。
・分子生命科学実験Ⅰ；実習的な授業はほぼこれのみで、自分の知識量や実験操作との適正を推し量ることができた唯一の科目だった。

・卒業研究(たくさん頑張ったから)
・ありません
・海外研修入門Ⅰ 異国で学べることがあったから

【食料資源学科】
・授業名は忘れましたが、日本のサムライ文化を学ぶ授業で　尺八を練習したこと。大学になってからも新しく0から何かを練習して身につけるという体験がとても楽しかった。
・昆虫バイオテクノロジー　昆虫における歴史や実験など網羅的に知ることができた。
・青森の多様性と活性化－人口減少社会の再デザイン：新幹線をキーワードに－ 東北地方の抱える人口減少等の解決に対する様々な視点を得られた。
・学部越境の科目　学部横断で学ぶ機会はほとんどなかったので印象に残っている。
・食品栄養学、一番学びたかった分野であったため。
・社会制度論　　現代日本のことを知って刺激になった。
・作物育種学　すごく難しかった
・キャリアの授業。いろんな方のお話を聞けて面白かった。
・海外研修入門、タイに訪れて市場を見学したことが印象的でした
・植物病原学　とにかく難しかった
・生化学Ⅰ 教員の方が楽しく学べるよう教えてくれたから
・2年次前期の食料資源学実験は、初めて本格的な実験に触れる機会だったので印象に残った。また、今後の研究活動や研究室選択においても大きな影響をもたらす教科でもあると思う。
・海外研修　大学のカリキュラムのなかで海外に行かせてもらい、貴重な体験をさせてもらったから
・海外研修入門 海外の食事情や製造業の実態に触れることができ、貴重な経験となった。
・農場実習　実際に農業を少しでも体験できて楽しかった。
・西洋倫理思想 哲学を映画でするのが新鮮であり他の分野も含め自分の学びを深めるのに役立ち面白かったため
・なし
・植物病原学 レポート課題が出題されたとき、様々な本を参考にしてまとめた。このとき、考えること知ることの楽しさを学ぶきっかけになったと思うから

【国際園芸農学科】
・海外研修入門 異国の地で学ぶことは初めての経験で全てが新鮮だと感じたから
・心理学の世界－身近な対人関係の維持と崩壊－
・農業政策論　日本の農政について深いところまで掘り下げて学習することができたため
・海外研修入門、農場実習
・農場実習 自分で実際に田植えや羊の毛刈りの体験が出来たのが印象的だった。
・統計学 ほぼパソコンすら扱った事のない状態だったのに、みんな分かるていで話が進んでいて勉強が辛く印象に残っている。
・生徒・進路指導の理論と方法
・海外研修　初めての海外で、非英語圏だったので、現地の人とのコミニケーションが難しかっ

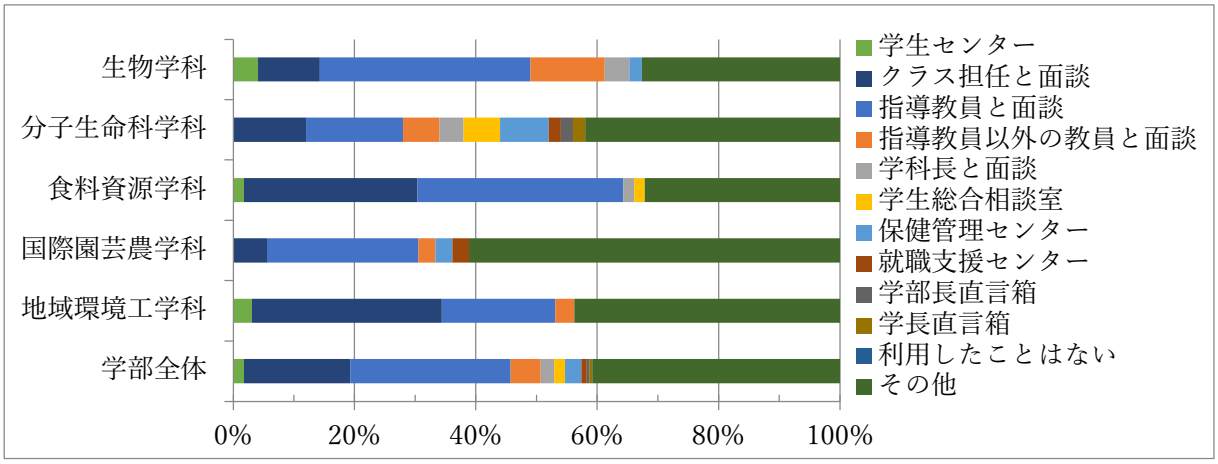
たが、有意義なものになった。
・青森の芸術ー近代文学ー文学が好きで、文学の仕組みや作者の考え、青森が与えた影響などを学べたから。
・細胞遺伝学:生物学科の3年が取る授業を国際園芸農学科の2年が取れるというのは学習レベルに差が生まれている気がした。難しかった。
・農業政策論です。講義内容に加えて石塚先生のコメントが印象的でした。農業に深く関わらないとわからない事を知れたので印象に残っています。
・科目名：細胞遺伝学、理由：生物学科の専門科目ということもありはじめは内容を理解することに苦労したが復習と教授への質問を繰り返すうちに講義で教えていただいた内容の分野に関心を持つようになったため。
・海外研修
・農場実習
・海外研修
・細胞生物学 高校生物未履修者にとって本気で生物を勉強する良い機会だった。
・農生の、農業思想論という休暇中にある授業はとても面白かった。人文の諏訪教授の授業は、とても関心が広げられた題材である。
・海外研修入門: 7 日間まったく異なる文化に触れ、日本と海外の農業や食品に対する考え方の違いを学ぶことができたから
・海外研修 海外と縁がないと思って日々を過ごしていたが実際にアメリカに行く事で伝聞では無く実際に見て感じて研修を行えたため。

【地域環境工学科】
・アニメーション学入門
・インターンシップ
・青森の手工芸　手作業を通じながら青森県の文化に触れることが出来た
・りんごで考える経済学、青森のりんごが有名になった背景が知れてよかった
・歴史・地理－人と動物の関係史－ 動物と人との関係を特に骨を介して解き明かすというのはとても面白く印象に残った。
・特になし
・地域環境工学実験　オンラインが中心となったが、実験もすることができたから。
・構造力学　理解に一番苦しんだからです。
・農場実習　農業土木と関係なさそうなのに必修だったため
・測量学実習（実際に、測量の工具で測量をやって、おもしろかったです）

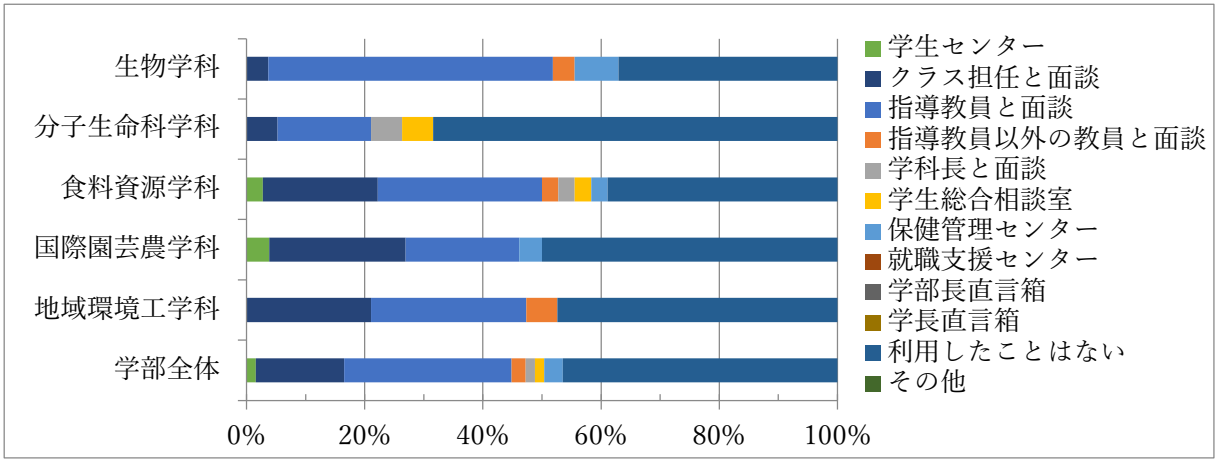
[学生への教育支援、施設・設備について]

本学部や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談･苦情を受け付けたり、皆さん のニーズを把握するために、下記のような10のルートを用意しています在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。

設問 20. (1) 学業



図Ｉ－20a．学業に関する相談窓口



図Ｉ－20b．(令和２年度実施例)学業に関する相談窓口

学生への教育支援としてクラス担任や指導教員が相談や苦情を受け付けていると回答した卒業学生は４割から５割であった。

設問 21. (2) 学生生活

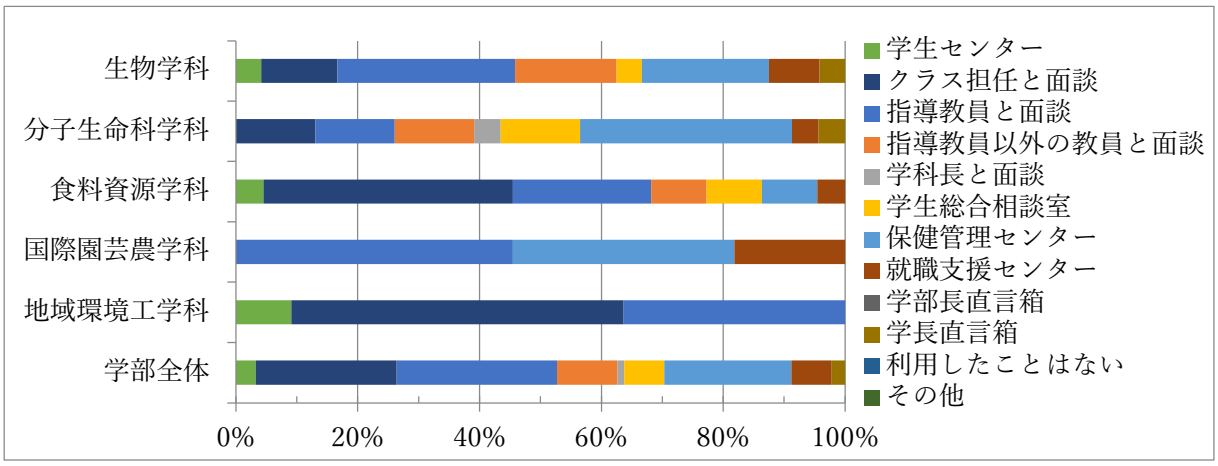


図 I－21a. 学生生活に関する相談窓口

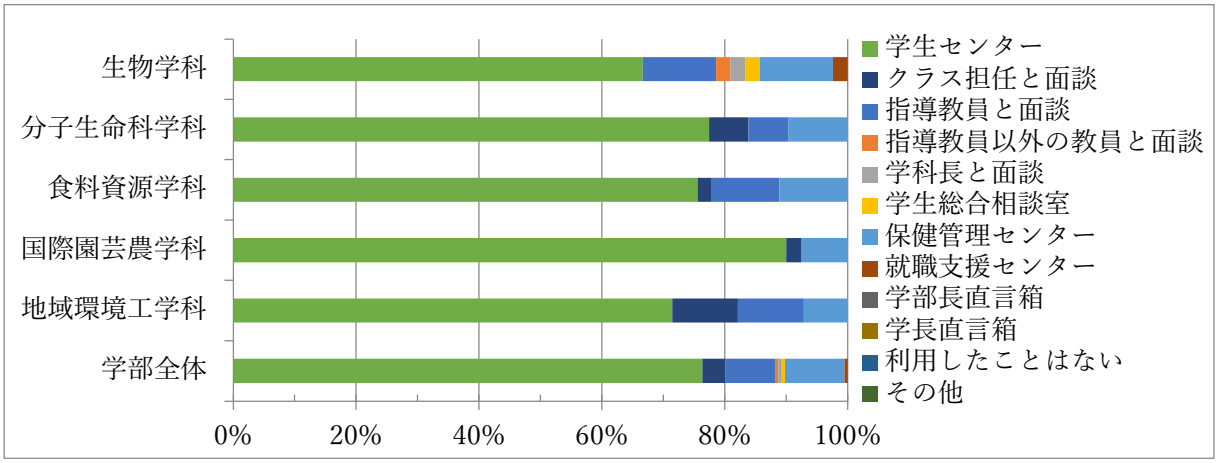


図 I－21b. (令和 2 年度実施例)学生生活に関する相談窓口

学生生活に関する相談の場合、図 I－21a と図 I－21b を比較すると、本年度は学生センターでの学生生活の相談が大きく増えた。教育面、学生生活の面での支援体制の役割分担が認識されてきたことと思われるが、今後の推移を確認する必要がある。

設問 22. (3) 進路

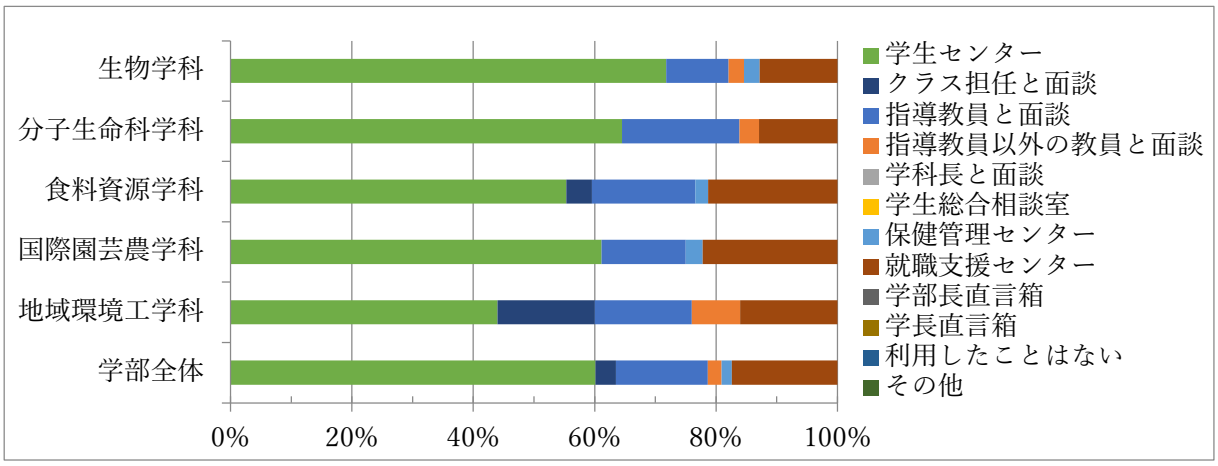


図 I－22a. 進路に関する相談窓口

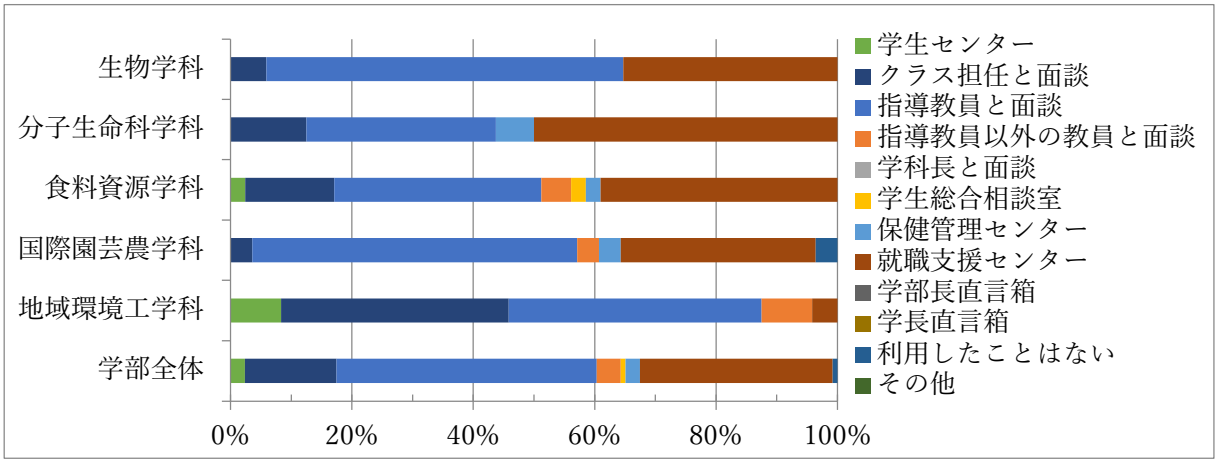


図 I－22b. (令和 2 年度実施例)進路に関する相談窓口

進路に関する相談の場合も、学生生活に関する相談の場合と同様に、図 I－22a と図 I－22b を比較すると、本年度は学生センターでの学生生活の相談が大きく増えた。学生生活と進路に関する相談の学生センターを窓口にする比率は全く同じではないが、多くの学生が学生生活と進路の話題を学生センターで解決しようとしているのが読み取れる。今後の推移を確認する必要があるが、学生センターが生活相談と進路相談を行う先として利用しやすくなっていることを示しているのかも知れない。

図 I -22a をもう少し詳しく解析するために、回答人数を示した素データを表 I -22 で以下に示す。

表Ｉ－22. 進路に関する相談窓口

人数

	生物学科	分子生命科学科	食料資源学科	国際園芸農学科	地域環境工学科	学部全体
学生センター	28	20	26	22	11	107
クラス担任と面談	0	0	2	0	4	6
指導教員と面談	4	6	8	5	4	27
指導教員以外の教員と面談	1	1	0	0	2	4
学科長と面談	0	0	0	0	0	0
学生総合相談室	0	0	0	0	0	0
保健管理センター	1	0	1	1	0	3
就職支援センター	5	4	10	8	4	31
学部長直言箱	0	0	0	0	0	0
学長直言箱	0	0	0	0	0	0
利用したことはない	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0

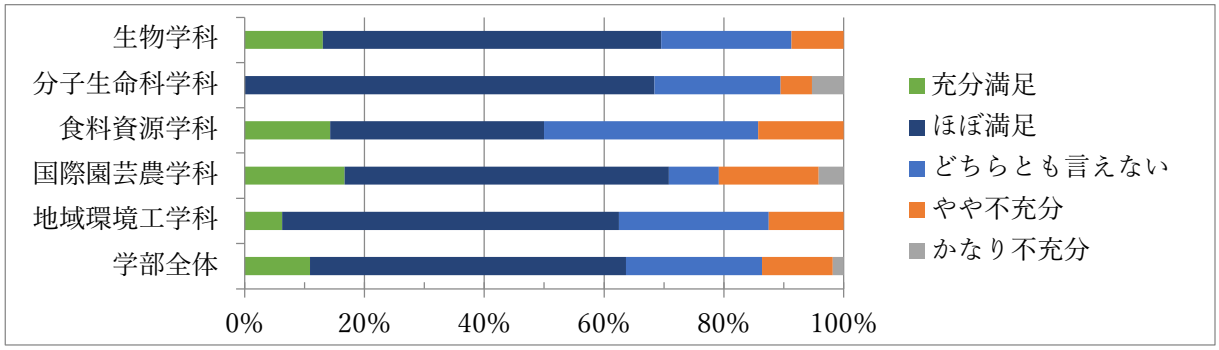
進路相談には、学生センターと就職支援センターへ相談するケースが圧倒的に高かった。続いて指導教員やクラス担任が相談窓口になっていた。

設問 23. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

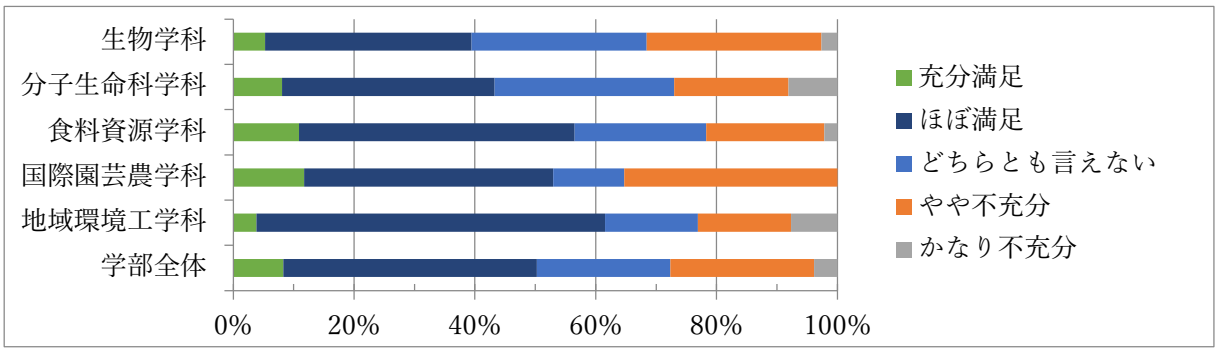
(1) 下表の該当する欄にチェックを入れて下さい。

評価 / 施設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（４階）					
5. 学生自習室・学生控室（２階）					
6. 卒業研究を行った研究室					

1. 講義室



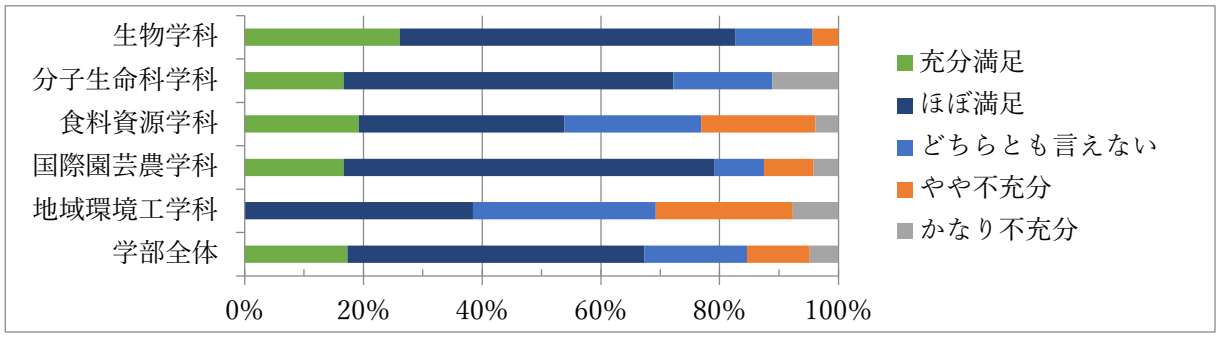
図Ⅰ－ 23 － 1a. 本学部の施設に対する満足度（講義室）



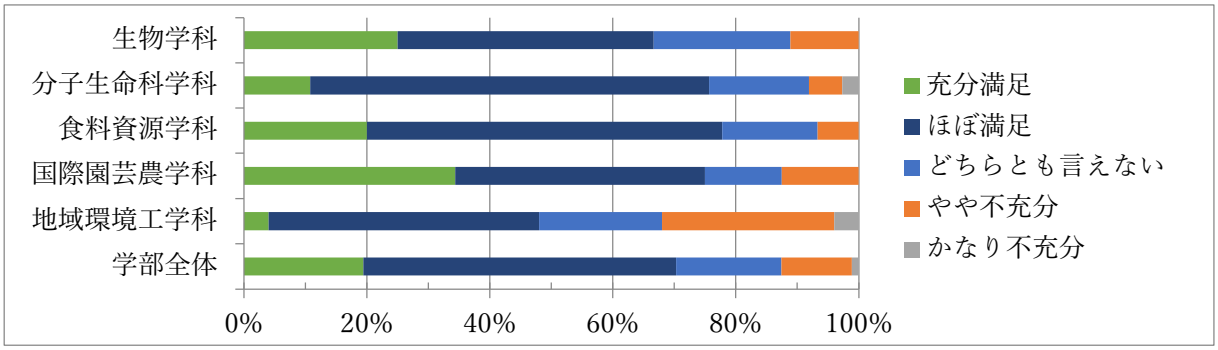
図Ⅰ－ 23 － 1b.（令和 2 年度実施例）本学部の施設に対する満足度（講義室）

平成 28 年度から講義室に順次冷房設備が導入されており、一昨年、「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は約 5 割となり昨年度は横ばいの 50%となっていたが、令和 3 年度の本年度では 6 割を超えた。一方、「やや不充分」と「かなり不充分」の合計は、前年度から減少しているように見えるが、2 年前の結果とほぼ等しい。しかし、設問 24 を読むと、変わらず講義室における夏の暑さと冬の寒さを指摘する声が非常に多い。冷房設備に関しては、いまだ導入されていない講義室もあり、今後もさらに導入と運用の見直しを進めていく必要がある。

2. 実験・実習室



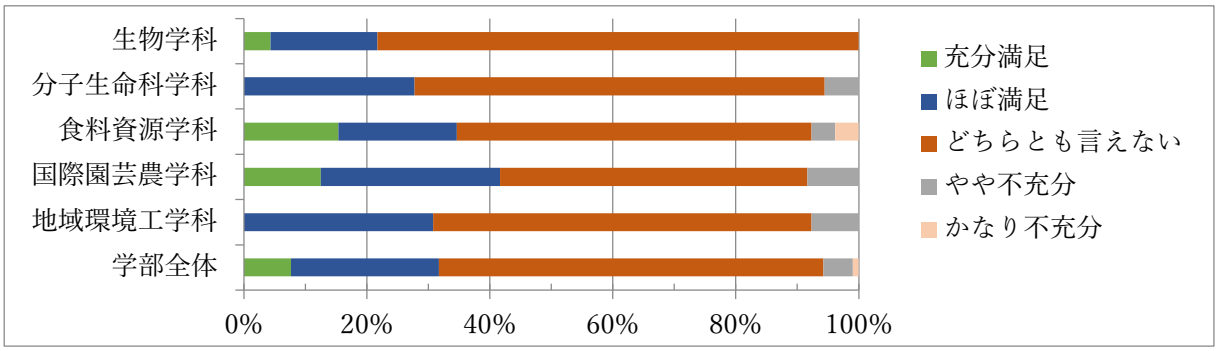
図Ⅰ－ 23 － 2a. 本学部の施設に対する満足度（実験・実習室）



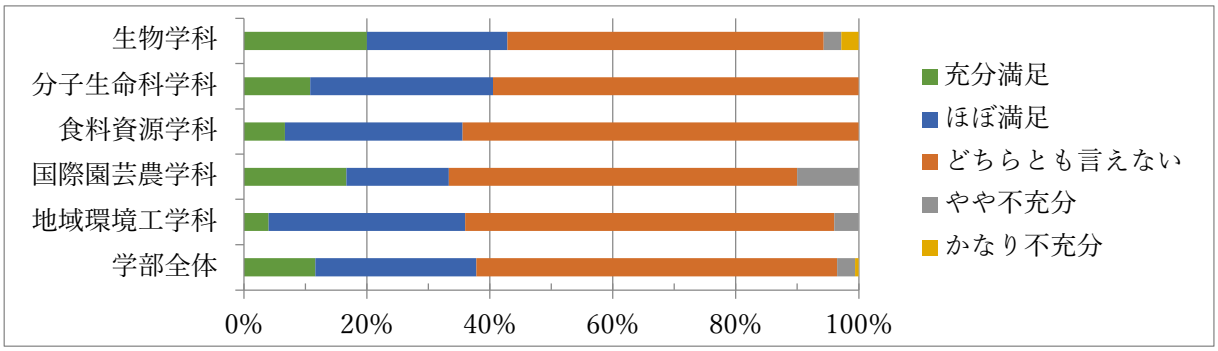
図Ⅰ－ 23 － 2b.（令和 2 年度実施例）本学部の施設に対する満足度（実験・実習室）

実験・実習室の満足度について、地域環境工学科ではやや低いが、「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 6 割から 7 割であった。一方、「やや不充分」と「かなり不充分」の合計は 1 割から 2 割であり、ほぼ横ばいであった。設問 24 への回答から、特に地域環境工学科が低い値を占めした理由を探ったが、実験・実習室に対して個別の要望は見当たらなかった。

3. 蔵書室（4 階）



図Ⅰ－ 23 － 4a. 本学部の施設に対する満足度（蔵書室［4 階］）



図Ⅰ－ 23 － 4b. （令和 2 年度実施例）本学部の施設に対する満足度（蔵書室［4 階］）

平成 27 年度に新設された 4 階蔵書室へ、学部で保有する蔵書の大半が移設され、平成 28 年度から新設された蔵書室の満足度の調査がはじまった。図Ⅰ－ 23 － 4a と図Ⅰ－ 23 － 4b では、『どちらともいえない』のバーの色が異なるため、少し比較しにくいが、本年度の蔵書室に対する満足度は前年度の結果と比べるとやや低い傾向にあった。この結果は、昨年度と変わらず蔵書室の

利用が少なく、学生が所蔵図書の現状を十分に把握していないことと大きな関係があると考えられる。『充分満足』」と『ほぼ満足』の合計は 3 割ないしは 4 割であり、平成 25 年度以降ほぼ横ばいである。雑誌の閲覧がオンライン利用できるようになり、冊子体の文献を手に入れる必要性が低下しているにもかかわらず、一定数の利用があることは今後も蔵書室の充実を目指す必要がある。

4. 学生自習室・学生控室（２階）

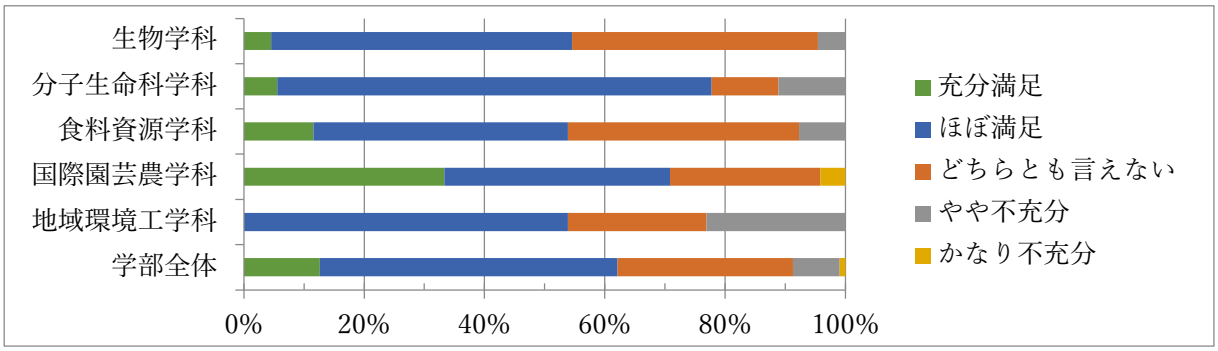


図 I－ 23 － 5a. 本学部の施設に対する満足度（学生自習室、学生控室［2 階］）

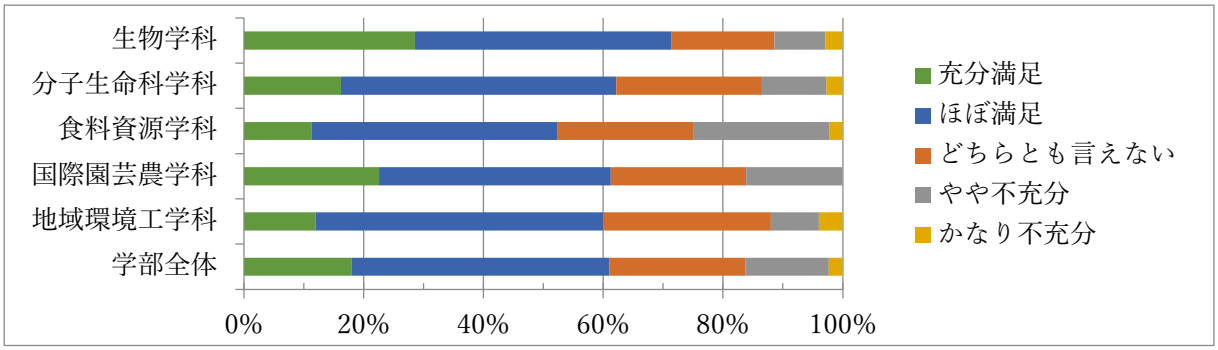
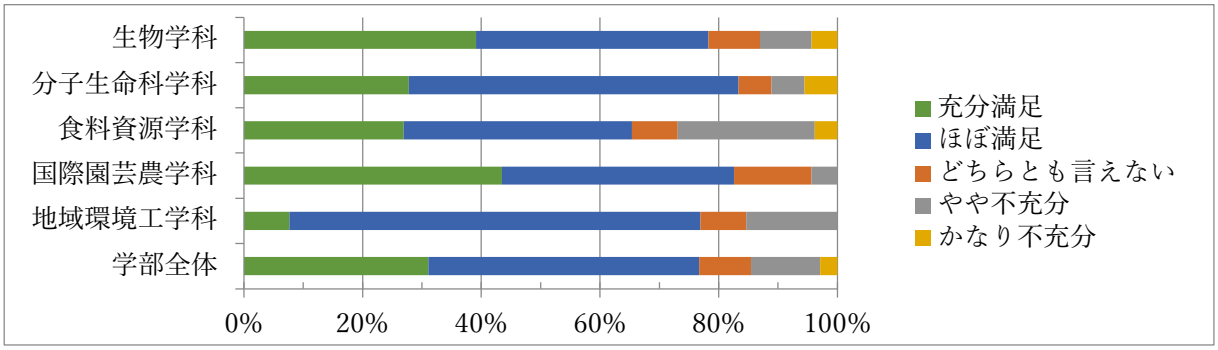


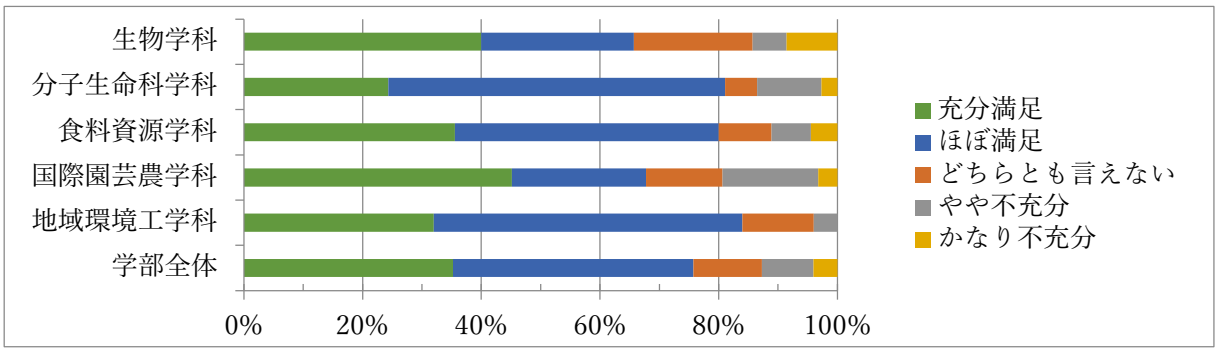
図 I－ 23 － 5b. （令和 2 年度実施例）本学部の施設に対する満足度（学生自習室、学生控室［2 階］）

平成 28 年度以降、閲覧スペースの利用が自習を目的とする場合が多くなってきたことや蔵書スペースが学生控室に改修されたことにより、平成 28 年度からは「学生自習室・学生控室」の満足度を一体的に調査してきている。『充分満足』と『ほぼ満足』という肯定的な回答は、約 6 割であり、平成 26 年度から平成 29 年度（5 割強）と比べると、微増しているものの、ほぼ横ばいと言える。『やや不充分』と『かなり不充分』と否定的な回答は、学科により昨年度よりもやや増であった場合もあったものの、やや減の兆候もみられる。

5. 卒業研究を行った研究室



図Ⅰ－ 23 － 6a. 本学部の施設に対する満足度（卒業研究を行った研究室）



図Ⅰ－ 23 － 6b. （令和 2 年度実施例）本学部の施設に対する満足度（卒業研究を行った研究室）

卒業研究を行った研究室についてもほぼ 6 割から 8 割の『充分満足』と『ほぼ満足』の肯定的な回答を得た。設問 24 の結果から推察すると、研究室のスペースが狭いと感じた場合や、クーラーなどの空調設備に問題があることが推察できる。

設問 24. 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

昨年度に続き、冷暖房に関する要望が圧倒的に多い。その次に、研究室のスペースの問題が目立った。また、少数ではあるが、トイレの充実が上がっている。すべてのトイレにウオッシュレット機能がついているとは限らない。

【生物学科】

・要望ではありませんが、4 階に蔵書室があって利用できるということを、本アンケートで初めて知りました。
・研究室が狭い
・講義室の一部がエアコンの風が直に当たり、体調を崩しかけたことがある。多くの学生が座っているので座る位置を変えることも出来ない。空調管理をもう少し改善してもらえるとありがたい。
・農生棟全体がなんとなく暗い。
・特に無し
・学食等が遠い

・研究室によって設備がかなり違うように思います。冬はかなり冷え込むので工夫していただければと思います。
・特にありません
・講義室の席によって冷暖房が効きすぎていたり、その逆だったりしたので改善してくれたらなと思います。

【分子生命科学科】
・自習室のデスクを増やしてほしい。
・実験台が人数分なかったので増やしてほしいです
・学科共用の実験設備が古すぎる。また、4 階の蔵書室については本アンケートで初めて知ったため、どのように利用できるのか周知してほしい。
・飲食店が欲しいです
・今どうかわからないが、クーラーがないところがあれば設置して欲しい

【食料資源学科】
・研究室の実験室が狭い。
・ない
・講義室にエアコンが欲しかった
・狭い研究室もある
・学生控室がない研究室だったので学生控室があると嬉しい
・実験・実習室に冷房をつけて欲しい。また、遠心機を使うと音で全く後ろに先生の声が聞こえないので音声対策をして欲しい。卒業研究を行った研究室の実験室のみでなく、教員室等の他の部屋にも冷房をつけて欲しい。また、実験系の関係でどうしても土日や祝日に行わなければならない実験もあるため、そういった日にも実験を行えるように部屋の形状を考慮し使用できる暖房器具を付け欲しい。農学生命科学部棟全てにおいて、お昼に一回暖房が切れてしまうと 2 コマ目に授業がなかった教室は 3 コマ目がとても寒いので暖房切るのをやめるかそうならないような設備が欲しい。また、お手洗いに荷物の多い 1 年生のためにも、トイレ内にもう 1 つ荷物を置けるような台や場所が欲しい。廊下が暗いので、明るくしてほしい。農学生命科学部棟全体的に綺麗で清潔感があるようにして欲しい。
・夕方になると研究室の冷暖房が切れてしまうのを、24 時間点くように対応してらいたい
・冷房設備の設置をした方がありがたかったです

【国際園芸農学科】
・暖房が付く時間を伸ばして欲しい
・暖房と冷房の設置とその使用方法についてできれば掲示などしてほしい
・クーラーを全室（研究室を含む）完備してほしい。
・オンライン講義期間も自習室を開放して欲しい。
・農学生命科学部棟の３階実験室の冷暖房の設置をしてほしいです.
・実験室は特に締め切る必要があるため夏場はクーラーが欲しい。
・講義室が朝、とても寒いです。

・夏場は戻の外にハチの巣があり窓を開けることができない年もあったため、どの部屋にも空調をつけていただきたいです。
・トイレの充実

【地域環境工学科】
・簡易的でもいいので喫煙所を作って欲しいです。
・エアコンのない講義室は授業を受ける際大人数だと厳しい環境でした
・空調
・特に無し
・農生に食品の自販機がほしい
・講義室に時計があった方がいいと思う

［卒業研究について］

設問 25. 卒業研究を行ったことに満足していますか。

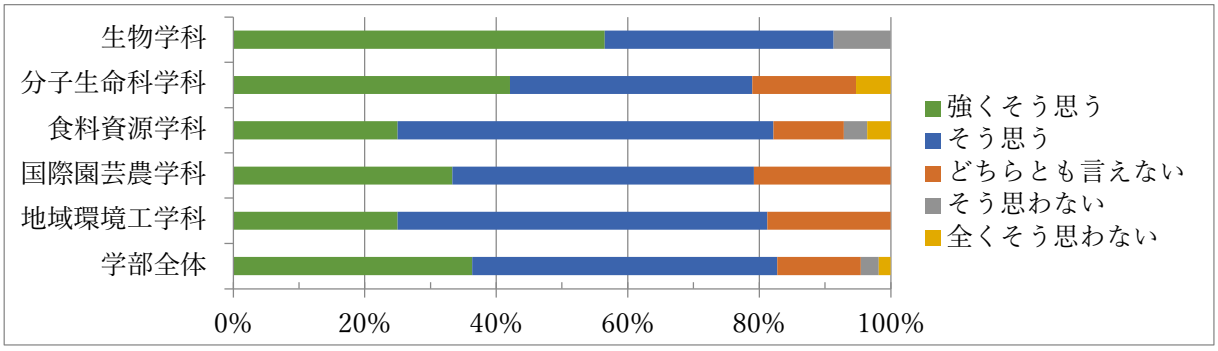


図 I－ 25a. 卒業研究を行ったことに対する満足度

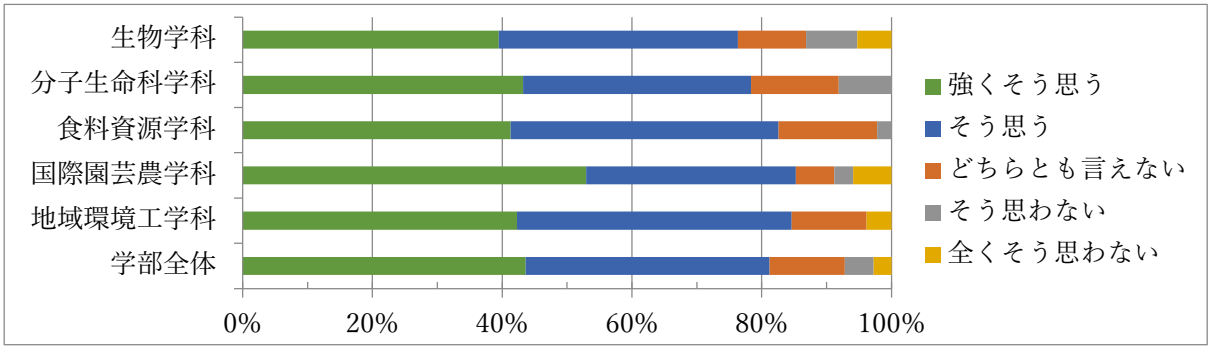


図 I－ 25b. （令和 2 年度実施例）卒業研究を行ったことに対する満足度

設問 26. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【生物学科】

1. 人間として大きく成長したと思えたから。
1. 好きな生き物についての研究できたから
1. とても良い経験になった。進学するお金や心身の余裕があったらもっとやってみたいと思った。
1. 諸事情あり、卒論指導はほぼオンラインでの個別指導だった。担当教授がきめ細やかに対応してくださり、深く感謝している。
1. 生物学の知識だけでなく、ものの考え方や文章の書き方、話し方なども学べたから。
1. 人生で二度と無い経験だろうという確信と、辛さに相当する達成感があったため
1. 長期的に計画をたてて１つの結論にたどり着くのははじめての経験だった。
1. 研究内容だけでなく、いかにわかりやすくまとめるかという情報整理も学んだ
1. ある程度満足のいく結果が得られたため
1. 頑張ったから。
1. 大学で学んだものを形にできた思うから。
1. 辛かったけど、研究にはやりがいもあったし人間として成長できたと思うため
2. データを読み取り考察する力を育てる事ができたと感じているから。
2. 過程、結果に満足しているため。
2. １番意欲的に取り組んだ
2. 研究結果があったから
2. 体調がよくなかったが、今できることはできたと思うから
2. コロナ禍であまり外部からの刺激がなかった
2. やりたいことはできた.
4. 最終的に意欲がなくなり楽しいと思えず行ったから
4. 費やした時間や労力に対して得られるものがあまりなかった。教員と学生の立場が平等でない。他の研究室も同様なのか、自分の研究室が厳しいのかわからないが、ここまで不自由に縛られて研究に努めなければ単位を得られず、卒業できないものなのかわからない。

【分子生命科学科】

1. 研究だけでなく、資料の作成や見せ方、発信方法などを学べた。
1. 自分が高校生の時から興味がある分野の研究をすることができたから
1. 楽しかったから
1. 実験を通して知識を定着させることが出来たから
1. 様々なことを学べたから
2. 本学科に進んで始めて本格的な研究ができたから
2. 結果を出せたから
2. 実験の質量ともに高度だったから。
2. 学んだことを生かして新たな課題に取り組むことが人生に必要だから。
3. 自分の力量不足で、時間がかかった割にあまり良い結果が得られなかった。

3. 卒業研究としてまとめることはできたが、満足のいく実験結果は得られなかったため。
5. 担当指導教員の性格が悪すぎて、自身も鬱状態になりかけたため。

【食料資源学科】
1. 集大成としていいものをつくり上げられるように努力したから
1. 1 つの疑問から始まった問題を 1 年間通して解決しようと継続してゼミ活動に専念できたこと。
1. 論文検索のやり方を学べたから。論理的、科学的に考える力がついた。
1. 指導教員の先生の協力もあり、満足に研究を行うことができたから。
1. どうすればうまくいくのか調べ、考え、実行し、結果を分析する。この一連の流れを繰り返し、やり遂げた経験は貴重であったから。
1. 楽しい期間だったから。
2. 研究というものがどういうものなのか具体的に知ることができたため。
2. 大学生活の集大成であるため。
2. 実験条件の設定の仕方やプレゼンテーション能力を向上させてくれたから。
2. 研究を行うなかで、今まで経験してこず、これからもおそらくしないであろうことを経験できたこと。
2. 大変だった。
2. 辛かったけど頑張ったので、総合的にはよかった
2. なんだかんだで楽しかったから
2. 忍耐力とパソコンの技術が向上したと感じるため
2. 充実していた
2. 世界を見る視野が広がったため
3. 学術に貢献できた実感はあるが、やりたい内容ではなかった。
3. ちゃんとした結果を残せなかった。
4. うまくいかず、精神的に病んだ。
5. 関係のない分野での就職が決まっており、必要や興味がなかったため

【国際園芸農学科】
1. 自分で目的を持って研究を組み立てて、論文などの成果物をつくる経験は今後働く上でも活かすことの出来るものだと思うから。また、卒論を通して自分が専攻した学問に対する知識を深めることができたから。
1. 関心のある分野を深く学ぶことができた
1. 2 年間自身のレベルアップに努めることが出来たから。
1. 計画を立てて長い文章をまとめ書き上げることを経験できてよかった。
1. 有意義だったため
1. 自分が知っていたつもりの事象でさえ実際は奥深く、軽い知識では太刀打ち出来ないという事を思い知る事が出来たため。
2. 将来に役立つ専門知識を身に付けることができたため
2. アドバイスをもらえなく今大変だが、いずれは自分のためになるかもしれないと思うから。

2. トラブルでテーマを変えることになったが、引き継ぎではない研究をできたことは良い経験になった。
2. 社会でも役立つ経験をすることが出来たから。
2. 物事を理解するためには相当な努力が必要であると気づけた。自分の性質に関して理解を深めることができたからです。
2. 自分がこれまで勉強してきたことを形にしたことで自信がつき、プロジェクトに取り組む過程をへて社会人としての能力を身につけたと感じます。
2. 配属すぐから研究を行えたため
2. 自分の好きなように取り組めた。時々詰まったら先生と相談して方針を修正できた。
2. 実験をするにあたっての学んだ手順や留意点は今後の社会人生活にも生きてくると感じたから
3. 学びは多かったが、精神的な負担が大きかったから
3. 大変だったが、やらねばならぬと思ったから
3. 思ったように進められなかったから.
3. 担当教員と合わなかった。

【地域環境工学科】
1. 興味があるものを調べることができたから
1. 興味があることを研究できたから
1. 同じ研究室の仲間と協力しながら取り組めたから
2. 卒業後も活かせる内容だと感じるため。
2. 自分の興味ある研究が出来た
2. やりたい研究に取り組めたため
2. 最後まで研究出来たから
2. 自分なりに研究をまとめることができたから
3. 研究をする意義・メリットがよく分からなかったから。
3. 理系っぽくない内容ではあったので、疑問がありました。
3. 大変だったため

卒業研究を行ったことに対する満足度に関しては、「強くそう思う」と「そう思う」という肯定的な回答が、約 8 割で、学科によっては 9 割を占めした。卒業研究を行ったことに対する満足度は、平成 26～30 年度でも 8 割から 9 割に至っている。高い比率で満足していると推察できる。満足した理由（設問 26）を見ると、研究活動を通して自己の成長を実感したり、大きな達成感を得たりする学生が多いことが昨年度の件と同様にうかがえた。一方で、1 割から 2 割の卒業学生は卒業研究に満足していないことになり、設問 26 でその理由を探ると、卒業研究の中身の問題である場合や指導教員との研究の進め方に齟齬があった場合などがあげられている。卒業するための単なる必要科目としての捉え方もあるので、今後は否定的な回答である 1 ないしは 2 割の卒業学生に満足のいく卒業研究を提供するには、ダイバーシティーの考え方で接していくことが一つの手段と考えられる。

［進路支援について］

設問 27. あなたの卒業後の進路は次のどれですか。

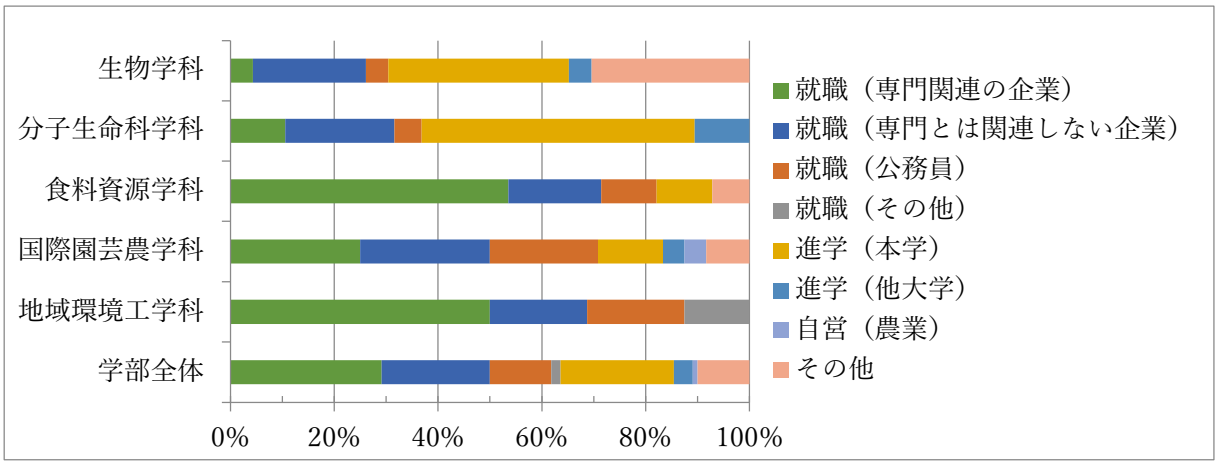


図 I－ 27a. 卒業後の進路

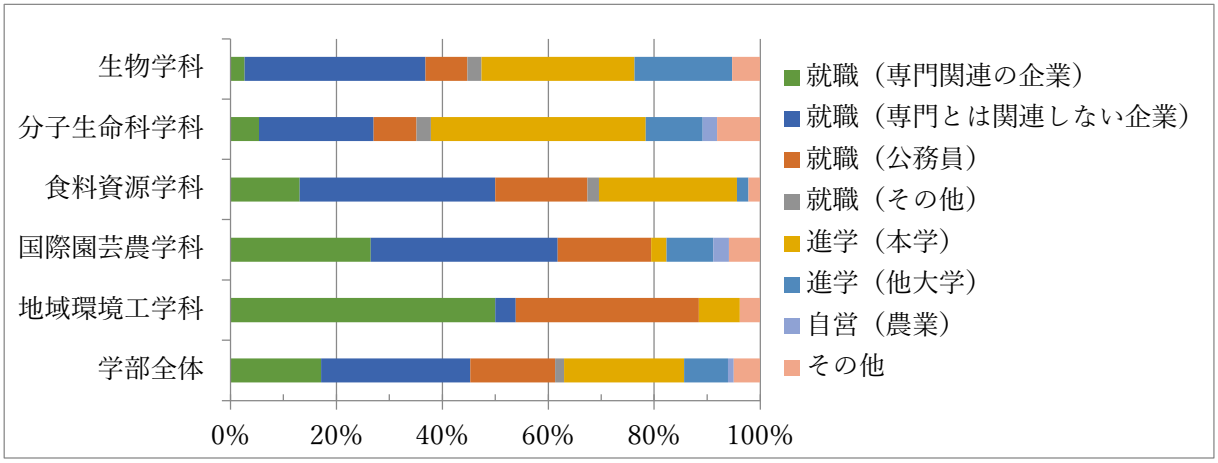
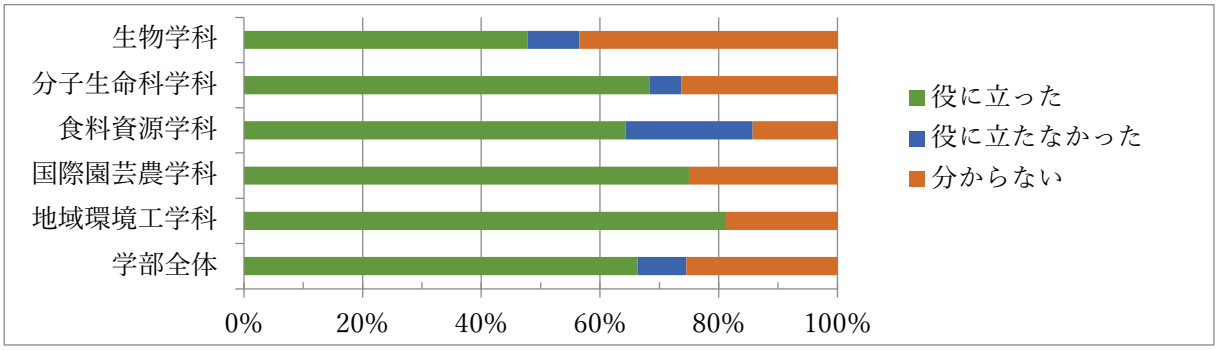


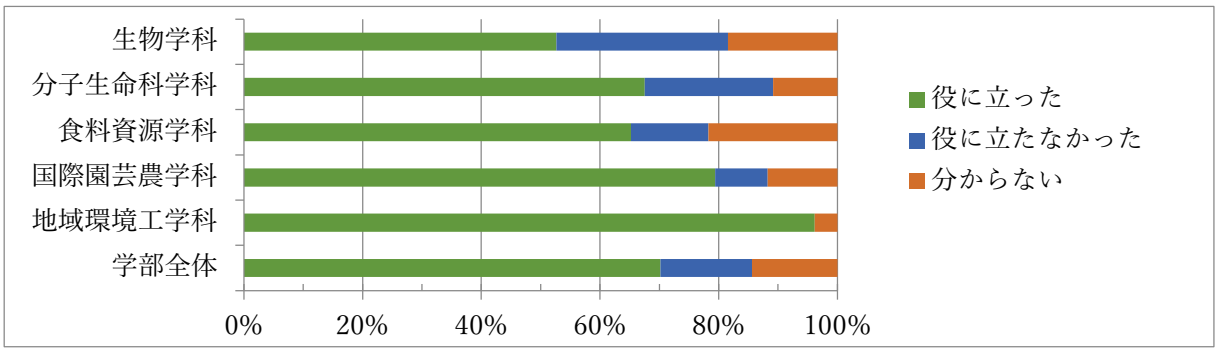
図 I－ 27b. （令和 2 年度実施例）卒業後の進路

本学部には大学院農学生命科学研究科と地域共科学研究科に進学する道が整備されている。さらに、それらの修士課程を終了後には、岩手大学大学院連合農学研究科に進学する道が開かれており、本学部の教員が兼職している場合が多い。学科により増減が大きい場合があるが、就職は約 6 割強であり、専門と関連する企業に就職する場合が多い地域環境工学科、本学の大学院への進学が多い生物学科と分子生命科学科、就職が 7 割から 8 割である食料資源学科と国際園芸農学科に傾向がわかれているように思える。大学院への進学者は、平成 30 年度から約 3 割、就職した学生は 6 割強といったほぼ一定の比率で推移していた。

設問 28. 本学部のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。



図Ｉ－ 28a. カリキュラムで学んだことはどのように進路に影響したか



図Ｉ－ 28b. (令和 2 年度実施例)カリキュラムで学んだことはどのように進路に影響したか

カリキュラムで学んだことと進路決定との関係を問う質問事項である。『役に立った』と回答した学部卒業時学生は、平成 26～平成 30 年度では約 5 割、令和元年度になり 6 割、そして昨年度は 7 割となって、本年度もほぼ 7 割の学生が進路の決定に役に立ったと答えている。比較的に役に立ったと答えた学生の比率が多い学科は地域環境工学科と国際園芸農学科であり、この傾向は昨年も同様であった。

設問 29. 本学および本学部の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

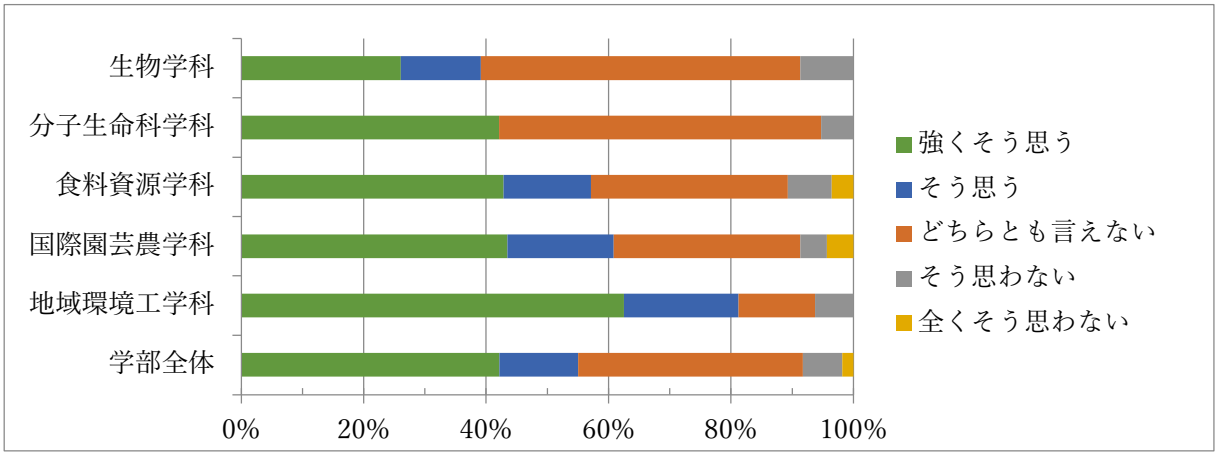


図 I－ 29a. 本学部の進路支援の取り組みは十分か

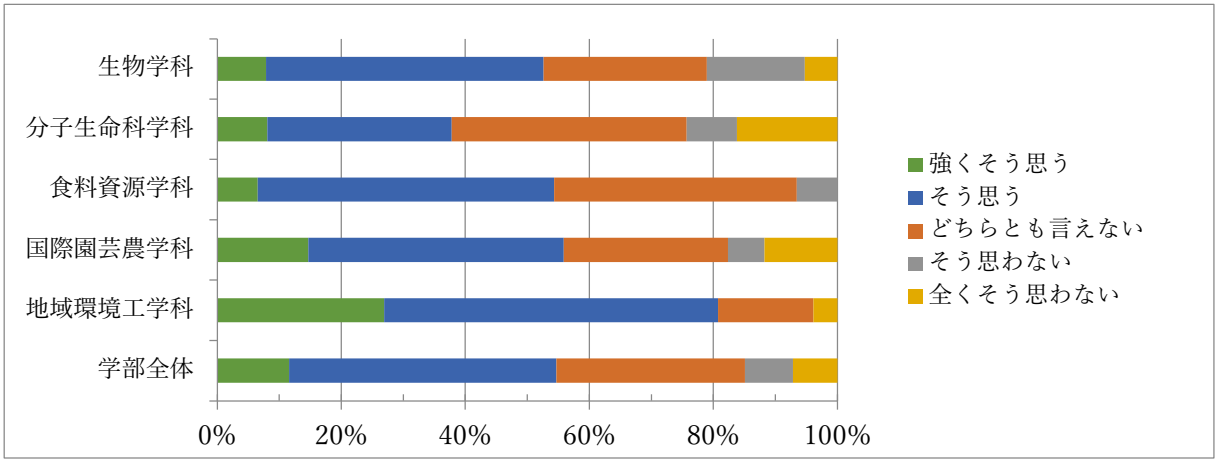
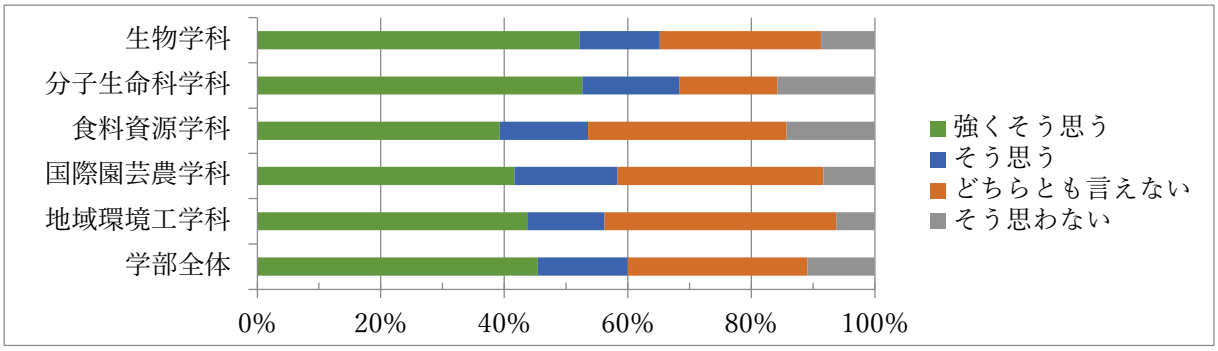


図 I－ 29b. (令和 2 年度実施分)本学部の進路支援の取り組みは十分か

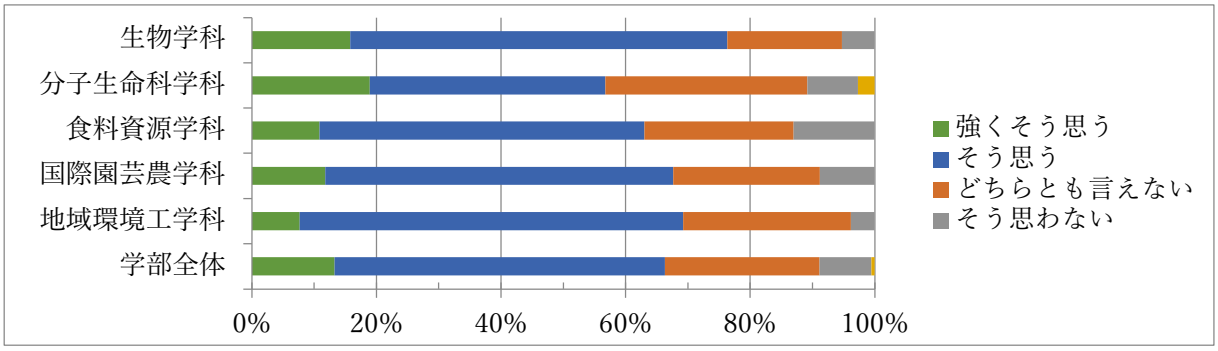
昨年度よりも『強くそう思う』と回答する率が多かった。学生センターの機能の重要性が増していることが推察される。

[本学部の教育のあり方について]

設問 30. あなたが本学部を卒業するに当たり、大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと感じていますか（大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です）。



図Ｉ－ 30a．大学卒業者としての知識や学力を身に付けたか



図Ｉ－ 30b．（令和 2 年度実施分）大学卒業者としての知識や学力を身に付けたか

『強くそう思う』と回答した卒業時学生の比率が高かった。R2 年度は昨年度，一昨年度と比べて回答率が低下していたが、アンケートに回答した学生のうち約 6 割が大学卒業者としての知識や学力を身に付けたことに自信をもっていた。

設問 31. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【生物学科】

1. 基本的にどれも真面目に取り組んだつもりであるため。
1. 専門的知識の十分な獲得、社会人に必要な対応力は身に付けられたと思う。
1. 知識が無い時は無いと言えるリテラシーが身についた
1. 授業や研究室で培われたと思うから。
1. 実感、体感によるもの。
1. 理解を深め、実生活で非学習者に説明を適切な説明をあるていど可能であるから
1. 就活中に大学で得た自身の知識を活かせる場面もあったため
1. 専門的な教育を受けられたと感じているため
1. 卒業研究を十分に行ったから。
1. 他学科人よりも生物学を理解できたと思うから

1. しっかりと学ぶことが出来たため
2. 専門知識が身についたため
2. 専門知識をとても深く身に付けられたから
3. 大学からの学習支援は手厚かったが、自分ではもっとできることがあったかもしれないと後悔しているから。
3. 偏った知識しか持ち合わせていないため
3. 就活をしながら勉強する時間をとることが大変だったし、体調も良くなかったためあまりできなかった
3. もっと意欲的に学ぶ機会を増やせたのではと思うから。
3. イメージができない.
3. 特に専門分野ではある程度の知識や学力は身についたと思うが大学卒業者に相応するかはわからない
4. 研究室の分野しか学ばなかったから

【分子生命科学科】
1. 授業は必要以上に受けて色々学べたなと感じるから。
1. 科学について多く学んできたため。
1. 就職先が大学で学んだ専門分野を活かすことができそうだから
1. 積極的に勉強したから
1. 所属研究室の教員の指導が良かったため。
2. 入学当初よりは専門知識が増えたから
2. 所定の単位を納めて卒業できたから
2. 自分なりに成長できたと思うから
3. 大学卒業者として求められる知識や学力をイメージできなかった。
4. 労働者を守る法律や制度等に関して勉強不足だと思うから。

【食料資源学科】
1. 入学前に比べ良いことも悪いことも経験したから。
1. 専門性を学んだため。そのほかにも情報を理論的に読み解く能力も養えた。
1. 一般人が知らないことを知っていると思うから
1. 幅広く知識を得たとは思はないが、研究分野については知識が増え論文なども多少読めるようになったから
1. 就職先は技術的な面では活かせないところだが、学校で学んだ過程で統計のやり方や資料作り、論理的な考え方は理系の者として文系の人また違った形で仕事に活かせると思うから。
1. ある程度の知識はあると思うが、実際の場では異なることは大いにあると思うから。
1. 教養科目や専門科目を通して様々な視点を持つことが出来たと思うから
2. 卒業に見合う努力をしたから
2. 独学したのと、他大学の文系へ院進する人と対等に話せるようになったため
2. 特に理由なし。
3. 教養は身についたが、専門性の高まりは不十分だったと思うから。

3. 身に付いた知識も多いが、3 年次の後半辺りから専門外のことは触れていないため、忘れていることも多いため。
3. もっと勉強すれば良かったなと思う。
3. 知識が取り込まれてないから
3. 学んだものを忘れている。
4. 自分の学部でない学部の分野が全く分からないのでもう少し学んでおけば良かったなと思うため。
4. 自分はまだまだ勉強不足だと感じるため。
4. 学力が身についた自信がない
4. 本学のカリキュラムによって、ある程度の知識を身につけられたが、入学当初イメージしていた専門性には到達していないと感じている。一方で、ものの考え方はかなりの成長を感じられた。

【国際園芸農学科】
1. ある程度農学に関する知識を得ることが出来たと思ったから。
1. 高校より専門的なことを学べたし、自主的に勉強すれば公務員に受かることができると分かったから。
1. 就職先が専門知識を必要とするため
1. 加工品用の果樹の栽培をする企業につとめることになり、論文の読み方や幅広い果樹の基礎的な知識を学べたため活かせると思う
1. 就職活動中に面接などで専門が異なる社会人の方と話をした際に自分の専門について簡潔に話すことができ円滑にコミュニケーションを取ることができた。また、外国人の方とも英語を通じて日常会話以上のレベルでのやり取りができるようになった。
1. 自分で学ぼうとする意欲を身につけられた。
1. 学会発表を通して論理的に討論することが出来たから
1. 青森県の農業についての知見が就職に活かすことができたため。
1. 農業に関する話題には興味があるし、やはり社会で話されている議論に混ざりたいと感じるから。
1. 自分でも様々な事が学べたと思っているから。
2. 普段の生活でも活かすことができているため
2. なんとなく
3. 大学卒業者に相当の知識がどの程度なのか明確でないから
3. 知識などはついたと感じているが、偏りがあると感じているため。
3. もう少し専門知識を身に付けるべきであったと感じているため
3. 高校までのほうがしっかり勉強していたから
3. 卒業できたということは学力はそこそこ身についていると思うが、学を披露する機会が無く実感がないため.
3. まだまだ勉強不足な部分があるとも感じる
3. 著書や座学で学べることは非常に多くありますが、体験でしか得られないものもあると思っています。農業分野の体験を積み重ねてきた方々に自分が学んで吸収できたものを自慢できるか

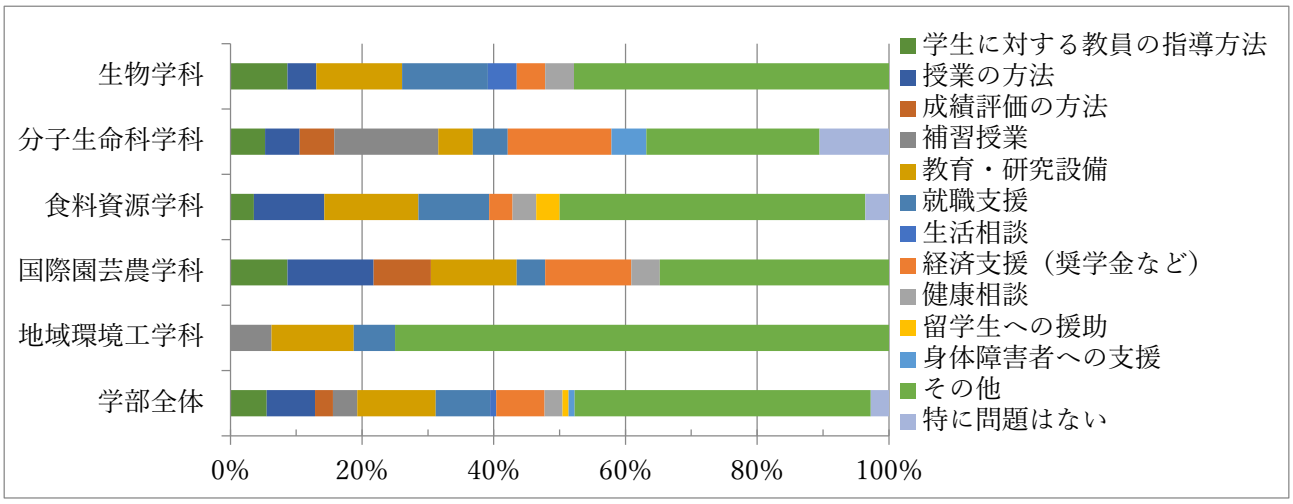
といったらそうではないため。

3. 分からない

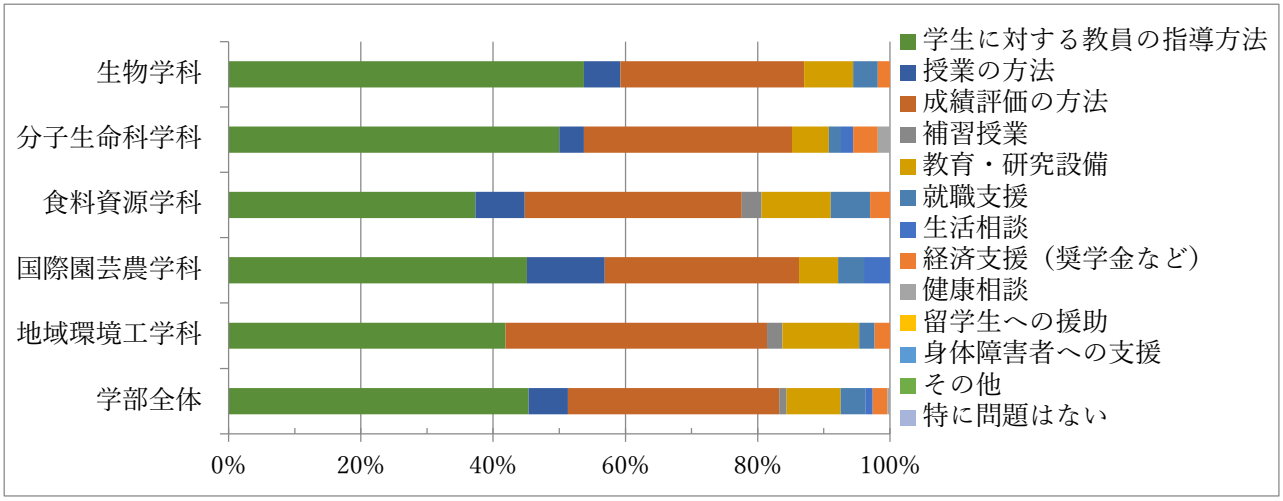
【地域環境工学科】

1. 学業だけでなく、アルバイトやボランティア活動にも取り組めたから。
1. 資格や認定をもらうことが出来るから
1. 自分なりに学習し、単位も取得できているから
2. 専門知識を付けることが出来たから
2. 就職するにあたり自信になったから
3. 結構忘れているから
3. 実際にどんな知識がどのくらい身についたのかわからないので
3. 不安がまだあります
3. 専門知識はついたが、教養科目は一年生の頃にほとんど取り終えて忘れてしまっていることが多い
4. 試験での点数が社会で直接的に役に立つとは限らないから

設問 32. 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。



図Ｉ－ 17a. 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべき点



図Ｉ－ 17b. (令和 2 年度実施分)本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべき点

昨年度に続いて、本設問のアンケート結果も昨年と大きく異なる事態が発生した。平成 26～令和元年度までは、『特に問題はない』を選ぶ場合が多く、3 割から 4 割を占めていたが、昨年度は『特に問題はない』と回答した学生は皆無であり、今年もごく少人数だった。そこで、詳細を検討するために、図Ｉ－ 17a の素データを表Ｉ-17 に示すことにした。それぞれの回答項目ごとの回答人数を示している。『特に問題はない』を選んだ人数は 3 名であり、109 名中あたりに換算すると、0.3 割に過ぎなかった。『特に問題はない』を選ぶ人数が少ない傾向は昨年度と一致しており、この現象はアンケートの実施方法が Forms によるオンライン回答になったためなのか結果を注視していくしかないとの前年度の見解を継続していくしかないと考えられる。昨年度、非常に指摘が多かった『学生に対する教員の指導方法』(昨年度は 4 割半)、『成績評価の方法』(昨年度 3 割) は、1 割強にしかすぎず、昨年度の 7 割を大きく下回った。一方、『その他』を選ぶ場合が極端に多かったため（図Ｉ－ 17a および表Ｉ-17)、設問 33 で回答者に共通する指摘事項を探ったが、教育・研究設備の指摘などはみられるが、特段の特記事項は明確ではなかった。

昨年度の自己評価アンケート結果報告書にも書かれているが、例年、アカデミックハラスメントに関連する訴えがあり、昨年度は 12 件との報告であったが、今年は 2 件がこれに該当する記述と思われた。

表Ⅰ-17. 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべき点の素データ

	生物学科	分子生命科学科	食料資源学科	国際園芸農学科	地域環境工学科	学部全体
学生に対する教員の指導方法	2	1	1	2	0	6
授業の方法	1	1	3	3	0	8
成績評価の方法	0	1	0	2	0	3
補習授業	0	3	0	0	1	4
教育・研究設備	3	1	4	3	2	13
就職支援	3	1	3	1	1	9
生活相談	1	0	0	0	0	1
経済支援（奨学金など）	1	3	1	3	0	8
健康相談	1	0	1	1	0	3
留学生への援助	0	0	1	0	0	1
身体障害者への支援	0	1	0	0	0	1
その他	11	5	13	8	12	49
特に問題はない	0	2	1	0	0	3

人数

設問 33. 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

【生物学科】

1. 教育の方法を知らないと思われる。基本的な教育方法を理解してほしい。
1. 学生の言葉や事情、人間性を尊重し、誰もが同じように振舞えるわけではないことを理解して欲しい。優秀な学生や過去の卒業生を基準として見るのを辞めて欲しい。誰もが頑張り続けられるわけではないと理解して欲しい。
5. 研究室が狭い
5. 講義等受ける上で受講しやすい環境作り
6. キャリア教育について、将来設計よりも就活を見据えた講義に力を入れてほしかった。
8. 経済支援の詳細をもっと気軽にしれるようにしてほしかった
9. 研究には多少の頑張りが必要だが、体調を崩したり学校に来られなくなった学生への対応をもう少し手厚くしていただけると幸いです。また、未然に防ぐことも大切だと思うので、ガイダ

ンスの説明時に困ったらまずどこへ相談するべきかの資料配布などがあったらいいな、とも思いました
無指定　特になし
無指定　特になし

【分子生命学科】
1.　就職活動に寛容になってほしい。
3.　補習を行う日程が先生によって異なり、急に行われたりすることは改善してほしい。
3.　研究室配属の参考に使用する用のGPAシステムの廃止　（単位を落としてもGPAに含まれないため、落単者が有利になっているから）
4. パワハラにもっと対応して欲しい。
6. 過去の情報を公開してほしい
8.　親がある程度の収入があるにもかかわらず、その家の方針で大学にかかる費用(授業料や生活費)の支援が親から受けられない学生に対する大学からの支援
8. 1人ぐらしの人に対する給付型の奨学金が欲しいです
12（教育知識についての研修(教員に受けて欲しい)）　学生の意欲を削ぐ行動をしたり、心ない言葉をかけたりすることが減るよう研修してほしい。
12（よく分からない）　分からないから

【食料資源学科】
2.　自分の学科に興味を持つことが難しかった
5.　講義室・研究室に冷房をつけてほしい
5.　農生棟が暑すぎるのでクーラー必要です。
6.　就活をもっと取り組みやすくしてほしい
9.　少数かもしれないが慣れない研究やコロナで精神が不安定になっている生徒は必ずいると思うので担当の先生が気にかけると良いかなと思います
12（実験の機会）授業内容の重複を無くすことで、より多くの学ぶ機会や実験をする機会を作って欲しい。特に実験の機会は増やして欲しい。印象に残った科目にもあげた食料資源学実験は、研究室選択や院への進学を考えたり、研究というものを知ったり、座学で習ったことを実践したりできることから重要なファクターだと思うからだ。また、可能であれば、全先生の実習を受けることができ、その先生の研究内容ともある程度一致した実験を行って欲しいと思う。
無指定　ない
無指定　すぐに思いつかなかった。

【国際園芸農学科】
1.　私は間接的にしか関わった事が無いが、セクハラやアカハラ・人格否定を行う先生たちは、研究や人に教えるという行為をするべき人間に値しないと感じる。受験生が彼らによって、合否をつけられていることに、とても腹立たしい。また、実際に被害があった友人や先輩たちがとても可愛そう。法律については全く詳しく無いので、具体的な要望の選択範囲が狭いが、辞職や離職、謝罪や示談があることは当然だと思う。

1. 研究室によって卒業研究・卒業論文に求める質が異なる。一部の研究室では教員が質の高い卒論を要求するあまり、長時間大学で過ごす人もいる。中には学生の人格を否定するような発言する教員がいることも友人から聞いている。その友人はカウンセラーに相談しながらかなり限界の状態で頑張っていた。このようなことを踏まえて、今後は研究室での指導方法について実態調査を行い、ある程度のガイドラインを統一するべきだと思う。
2. オンライン授業の際に教員も生徒も戸惑う場面が多かったため、講義の開き方・受け方についてより細かく指導することが必要に感じた。
2. 教室によっては空調が完璧とは言えず、講義に集中出来ないことがあった。
2. 成績が分かるのが遅すぎると思う
5. 全室にクーラーの完備や品揃えがあるコンビニのような小さな店舗をつくってほしい。
5. クーラーの設置、マイクの新調、大学と隣接する場所での喫煙の更なる取り締まり、喫煙所が無いためか道路で喫煙する人が多く、学内の移動の時にマスクをしていても辛い。
5. 投影機などの OA 機器が古いように思えます。
8. 周りの人でお金に困っている人がいた。かつ、貸与の奨学金を借りていて将来不安そうだった。
8. 一人暮らしの学生だけでなく、自宅から通う学生にも低所得の家庭があるためその層の支援を手厚くしてほしい
9. メンタルのケア

無指定　特にありません。

無指定　私自身満足しているから。

【地域環境工学科】

4. わからないことを聞きやすい環境を作る
5. 自習室が満員で、勉強場所に困った経験があるため。
5. 農生棟を新しく改修して欲しいです
6. 土日でも気軽に相談できる場所が欲しい

設問 34. 総合的に判断して、本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

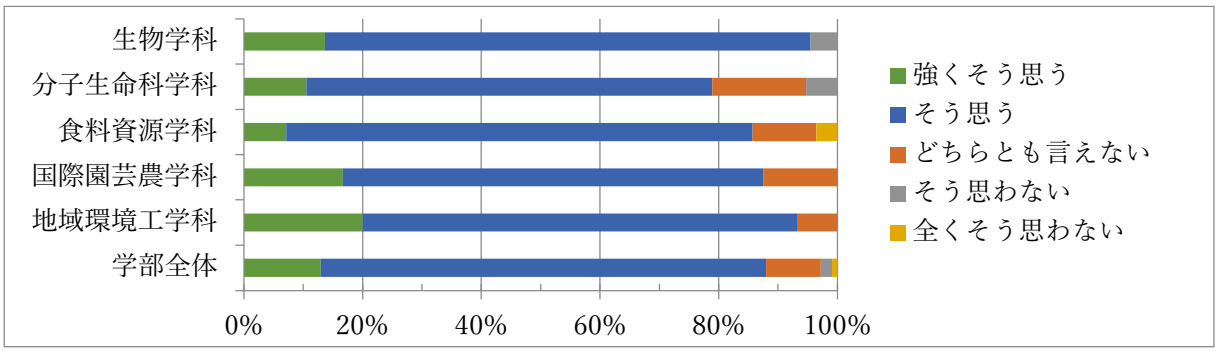


図 I－ 34a. 本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足か

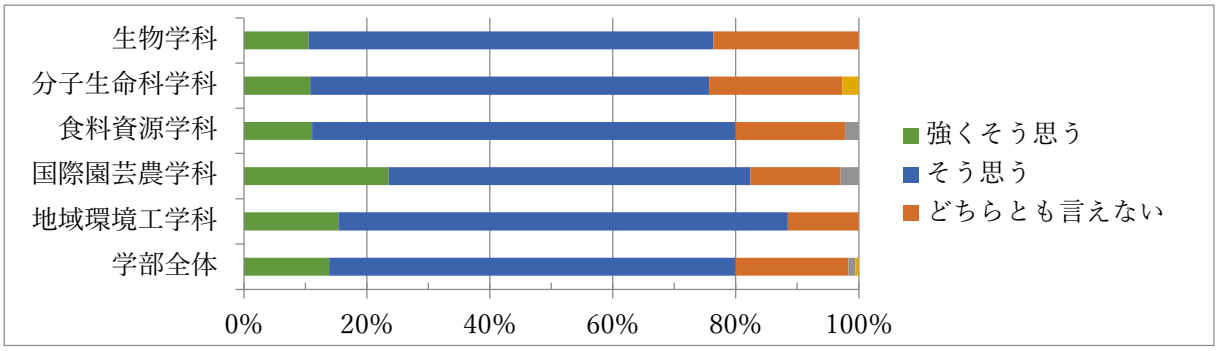


図 I－ 34b. (令和 2 年度実施分)本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足か

本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますかという設問に対して、学部全体では『強くそう思う』と『そう思う』の割合が8割強であり、昨年とほぼ同じ傾向であった。過去4年間で最高値であったが、ほとんど同値といえよう。やはり、今年も地域環境工学科で高い値をとっていた。また、実施年度によるバラツキがみられるが、『強くそう思う』と回答して、本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に充分満足して母校である本学を卒業していく学生は1割から2割であるといえよう。

設問 35. 上記のように回答した理由を記入して下さい。

【生物学科】

1. 四年間で講義への取り組み方がとてもかわったから
2. あまり不満は感じなかったため。
2. 4 年間、想像していたより充実した生活を送ることができたから。
2. 楽しい学生生活だったと感じている
2. 設備が充実しているから。
2. 特に不満はないため。
2. 指導教員には多くの時間を割いていただき、指導いただいたから
2. 有意義な授業が多数あり、今後、社会で活かせるもの（専門知識やスキルとはまた別の）を培

えたと思うから
2. 優しい先生が多い印象
2. 生徒に優しい先生が多かった
2. 自分が何事もなく研究を行えたから。
2. 不満な点は少なかったから。
2. 真摯に付き合ってくれたと思うから
2. 入学して期待通りのことを学べたため
2. 学びたいことを学べたから.
4. 以上の通り
無指定　印象が薄い

【分子生命科学科】
1. 満足できたから
1. どちらかと言うとあまり不満点がないから
2. 一応疑問には答えてくれるから。
2. 特に不満がないから
2. 自身の担当教員以外の教授は優秀な人が多い印象なため。
2. 研究室に配属してから学ぶことが楽しくなったから
2. 商品コラボなど、地域の企業と協力し貢献していると感じるから。
2. 特にない
3. システムはしっかりしていると感じるが、形骸化している、もしくは周知が不足している部分があると思われる。

【食料資源学科】
1. 満足してはいるが、学部だけでなく、総合大学の良さをもっと生かせるといいなとは思う。
1. 充実した種類のコースがあり専門的なことを学べるから。
2. おおむね満足しているから
2. 青森ならではの特色ある研究が多く、県に貢献していると感じる。
2. 不自由なく学業に専念できたため。
2. 特になし
2. これと言った不満が思いつかないので、満足していると思う
2. いろんな分野の講義を受けられたから
2. 研究室の先生にお世話になったから
2. 同じ学部・学科内でも多様な研究が行われており、その研究領域の広さがカリキュラム全体に反映されていたから。
2. 学生を見捨てることなく、ちゃんと寄り添ってくれてると思うから
3. ほかの学部・学科と比べないとわからない
3. 自分のためになってると感じた
3. 先生方や学生、研究室ごとに取り組みの姿勢に大きく差があると思うから。
5. あまり面白くはなかった、しかし自分があまり好きでないことがわかったのは大きな学びでし

た

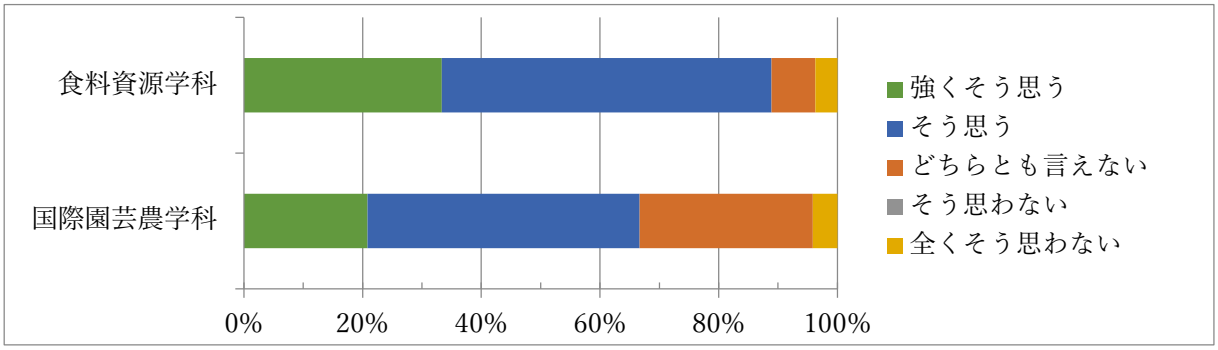
【国際園芸農学科】

1. 先生方が個性豊かな研究をおこなっていて、それについて学びたいと考えさせられました。
1. 必要となった実験機材を購入出来たため。
2. 大学に期待していたことは学ぶことができたから
2. 他を余り知らないため比較ができないが、自身の知りたいことをきちんと知ることができる環境だったと感じたから。
2. 4年間を通して成長できたと感じているため
2. カリキュラムには不満なく勉強や研究を進めることが出来たから。
2. 研究も講義も専門的でいいと思う。
2. 地元や全国のメディアでも紹介されたり評価されるものだと思うから
2. 不満はないから。
2. 指導教員にも丁寧に指導していただき、満足のいく研究が出来たから。
2. 学生の自主性次第でどこまでもいける環境であると思うから。
2. 学んだ内容からその重要性や自分が将来の日本の食・農業を支える人間として考えることが多くなった。
2. 特に不満がないため
2. 産学官連携した研究を行っていて、世の中にも役立つ研究がされていると感じたから
2. 講義や卒業研究を通して知ったから
3. 良いときも有れば悪い時も同じくらいある。

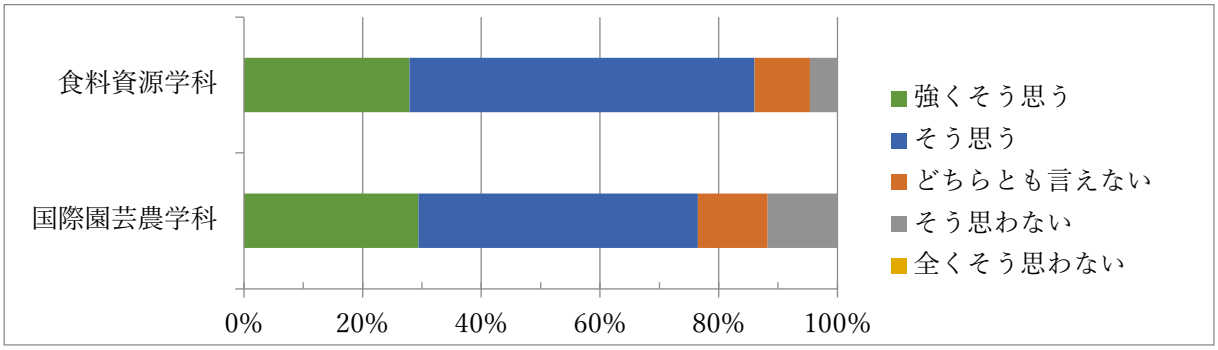
【地域環境工学科】

1. 全員真面目に取り組んでいたから
1. 丁寧に指導して頂いたため
2. 満足しています
2. たくさんの体験をすることが出来た
2. 特に不満はないから
2. 特に不満はないため
3. 他学科についてよく分からないため。

設問 36. 食料資源学科と国際園芸農学科の学生のみお答えください。皆さんの受けたカリキュラムは「食」（主に食料資源学科の皆さん）または「国際化」（主に国際園芸農学科の皆さん）の知識を身につける上で役立ったと感じていますか。



図Ⅰ－ 36a’．カリキュラムは「食」または「国際化」の知識を身につける上で役立ったか



図Ⅰ－ 36b.（令和 2 年度実施分）カリキュラムは「食」または「国際化」の知識を身につける上で役立ったか

設問では、食料資源学科と国際園芸農学科の学生のみの回答を指示していたが、生物学科 1 名、分子生命科学科 1 名、地域環境工学科 2 名の回答があった。そこで、それら 4 名の学生の回答を削除して、図Ⅰ－ 36a’に設問の指示通り、食料資源学科（27 名の回答）と国際園芸農学科（24 名の回答）の回答のみを図にして、図Ⅰ－ 36a’に示した。また、昨年度のデータと比較するために、図Ⅰ－ 36b に令和 2 年度の結果を示した。

カリキュラムは「食」または「国際化」の知識を身につける上で役立ったかという設問に対して、おおむね昨年と同様な傾向であった。双方の学科とも『強くそう思う』と回答した比率は、2 割から 3 割で、『そう思う』を含めた肯定的な回答は、6 割強から 8 割強を占めた。食料資源学科では、食を学ぶことに役だったとの回答が複数あり、国際園芸農学科では海外研修に多くの関心が集中していた。しかし、『どちらとも言えない』と回答した学生は、1 割から 3 割いる。

設問 37. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【食料資源学科】

1. そう感じたから
1. 食品関連の授業がほかの授業よりも多く感じたため
1. 生産から流通までの間に関わることや、そのための生化学・化学・衛生的なことも含めた食に関わることを幅広く学ぶことができていると思うから。
1. 「食」を成分だけでなく、物性や農業・自然とのつながりの点から捉えることができるようになったから。
1. 食品に特化した学科は他にないのでとても魅力的と思う。
1. 生産・流通から食品加工学、栄養学、また分析学まで本当に様々な視点から「食」を学べたと思う。栄養学や加工学だけではなく、その上流まで学ぶことが出来るのが本当に強みだと改めて感じる。
2. 食品そのものの栄養や物質だけでなくできあがるまでの過程、またそこから起こりうる害や事故など食品について幅広く学ぶことが出来た。
2. 食についての知識を身に付けられ、卒業後の職についても食をもとにした道に進むことができたため。
2. 知らなかったことがいっぱいだったため
2. 弘前大学に入学した時よりは食に興味を持ったと思うから
2. 食への関心が増えた
2. 食に関する授業は多かった
2. 生活でも活かせる知識があった、先生も教えてくれるから
2. 授業や実験、研究を通して、全体的に学ぶことができたから
2. 食品について学ぶ機会があった。
3. 研究室で使ってないから
3. 専門の講義は役立ったが、研究室配属後は特に学ぶ機会がなかった。
5. 国際化に関することは講義で少しやった程度なので、カリキュラムそのものからは特にありませんでした

【国際園芸農学科】

1. 講義を受けて日本における食料・食糧問題、それに関わる問題について多く知れたと思うからです。
1. スーパーで食品を見た時やニュースで食品関連の報道を見たときに知識を活かすことができたから
1. 海外研修のおかげ
2. 入学前に知らなかった、食物に関する知識を身に着けることができたと思うから。
2. 食に関わる日本とそれ以外の国の関係や、日本の環境に注目して物事を考えることができるようになったと感じた。特に海外研修で実際に現地を見ることによって、日本との違いや関係を文章だけでなく肌でも感じることができた。
2. 海外研修などで海外の農業を学ぶことができたのは大きいが、あとは英語の単位が多かったの

みで国際化がテーマとなった専門科目などは少ないようには感じた。

2. 世界の農業情勢の知識を入れることができたから.
2. 国際的な食料経済事情を学ぶことが出来たし、海外研修もあり実際に見て学べた。
2. 大学生活を通じて、日本という国の中でいかに生産者と消費者の間に考え方の違いがありその間を埋めるべく食に精通した人間が啓蒙活動等を進んでする必要があることを痛感した。
2. 世界の食と農業について日本と比べられた。
2. 海外の事を学べる授業があったから。
2. 海外研修があったので
2. 海外研修で海外に行くことで日本以外の国の文化を体感することが出来た
2. 国際化は海外研修や英語といった受動的なものでなく、主体性をもって学習に取り組むべきではないか。英語が苦手な学生が多くいた。
3. 英語の知識を向上させることができなかったため
3. 国際化とは何かここでの質問の内容がわからないから
3. 国際的な学びは英語の講義が多いだけでも足りず、海外研修だけではなくその経験を生かす機会を作ることでできると思う。
3. 座学、研修等で世界的な農業について扱った項目は多かったが、特別国際的な内容と呼べるものは少なかったようにも感じる。
5. 排他的な風潮や、異文化を受け入れる姿勢があまり無かった。国際化の概念から教えるべきである。

Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学研究科の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、2 年間、本研究科で教育を受け今まさに修了しようとしている学生を対象に、研究科における教育について総合的な評価を得ることを目的とした。

調査方法：電子メールで学生に本アンケートについて周知し、Forms で回答を依頼した。なお、アンケートは個人を特定できない設定にして行われた。

調査対象：令和 4 年 3 月研究科修了予定者 38 名

調査期間：令和 4 年 2 月 8 日～3 月 23 日

有効回答者数：32 名（回答率 84%）

調査項目：設問は以下のとおりである。（ただし、下記の[　]の項目名は、回答結果の分析にあたってグループ化のために設けたものである。）

[研究科・コースの教育目標等の認識]

設問 1. あなたの所属コースをお答えください。

設問 2. 本研究科の教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属するコースについて、概要を知っていますか。

設問 4. あなたが所属するコースの入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

設問 5. あなたが所属するコースのカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。

設問 6. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[コースの教育について]

設問 7. シラバスは受講する科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

設問 8. あなたが所属するコースで受けた教育（講義・演習など）について満足していますか（修士研究については設問 25 で別に聞きます）。

設問 9. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 10. 本研究科では年度初めに指導教員がガイダンスを行っていますが、その内容は適切であったと思いますか。

[教員の指導について]

設問 11. 所属するコースの教員の学生への指導や対応に満足していますか。

設問 12. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 13. 大学院で履修した科目の成績評価についてお尋ねします。成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

設問 14. 疑問や異議があったとき、あなたは実際にどこに相談し、その対応に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

［学生の主体的学習について］

設問 15．講義の受講に当たり、受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準にでは、 2 単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間)。学習時間にはインターネットを利用した情報収集、講義でのプレゼン準備やレポートの作成、研究室内でのプレゼン準備などに要した時間も含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。

設問 16．学術特別研究（学術研究プログラム)、実践特別研究（実践研究プログラム）あるいは課題研究（社会人入学者）に要した時間は 1 日平均どの程度ですか。実験に要した時間に加え、研究に必要な文献調査や文献講読に要した時間も含めて計算して下さい。

設問 17．大学院教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

設問 18．大学院在学中のカリキュラムで、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

［学生への教育支援、施設・設備について］

本研究科や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんのニーズを把握するために、以下のようなルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか（複数回答可）。

1．学生センター	2．指導教員と面談	3．指導教員以外の教員と面談
4．学科長と面談	5．学生総合相談室	6．保健管理センター
8．就職支援センター	9．学部長直言箱	10．学長直言箱
11．その他	12．利用したことはない	

設問 19．(1) 学業

設問 20．(2) 学生生活

設問 21．(3) 進路

設問 22．上記(1)～(3)の項目について、それぞれの対応に関して改善すべき点があれば以下に簡潔に記入して下さい。

設問 23．本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

	充分満足	ほぼ満足	どちらとも言えない	やや不充分	かなり不充分
講義室	○	○	○	○	○
実験・実習室	○	○	○	○	○
蔵書室（４階）	○	○	○	○	○
学生自習室・学生控室（２階）	○	○	○	○	○
修士研究を行った研究室	○	○	○	○	○

設問 24．各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

［修士研究について］

設問 25．修士研究について満足していますか。

設問 26．上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 27．研究科修了後のあなたの進路は次のうちのどれですか。

設問 28．本研究科のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。

設問 29．本学および本研究科の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

［本研究科の教育のあり方について］

設問 30．あなたが本研究科を修了するに当たり、大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じていますか。

設問 31．上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 32．本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。

設問 33．上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

設問 34．本研究科で学生が期待する教育を受けるとともに充実した学生生活を送るために、希望する点や、大学または学部が改善すべき点があれば具体的に記入して下さい。

設問 35．総合的に判断して本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

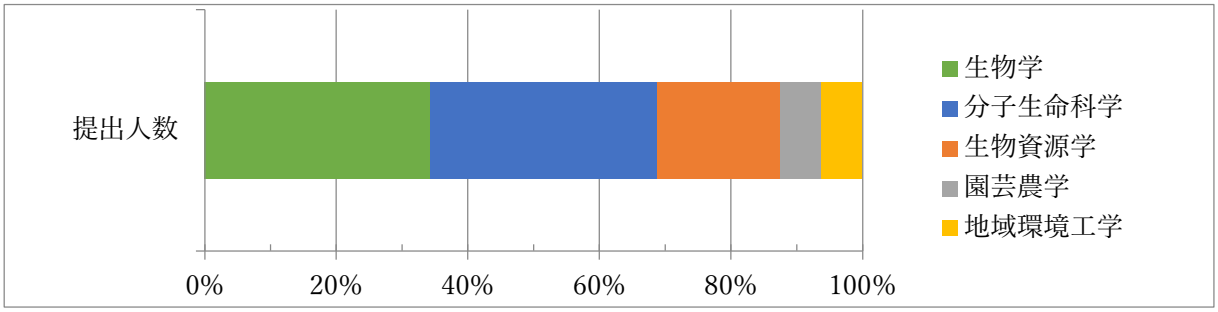
設問 36．上記のように回答した理由を記入して下さい。

２．調査結果

設問 1．あなたの所属コースをお答え下さい。

表Ⅱ－ 1．コース別アンケート回答率

コース	対象者人（人）	回答者数（人）	回答率（%）
生物学コース	13	11	85
分子生命科学コース	12	11	92
生物資源学コース	9	6	67
園芸農学コース	2	2	100
地域環境工学コース	2	2	100
合　計	38	32	84

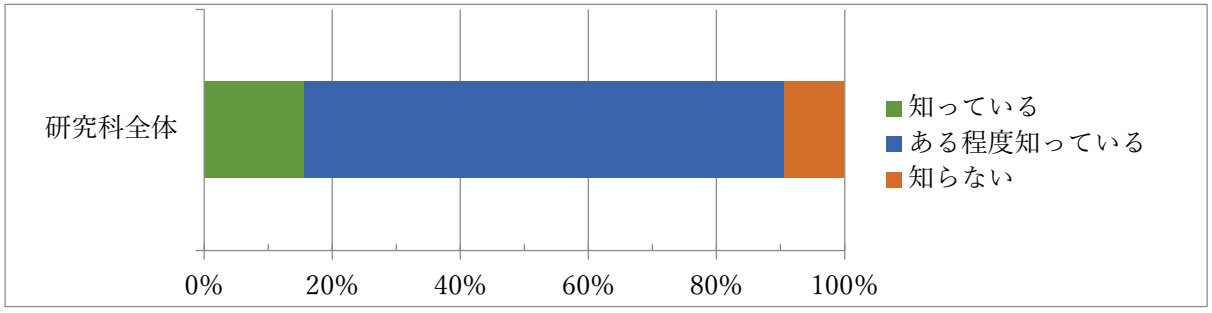


図Ⅱ－ 1．コース別アンケート回答率

研究科全体の回答率は 84%であり、令和 2 年度(89%)、令和元年度(88%)と比較して若干減少した。近年、アンケート回収率の増加を目的に、修士論文研究発表会前からアンケートを実施して各学科長が回収するようになったため、回答率が増加傾向にある。研究科のアンケート対象人数は、学部の対象人数の 2 割弱と少数であることから、1 人、2 人といった少数の未回答があった場合、回答率の増減に大きく効いてくる。当年度は生物資源コースの 70%を下回る回答率に大きく左右されて、研究科全体の回答率が減少したと推察される。今後、回収率をさらに増加させるためには、修士論文研究の指導教員から学生に対してアンケート実施の声掛けを積極的に行うことも必要と考えられる。

[研究科・コースの教育目標等の認識について]

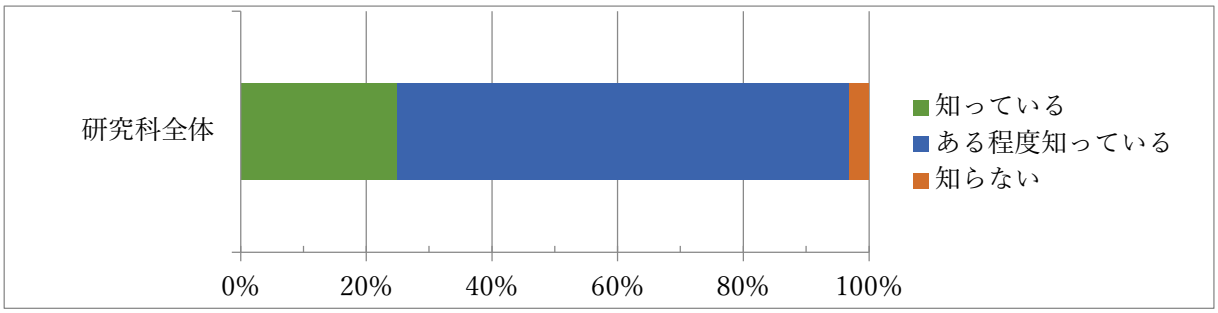
設問 2．本研究科の教育目的および教育目標を知っていますか。



図Ⅱ－ 2．本研究科の教育目的等の認識

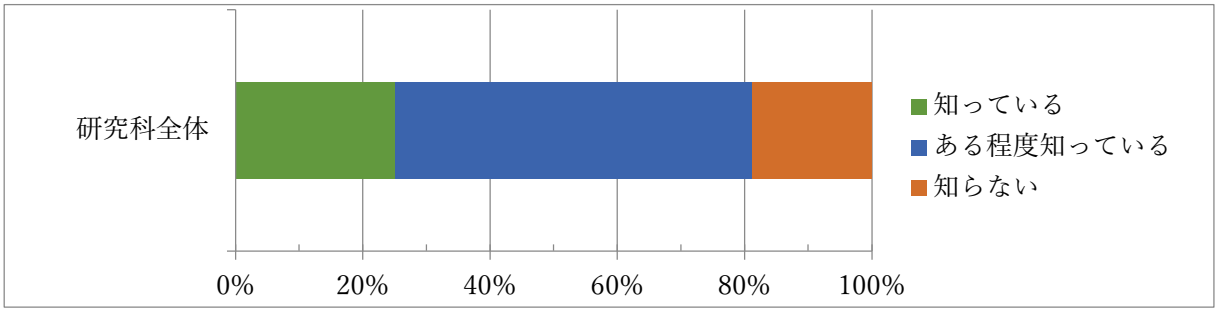
「知っている」および「ある程度知っている」が 91%と、令和 2 年度(87%)、令和元年度(76%)と比べて顕著に増加した。引き続き、入学時に行う各コースでのガイダンスや指導教員を通じて、教育目的および教育目標の周知を図る努力を継続する必要がある。

設問 3. あなたが所属するコースについて、コースの概要を知っていますか。



図Ⅱ－ 3(1). 所属コースの概要の認識

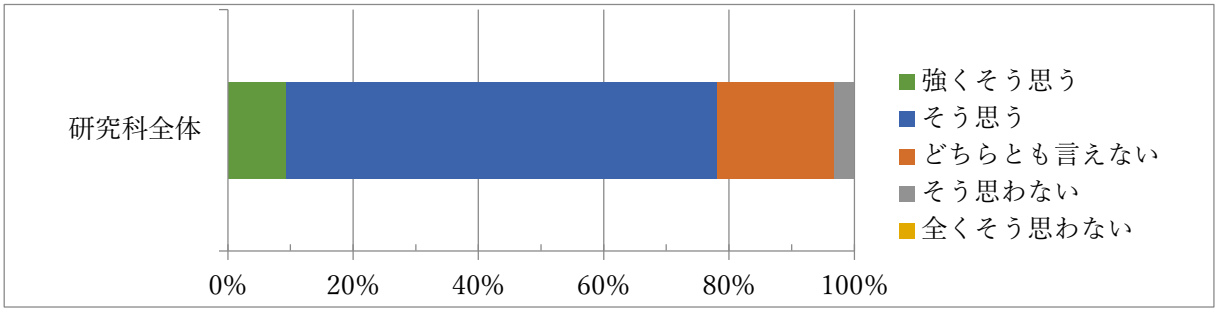
設問 4. あなたが所属するコースの入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。



図Ⅱ－ 3(2). コースの入学者受け入れ方針の認識

概要については、「知っている」および「ある程度知っている」が 91%で、令和 2 年度は 89%、令和元年度は 86%であった。また、入学者受け入れ方針については 81%となり、令和 2 年度は 74%、令和元年度は 79%であった。どちらも令和 2 年度を若干上回り、平成 30 年度（69%）と比較すると高い値を維持している。引き続き、大学院入試説明会や研究室単位で行うゼミの空き時間等において、丁寧に説明し、周知に努める必要がある。

設問 5. あなたが所属するコースのカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。



図Ⅱ－ 4. コースの概要とカリキュラムの合致度

「目標に合致しているか」の問いに対し、「強くそう思う」および「そう思う」は 78%で、令和 2 年度(64%)、令和元年度(76%)であり、令和元年度並みに増加した。引き続き、大学院入試説明会や研究室単位で行うゼミの空き時間等における説明を継続することが必要である。

設問 6. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【生物学コース】
2　自分たちの研究テーマが合致しているから
2　研究でメカニズムについて研究できているため
2　研究活動を奨める体制が整っていると思うから
2　基本的に合致している。ただし講義のなかで必要性の感じないものが散見される
2　ある程度講義や研究室で学ぶことができたから
2　到達目標の達成度合を、講義の成績によって適切に評価されていたと思うから
2　弘前大学の先生方が素晴らしいということもあり、コースおよび副コースの科目は非常にカリキュラムに即した授業をしてくださったと思っている。しかし、それ以外の授業に関しては意義が感じられるものが少なかった。特に地域志向型の授業でそれが顕著であった
2　生命科学に関連したものが多い
2　講義でもこのような点を強調した内容があると感じられたから
2　自身の学びたかった分野を深く学ばせてもらっているから
3　研究活動でコースの目標に合致した活動を行うことができたため

【分子生命科学コース】
2　自身の学びたかった分野を深く学ばせてもらっているから
2　幅広い分野のことを学べるから
2　指導教官が熱意があり、生物学に興味を持つ学生の希望に応えようとしてくれたため。
2　指導教官以外に同じ学科、ときには違う学科の教授からも知識を学ぶ機会が多く、分子生物学に関して知識を深められたため
2　力を身につけることができたから
3　学習内容が理工学部の物質創成化学科と類似しているから
3　あんまり気にしていませんでした
5　結局のところカリキュラムよりも自分自身での勉強がだいじになってくるから

【生物資源学コース】
2　作物に関する授業、研修が多いため
2　多種多様な研究を通して社会の課題に向き合う仕組みがあるため
2　食品関係の講座、研究室の多さ
2　研究関係知識が備えました

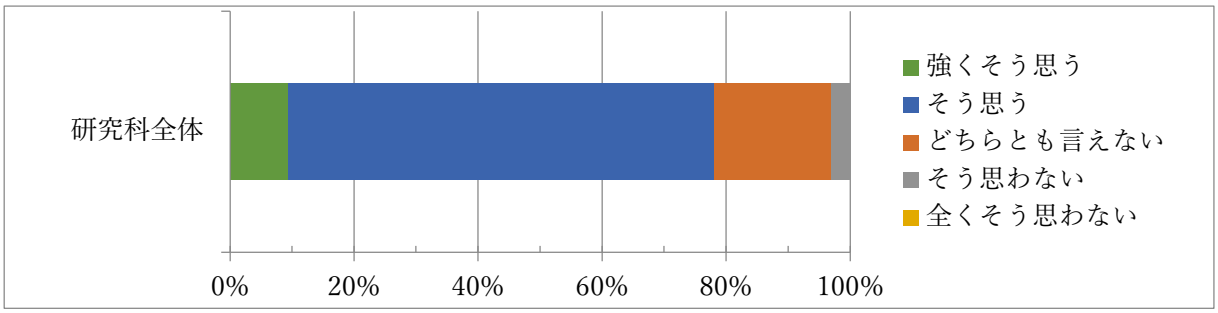
【園芸農学コース】
2　なし

【地域環境工学コース】

2　目的に合った授業や研究を行なっているから

［コースの教育について］

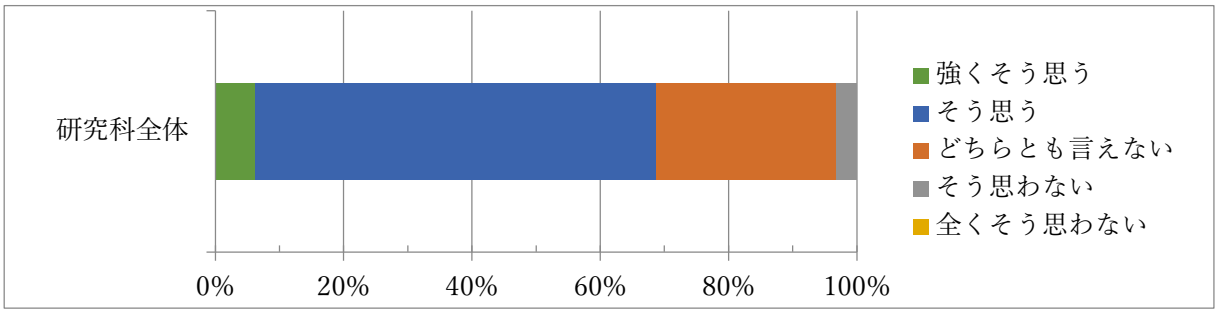
設問 7. シラバスは受講する科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。



図Ⅱ－ 5. シラバスは役立ったか

「強くそう思う」と「そう思う」の合計は 78%であった。令和 2 年度(83%)よりも若干減少したものの、令和元年度(76%)と同程度となった。引き続きシラバスの内容と講義の内容の乖離を是正するとともに、初回の授業において当該授業科目の目標等を丁寧に説明する努力を継続することが必要である。

設問 8. あなたが所属するコースで受けた教育（講義・演習など）について満足していますか（修士研究については設問 25 で別に聞きます）。



図Ⅱ-6. 所属コースで受けた教育に満足しているか

「強くそう思う」および「そう思う」の合計は 69%で、令和 2 年度(72%)、令和元年度(71%)と同程度となり、平成 30 年度（66%）からの改善を維持した。「そう思わない」および「全くそう思わない」は 3%と、令和 2 年度(9%)、令和元年度（8%）から改善した。受講する意義や必要性を感じることができなかった旨の少数意見にも配慮し、授業内容を改善していくことが必要である。

設問 9. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【生物学コース】

1　自分の専門以外の分野を、学部の頃には得られなかった知識が十分に得られたと考えるため。

1　学部からさらにステップアップした内容を学べたと感じたから

2　自分の研究分野に近いものを選択できた

2　演習を含めてうけられたため

2　研究活動の負担にならなかったから

2　設問 6 と一緒

2　十分だったが、あんまり受講しなくてもいいかなという講義が必修だったりした。

3　学生の希望に添わない講義があったから。地域貢献は重要な課題だと思うが、思想を強制されるのはおかしいと思った。

3　授業内容は良かったが、大学院なのに授業数が多すぎるから。

3　所属コースの目標とは関係のないとしか思えないような講義が必修科目となっていたため。

【分子生命科学コース】

2　自身の学びたかった分野を深く学ばせてもらっているから

2　広く知識を知るにはよかったと思う

2　幅広く学べたから

2　専門科目以外の知識も学ぶ機会があってよかった。

2　分子生物学に関して多くの教授から講義を受けることができ、広い分野から分子生物学を学べたから。

3　集中講義のプレゼンテーション演習があまりためにならなかった気がするので。

3　シラバスと内容が違うことがあるから

2　力を身につけることができたから。

4　あまり意味がなかったため

【生物資源学コース】

2　内容が充実していたから。

2　知らない分野について知識を与えるだけではなく、自分で考える力をつけることができるため

2　楽しく学べたから

2　実験と授業のバランスがいいと思う

【園芸農学コース】

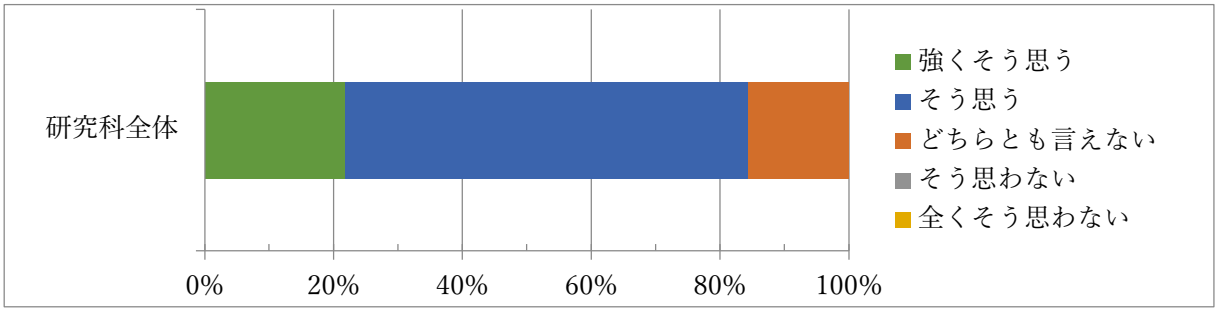
2　なし

【地域環境工学コース】

2　そのコースの専門の授業を受けることができて視野が広がったから

肯定的な意見では、「専門分野を深く学ぶことができた」「自分の専門以外で幅広く学ぶことができた」等の理由が挙げられており、一定の教育効果があったと考えられる。中立的・否定的意見では、講義・演習の意義を理解できなかった旨の理由が挙げられていた。このため、大学院に進学して学ぶ意義を学生に考えさせることの必要性が示唆された。

設問 10. 本研究科では年度初めに指導教員がガイダンスを行っていますが、その内容は適切であったと思いますか。

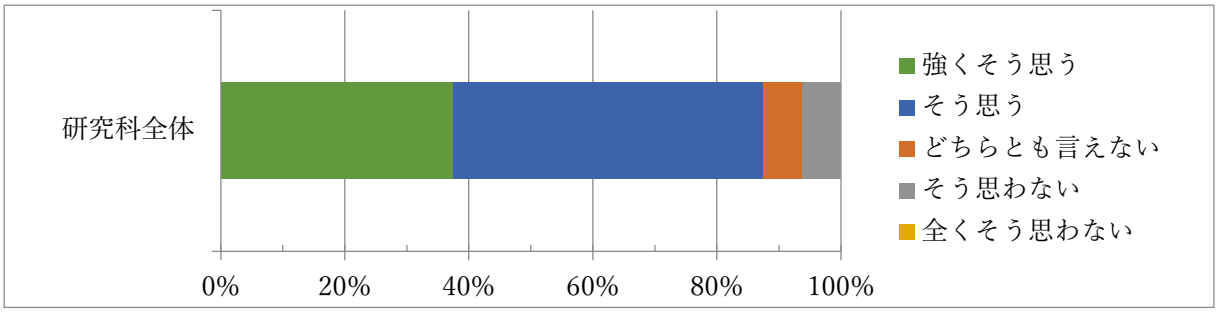


図Ⅱ－ 7. ガイダンス内容は適切だったか

「強くそう思う」と「そう思う」の合計は 84%で、令和 2 年度(70%)からは改善し、令和元年度(84%)の水準に戻った。「そう思わない」「全くそう思わない」が 0%となり、令和 2 年度(6%)、令和元年度(3%)から減少した。「どちらとも言えない」の回答を減少させるために、学生と指導教員の双方向のコミュニケーションを伴ったガイダンスを取り入れるような工夫を施してもよいと考えられる。今後も引き続き改善の努力・工夫を続ける必要がある。

[教員の指導について]

設問 11. 所属するコースの教員の学生への指導や対応に満足していますか。



図Ⅱ－ 8. 教員の指導や対応に満足か

「強くそう思う」および「そう思う」の合計は 88%で、令和 2 年度(74%)よりも大幅に増加したものの令和元年度(95%)の高い水準には戻らなかった。「そう思わない」「全くそう思わない」は 6%で、令和 2 年度(9%)よりも若干減少したものの、令和元年度(0%)の水準までは減少しなかった。引き続き、大学院生への指導や対応の改善に努めることが重要である。

設問 12. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

【生物学コース】

1　熱心に指導していただけたから

1　いつもお世話になっているため

1　研究や演習を通じて真摯に指導してくださった

1　自分の研究や私生活などで、学生が積極的にやりたいことを優先できる空気があったから

1　あくまで修士での研究を優先させてくれる配慮をしてくださる教員が多かった

1　質問に丁寧に答えてくれた

1　指導教員の熱心かつ的確な教育指導を受けることができたから

2　適切な指導や助言をいただけたため

2　研究を始めとする相談事に真摯に対応してくれたから

2　支えてもらっているため

【分子生命科学コース】

1　毎週ミーティングを開いて指導してくれる

1　毎週最低でも 1 度はミーティングの時間を設け、実験の方針を定めていただいたため

2　自身の学びたかった分野を深く学ばせてもらっているから

2　様々な専門分野に明るいから

2　どんなに忙しくても疑問がある時は指導教官は時間を作ってくれたため

2　満足しているから

2　丁寧に指導していただけたから

3　人によります

4　おかしい対応が多々あるため

【生物資源学コース】

1　学業で不明な点があったときに多様な解決方法を示してくださるから

1　楽しく学べたから

2　いつも気を配ってくれるから

2　就職活動と研究に対してのバランスを極力保つよう心がけていただいていると感じたため

2　お世話になりました

【園芸農学コース】

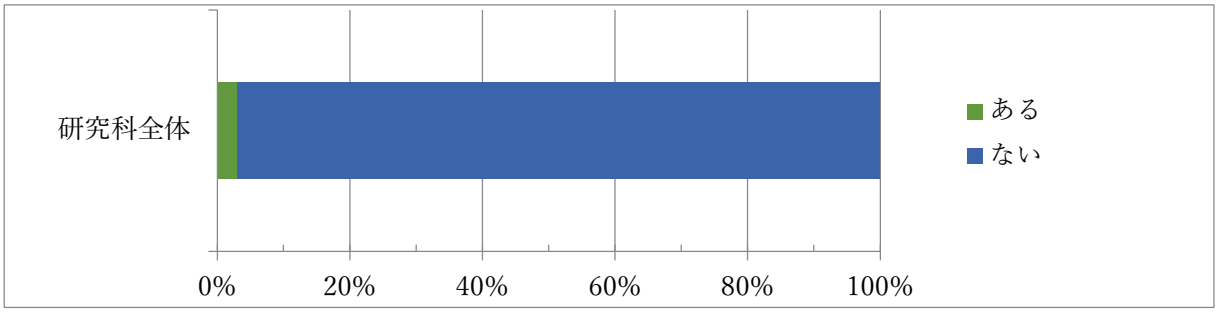
1　なし

【地域環境工学コース】

2　熱心にかつ、的確に指導してもらったから

ほとんどは「懇切丁寧な指導を受けることができた」という回答であったが、一部でコミュニケーション不足を感じていた学生もおり、継続的な改善努力が重要である。

設問 13. 大学院で履修した科目の成績評価についてお尋ねします。成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。



図Ⅱ－ 9. 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはあるか

「成績評価の結果に疑問や異議を持ったことがある」が 3%で、令和 2 年度(9%)、令和元年度(13%)から大幅に改善した。重要な項目であるためさらなる改善が望まれる。

設問 14. 疑問や異議があったとき、あなたは実際にどこに相談し、その対応に満足しましたか。

【生物学コース】

2　教員

2　教務。満足。

【分子生命科学コース】

2　特になし。

【生物資源学コース】

2　成績評価について、疑問等はなかった。

2　異議なし

【園芸農学コース】

2　疑問なし

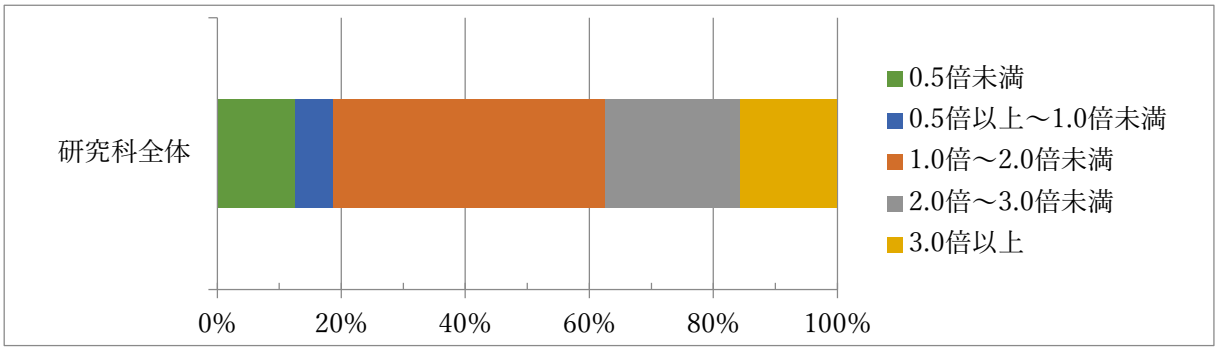
【地域環境工学コース】

2　相談していない

疑問や異議があったときに実際に相談等の行動をした大学院生もいたが、疑問や異議がなく相談しなかった大学院生もいた。相談窓口の周知や相談等がしやすい環境を整備してきた成果が、少しずつ現れはじめていると思われる。

[学生の主体的学習について]

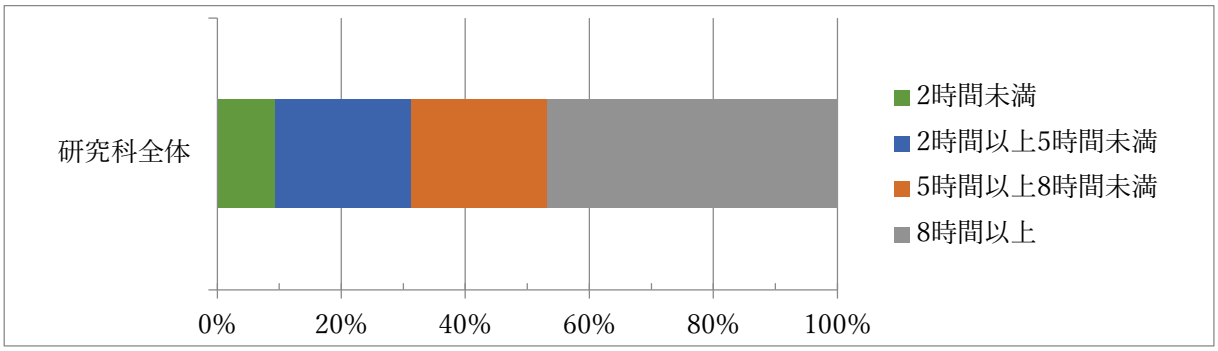
設問 15. 講義の受講に当たり、受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準では、2 単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間には<u>インターネットを利用した情報収集、講義でのプレゼン準備やレポートの作成、研究室内でのプレゼン準備などに要した時間も含めて</u>も構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。



図Ⅱ- 10(1). 1 日平均どの程度の時間を予習や復習に充てたか

講義時間の 2 倍以上の時間を予習や復習に充てたという回答は 38%で、令和 2 年度(28%)、令和元年度(21%)よりも大幅に増加した。しかし、大学設置基準を満たしていない大学院生が過半数を占めることから、引き続き自主的学修を進めるための声掛けを行うなどといった改善が必要である。

設問 16. 学術特別研究（学術研究プログラム）、実践特別研究（実践研究プログラム）あるいは課題研究（社会人入学者）に要した時間は 1 日平均どの程度ですか。実験に要した時間に加え、研究に必要な文献調査や文献講読に要した時間も含めて計算して下さい。



図Ⅱ- 10(2). 1 日平均どの程度の時間を研究に充てたか

5 時間以上もしくは 8 時間以上と回答した大学院生が 69%で、令和 2 年度(73%)、令和元年度（73%）から若干減少した。引き続き、学生が研究に対するモチベーションを維持できるよう、学生への大きな負担にならない程度の課題を課すことを通じて、指導を工夫していく必要がある。

設問 17. 大学院教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

【生物学コース】
・研究の一環であると考えていた
・講義について、特別何かをしたことはなかった
・求められたもの以上の成果を出すように取り組んだ
・講義で習う内容に関連する情報を復習時に調べることで知識を蓄えた
・あまり意欲的には取り組まなかった
・復習を頑張った
・主体的，意欲的に臨んだ
・その講義の内容を自身の研究に活かせるように取り組んだ
・講義の目標、特に担当教員が講義を通じて伝えたい事柄について考えて受講した
・なるべく自分の研究の糧になるような講義を選択するようにした

【分子生命科学コース】
・講義内容を将来どのように生かせるか考えながら取り組んだ
・分からない部分は積極的に調べて先生にも聞いたりした
・新しい知識を増やそうと努力しました
・実験の息抜きとして参加していた
・主体的に取り組んだ
・疑問があれば教員に聞くようにしていた
・自身の専門分野と離れた内容で講義中に理解するのが難しいものであっても、講義後に主体的に調べて理解するようにした
・積極的に取り組んだ
・あまり前向きではなかった

【生物資源学コース】
・意欲的な姿勢で取り組んだ
・講義中は資料中にないことをメモするよう心がけた。レポートを作成する際に、講義資料だけでなく関連する文献を収集した
・関連論文の探索や日本語の資料を熟読した
・学生の時と同じ
・修士は実用主義でいいと思う、講義内容は研究関係に繋がる

【園芸農学コース】
・真面目に

【地域環境工学コース】
・知識を自身の糧にする姿勢
・講義を受けてわからないことは調べた

概ね、多くの大学院生が主体的および意欲的な姿勢で取り組んだと回答しており、教員の提示した要求に応えていると思われる。

設問 18. 大学院在学中のカリキュラムで、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

【生物学コース】
・プレゼンテーション演習 1　授業内容が酷かった。本研究科には必要のない授業だと思った。
・キャリア教育　石塚先生の就活についてのガイダンスが面白かったから
・動植物研究史特論。研究への理解を深め，それ発表する知識の基礎をつくるという点で大きな意義があった
・農学生命科学特論Ⅱ：大学院で学んだ経験が、自分の人生にどのように役立つのか考えることができたから
・動植物研究史特論

【分子生命科学コース】
・プレゼンテーション演習 1。理系のプレゼンテーションにあっているのかが疑問でした
・細胞制御学特論。生物学の世界的な権威にメールを送る機会がありいい経験になったから
・なし
・特になし

【生物資源学コース】
・植物分類学：身近な植物を深く知ることの出来る機会になったため
・キャリア開発セミナー　修士の学生がどのように社会で活躍されているか知ることができた
・畜産動物学　畜産についての視点が変わったから
・蔬菜科学

【園芸農学コース】
（コメントなし）

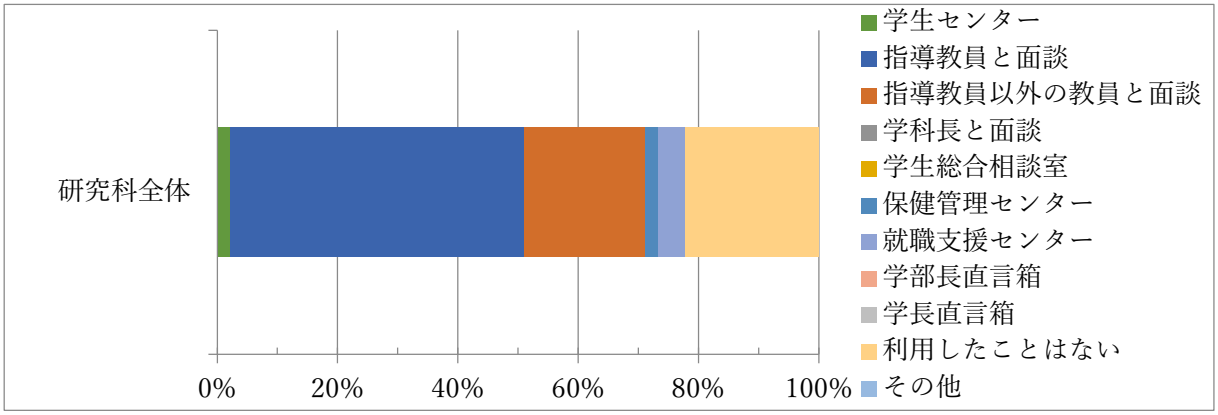
【地域環境工学コース】
・農地工学　実際の現場も見ることができ、より学ぶことができたから

プレゼンテーション演習について学生に授業の目的や意図が伝わっていないようで不満が見られる。過去には平成 26 年度から平成 28 年度、平成 30 年度は内容に対する不満が多く、平成 29 年度は肯定的な意見が多かった。令和元年度は肯定的意見と否定的意見の両方が見られたが、令和 3 年度では 2 件ともに否定的意見のみであった。学生の状況や考え方によって受け止め方が様々である。初回の授業のガイダンスにおいて、教員が受講生に対して授業の目的・意義等をしっかりと伝える努力・検討が必要である。

[学生への教育支援、 施設・設備について]

本研究科や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんのニーズを把握するために、以下のようなルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか（複数回答可）。

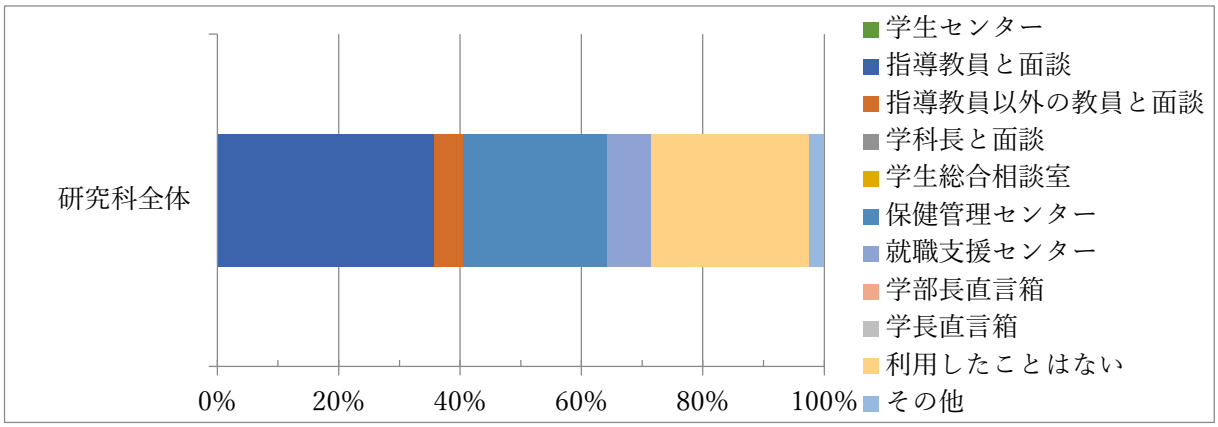
設問 19. (1) 学業



図Ⅱ- 12(1). 学業に関する相談窓口

「利用したことがない」と回答した学生は 22%で、令和 2 年度(0%)から大幅に増加したしたものの、78%の学生がいずれかの相談窓口を利用できていた。相談した学生の多くは「指導教員と面談」、「指導教員以外の教員と面談」(全体の 69%)であった。教員と大学院生の間の垣根を低くする努力と、学内外の相談窓口情報の周知を継続することが必要と思われる。

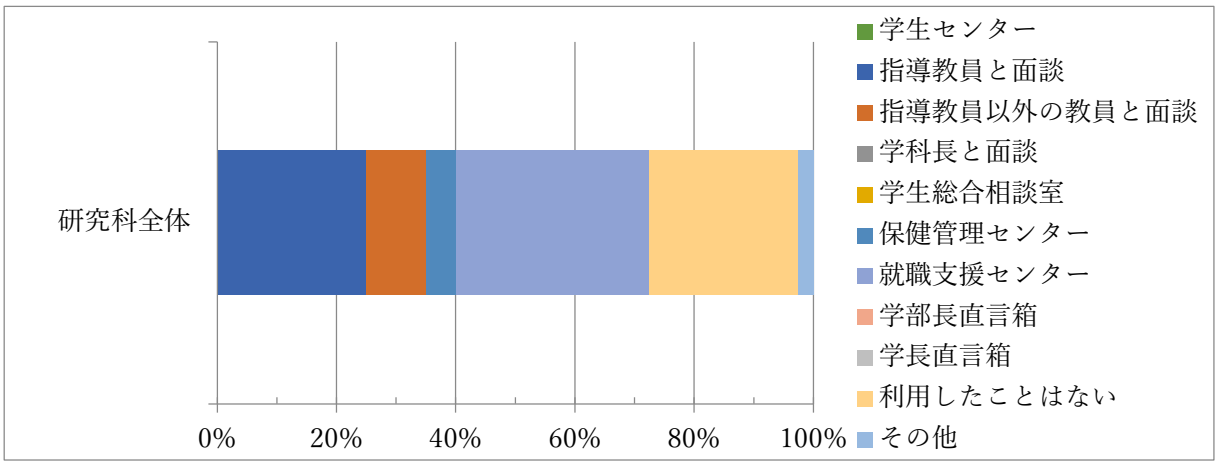
設問 20. (2) 学生生活



図Ⅱ- 12(2). 学生生活に関する相談窓口

「利用したことがない」と回答した学生は 26%で、令和 2 年度(0%)から大幅に増加したものの、74%の学生がいずれかの相談窓口を利用できていた。相談した学生の多くは「指導教員と面談」、「指導教員以外の教員と面談」(全体の 40%)であった。引き続き学生生活に関する相談ができる窓口が複数用意されていることを周知する努力が必要である。

設問 21. (3) 進路



図Ⅱ－ 12(3). 進路に関する相談窓口

「利用したことがない」と回答した学生は 25%で、令和 2 年度(0%)から大幅に増加した。就職支援センターの利用は 33%であり、令和 2 年度(30%)、令和元年度（32%）と同程度であった。

設問 22. 上記(1)～(3)の項目について、それぞれの対応に関して改善すべき点があれば以下に簡潔に記入して下さい。

【生物学コース】
(コメントなし)

【分子生命科学コース】
・とくになし
・ないです
・なし
・特になし

【生物資源学コース】
・特になし
・なし

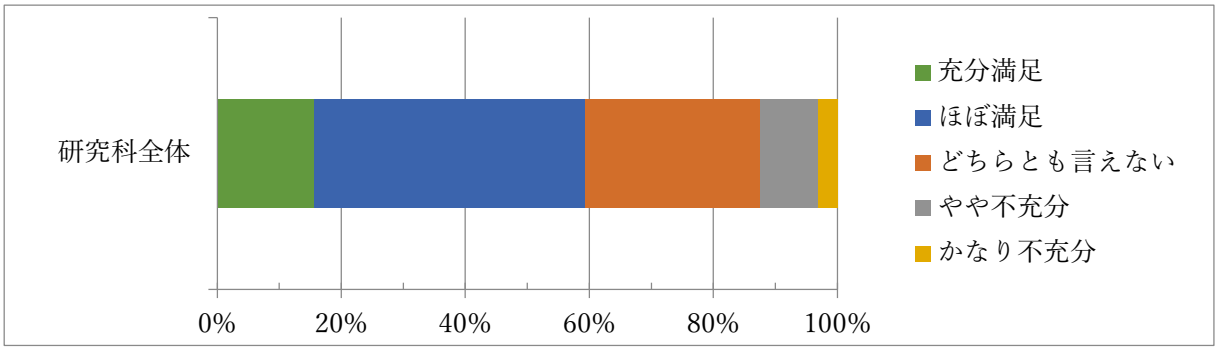
【園芸農学コース】
・なし

【地域環境工学コース】
・特にない

改善すべき点が見受けられなかったものの、今後も引き続き親身になって学生の相談に応じることが大切である。

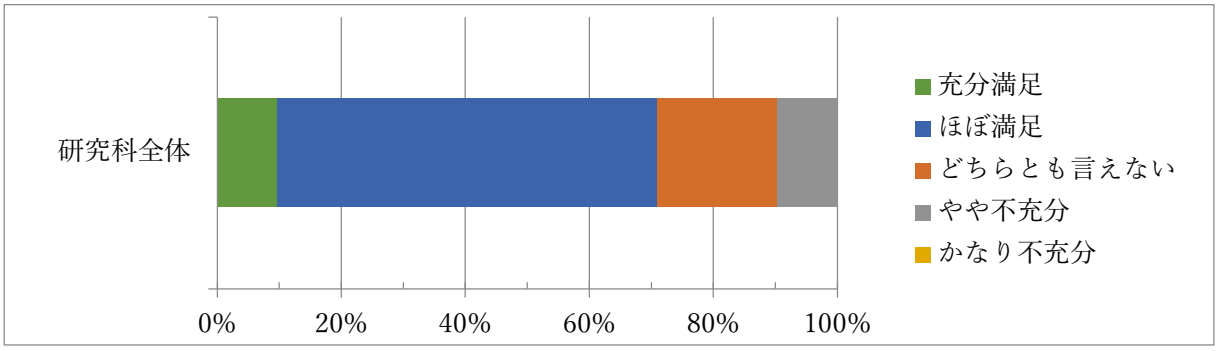
設問 23. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

1. 講義室



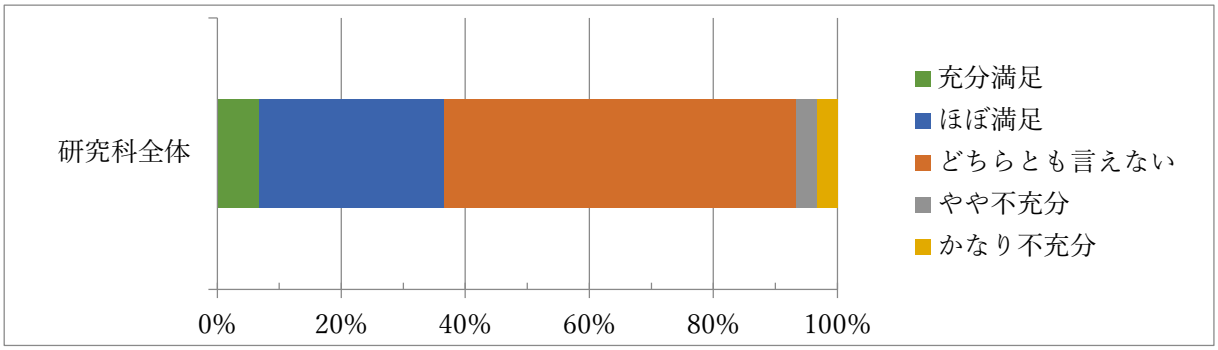
図Ⅱ－ 13(1) － 1. 本学部の施設に対する満足度（講義室）

2. 実験・実習室



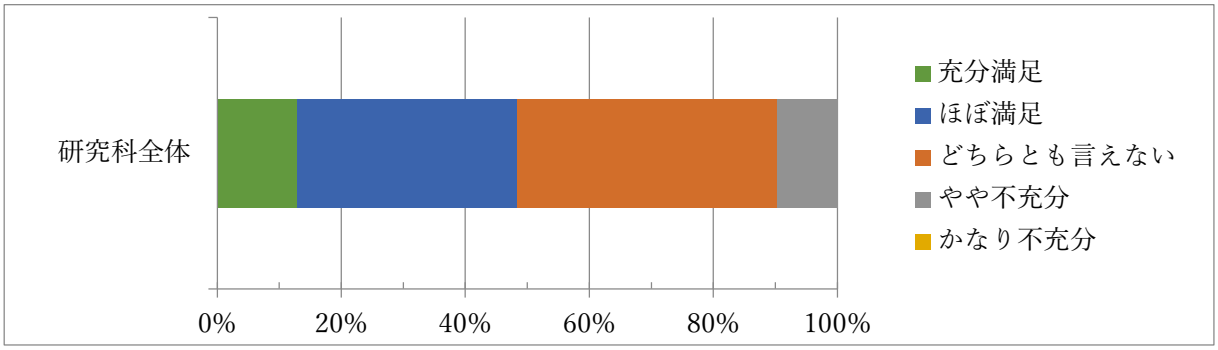
図Ⅱ－ 13(1) － 2. 本学部の施設に対する満足度（実験・実習室）

3. 蔵書室［4 階］



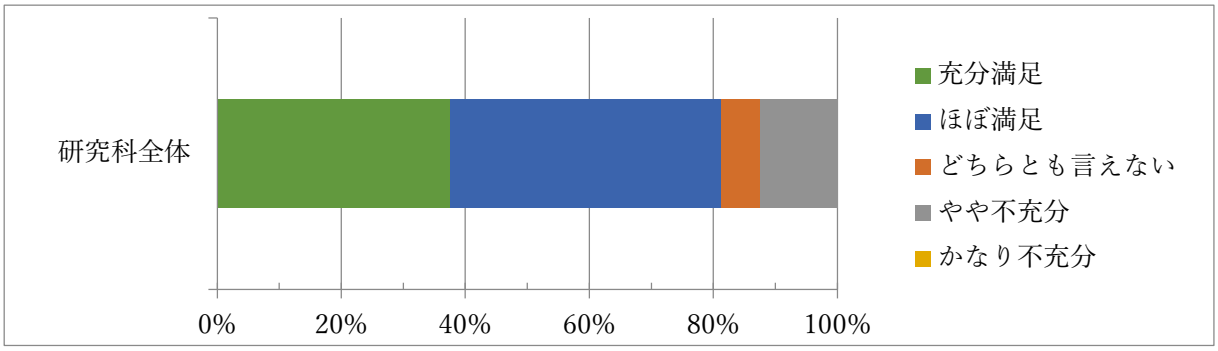
図Ⅱ－ 13(1) － 3. 本学部の施設に対する満足度（蔵書室［4 階］）

4. 学生自習室、学生控室［2 階］



図Ⅱ－ 13(1) － 4. 本学部の施設に対する満足度（学生自習室、学生控室［2 階］）

5. 修士研究を行った研究室



図Ⅱ－ 13(1) － 5. 本学部の施設に対する満足度（修士研究を行った研究室）

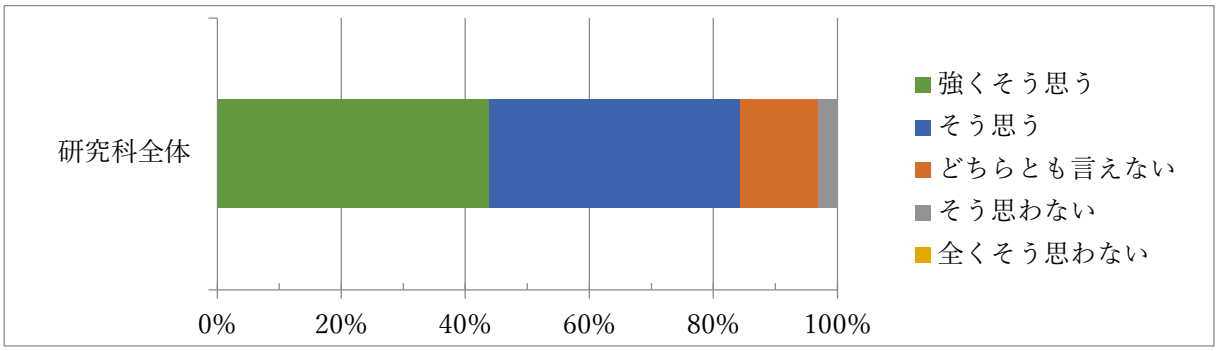
本学部の施設について、1. 講義室、2. 実験・実習室、3. 蔵書室、1. 学生自習室・学生控室（2 階）、5. 修士研究を行った研究室の 5 箇所を対象に満足度を聞いた。5. 修士研究を行なった研究室の満足度が 81%となり、令和 2 年度(76%)から増加した。平成 28 年度（30%）、平成 29 年度(26%)、平成 30 年度(23%)、令和元年度(26%)と比較すると飛躍的に向上した。

設問 24. 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

・研究室に人が非常に多いのにそれに伴った部屋の大きさでは全くない。もう一部屋あっても足りないくらいには困っている
・研究内容や所属人数に応じて柔軟に研究室の配置をやりくりする必要がある。学生生活の後半は研究室のスペースが足りなくなっていた。コラボ弘大や農学生命科学部棟の中には有効に活用されていないスペースがいくつか見られるので早急に解決した方が良い。所属する研究者や学生が有意義な時間を過ごし研究をスムーズに行うために必須
・研究室の居室に十分な冷房を付けてほしかった
・2F 自習室・控え室の机が汚いことが割とあったので、机をしっかり拭けるものが置いてあればと思いました
・学生自習室でたまに騒ぐ学生がおり迷惑だった
・特になし
・私の利用していた実験室は必要なものの量に対して十分なスペースが取れていません
・エアコンの増設
・特になし
・学生実験室に冷暖房施設が欲しい。特に夏は暑すぎて支障がでます
・実験室のエアコンが壊れて、修理の時間が長い
・なし
・特にない

例年と同様に講義室や研究室の冷暖房管理に関する要望が複数あった。これらを受けて、数年前よりいくつかの講義室に冷房設備を設置するなど改善を図っている。また、実験室や研究室のスペースについての要望もあった。物理的な制約を含めて様々な制限があるため、これらの要望に即座に答えることは容易ではないが、学生への丁寧な説明を行って理解を求めるとともに、継続して改善していく必要がある

設問 25. 修士研究について満足していますか。



図Ⅱ- 14(1). 修士研究に対する満足度

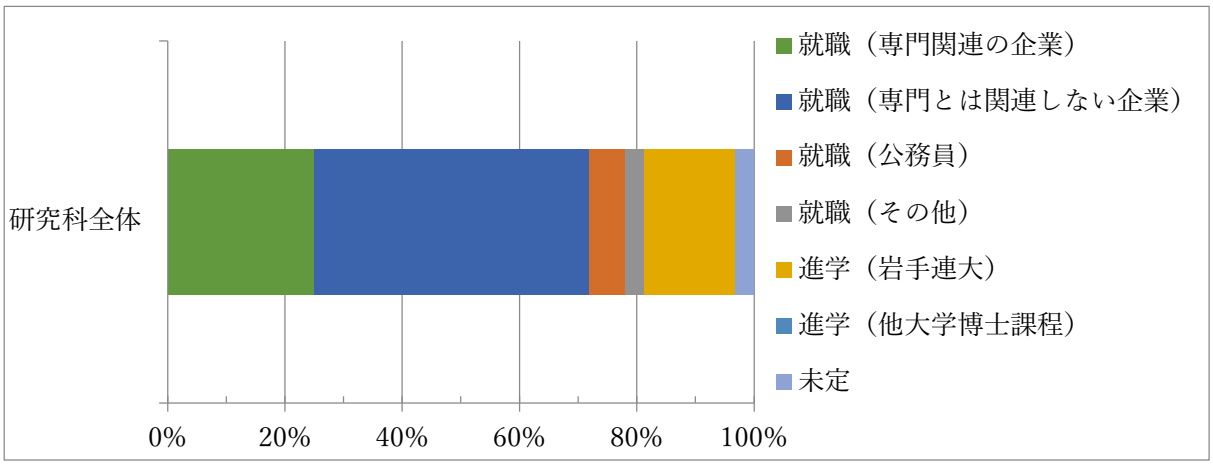
研究科全体で「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的評価は 84%であり、令和 2 年度(71%)、令和元年度の 76%から著しく増加した。また、「そう思わない」という否定的評価が 3%であり、前年度の 9%から減少した。平成 25 年度から平成 28 年度までの傾向として肯定的評

価の減少（平成 25 年度から順に 82%→76%→65%→63%）が続いていたが、平成 29 年度以降は改善が見られている。否定的意見に関しては、期待していた結果が得られなかった意見があったものの、前年度に挙げられていた「計画通り進められなかった」や人間関係に関する意見はなかった。

設問 26. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1　いい先生の指導を受けて、自分が興味あることを研究して、とても幸せなことです
1　なし
1　私がやりたい研究であるから
1　自分が行いたい研究を行うことができたから
1　指導教員が親身になってすすめてくださったため
1　指導教員，副指導教員から真摯な指導を受け，やりきることができた
1　研究を通して人間として成長できたため
1　自分のやりたい分野の研究ができた
1　自身の学びたい分野を 2 年間しっかり研究できたから
1　自分なりに研究をやりきることができたから
1　自分の中での目標を達成することができたから
1　充実していたから
1　指導教員の先生にとても熱心に指導していただいたため
2　研究に費やした時間に対して内容が薄かったと感じている
2　少し心残りがあるが、解釈できる結果を十分に出せたから
2　研究を通して様々なことを経験できたから
2　いろんなことを経験できた
2　自信の出した研究結果には満足しているが、もう少し時間があればより詳細なデータを出すことができたと考えているため
2　一部達成することができなかった研究があった
2　満足度まではいかなくても成果はでたので
3　あまりよくわからなかったため
3　勉強不足な点があった
3　研究に集中できたが、結果がもっとほしかったので
4　最後までできなかったため

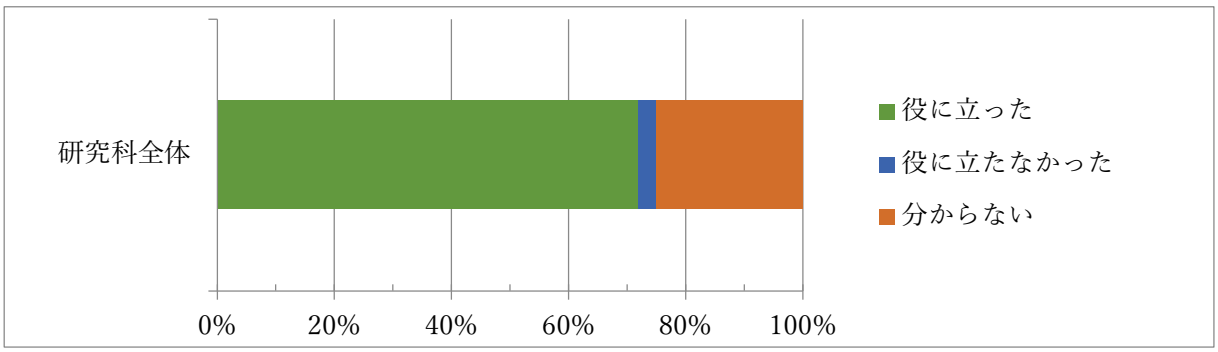
設問 27. 研究科修了後のあなたの進路は次のうちのどれですか。



図Ⅱ－ 15(1). 研究科修了後の進路

研究科全体では「専門関連の企業」への就職が 25%であり、令和 2 年度(26%)とほぼ同様であった。一方、「専門とは関連しない企業」への就職は 47%であり、令和 2 年度(35%)と令和元年度(29%)から増加した。「公務員」は 6%であり、令和 2 年度(13%)と令和元年度(10%)と比較して減少した。博士課程進学者は 16%であり、令和 2 年度(9%)と令和元年度(5%)から増加傾向にある。

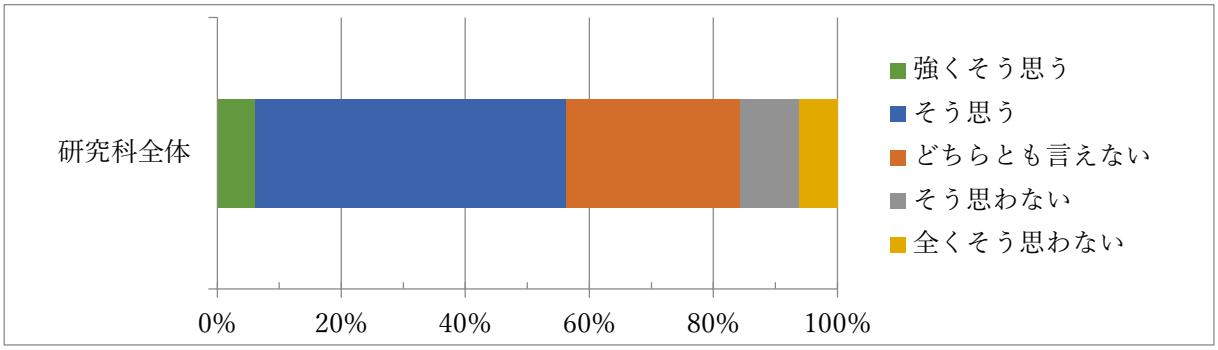
設問 28. 本研究科のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。



図Ⅱ－ 15(2). 研究科で学んだことはどのように進路に影響したか

研究科全体では「役に立った」が 72%であり、令和 2 年度(62%)と比較して増加し、令和元年度(74%)の水準に戻った。「役に立たなかった」は 3%であり、令和 2 年度(9%)、令和元年度(11%)から減少した。

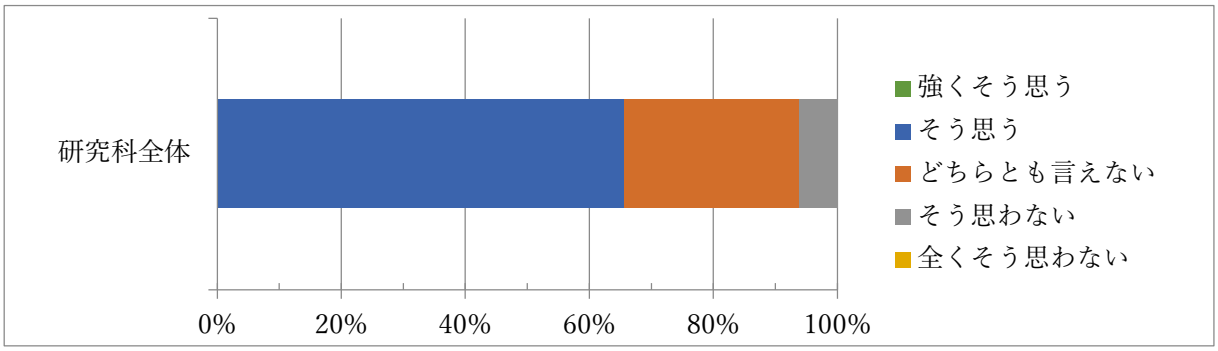
設問 29. 本学および本研究科の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。



図Ⅱ－ 15(3). 進路支援の取り組みは十分か

研究科全体では肯定的評価が 56%であり、令和 2 年度(37%)と令和元年度(42%)よりも増加し、平成 30 年度(56%)の水準に戻った。否定的評価は 16%であり、令和 2 年度(9%)から増加し、令和元年度(16%)の水準に戻った。

設問 30. あなたが本研究科を修了するに当たり、大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じていますか。



図Ⅱ－ 16(1). 大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたか

過去 3 年で見ると、研究科全体では、「強くそう思う・そう思う」(66%が今年、64%が昨年、68%が一昨年)、「どちらとも言えない」(28%が今年、25%が昨年、26%が一昨年)、「全くそう思わない・そう思わない」(6%が今年、11%が昨年、5%が一昨年) であった。過去 3 年間にわたり同程度で推移している。今後も継続してその傾向を把握し、修得度の低下が客観的にも認識されるようであればその理由とともに分析し改善する必要がある。

設問 31. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

2　研究に没頭できたから

2　大学時代よりも専門性の高い論文を読み、研究活動を行うことができたため

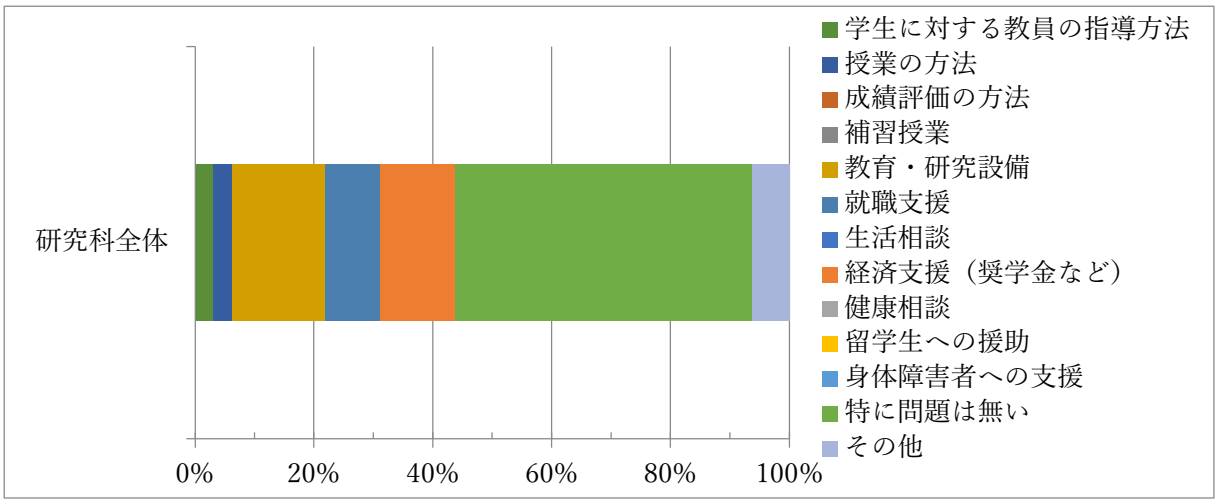
2　それだけの指導をコースの教員から受けた

3　勉強不足だった面があると思う

2　勉強は不十分であったと思うが、先行研究を参考にして、実験方法を考えたりデータに解釈をつける経験ができたから

2　修士論文を書き上げることができた
2　自分で納得のできる研究ができた
2　研究成果をあげることに成功したから
2　学部時代は知らなかった分野も学んだから
3　自分の中で、まだ足りないなと思うところがあるので
2　たくさん勉強はしたが、まだ学べることがあったと思うので
2　大学院修了者に求められるのは学部生よりも深い専門知識だと思われるが、研究の中で培った知識はそれに匹敵すると思われるから。ただ、自分の専門以外の知識についてはそこまで詳しくないのでそこが大学院修了者として正しいか分からない
2　力を身につけることができたから
2　専門の知識以外に英語やプレゼン等社会で必要とされるカリキュラムもあったため
2　成長しました
2　なし
2　授業及び研究で知識を身に付けることができたから
3　不勉強であったため
3　自分がまだ未熟だから
3　分からないため
3　幅広く情報を収集し、それを活かす力に不足な点があると感じる
3　自分の努力不足は身に染みました
3　その知識を生かせるような場面にいなかったため
4　充実した研究活動を行えたとは思わないから
4　勉強したらわからないことがたくさん出てくるから

設問　32. 本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。



図Ⅱ－ 17(1)．本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべき点

「学生に対する教員の指導方法」が 3%となり、令和 2 年度(19%)、平成 30 年度(9%)、令和元年度(11%)と比較して大幅に減少した。一方、「教育研究設備」は令和元年度(18%)、令和 2 年度(17%)と同程度の 16%であり、「問題あり」の中で最も高かった。「授業方法」は 3%と、令和 2 年度(15%)から大幅に減少した。例年、比較的割合の高い「就職支援」は、今年度は 9%にとどまった。「その他」が 50%に上り、具体的な回答としては、一部の指導教員による学生への不適切な指導、特定の授業科目に対する不満があった。

設問 33. 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

1　私の所属していた研究室は問題はなかったが、指導教官の指導方法に問題がある研究室もあったので、研究室とは離れた機関に介入して欲しい

5　時計・エアコンの設置

5　コロナ化で大変だったから

6　就職センターの使い勝手がよくなかった

6　分子の学生向けの説明会やインターンの情報がほしかった

8　授業料免除の経済支援が足りない。生活が苦しかった

8　支援金みたいなのをふやしてほしい

8　特になし

8　学費免除や現金支給のハードルを下げてほしい

12　専攻共通科目の内容：プレゼンテーション演習 I は見直す必要がある。使用する教科書の価格と内容，講師の指導内容などが拘束される時間に見合っていない。大学院の講義として不適。別の外部講師を招くか大学教員に依頼する方が学生は喜ぶ。農学生命科学特論 I も個人的に得るものは少なかった。県庁への就職を望む一部の学生のための講義になっている。現状の内容で進めるならキャリア系の講義として再編成するか名前を変えたほうが良い。そうじゃないならもう少し科学に関わる内容にしてほしい

12　地域志向型授業の改善：学内の研究と地域を結びつけることがこじつけすぎる。地域志向型

の授業を行う必要があるのなら、特定の学部、コースに限定すべき。基礎分野でそれを行うのは無理だと思う

13　特になし

13　特になし

13　なし

13　特にない

設問 34. 本研究科で学生が期待する教育を受けるとともに充実した学生生活を送るために、希望する点や、大学または学部が改善すべき点があれば具体的に記入して下さい。

・夜遅くまで研究をしている学生が多いので食べ物を買える自動販売機を置いて欲しい

・33 と同じ

・特になし

・忙しい学生向けにお金や、時間面でのサポートがあったら良いと思う

・特になし

・他大学の大学院と比較して、修士課程であっても経済支援が少ないと思った

・研究や学内でこっそりたばこをすって火災報知器誤作動させるのはいろんな研究室の学生や教員の方に迷惑がかかるで、対策した方が良いと思います

・特になし

・農学生命科学部の控室をもう少し拡張して欲しい。時には場所がたりない

・特になし

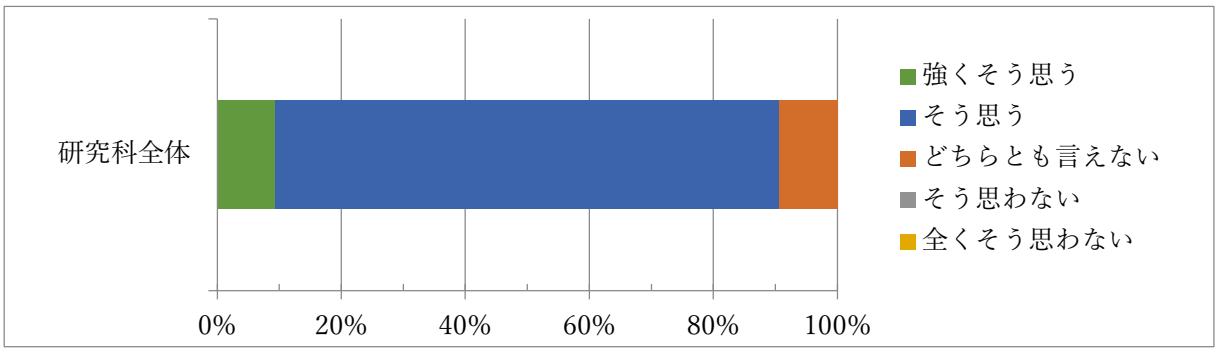
・特になし

・なし

・特にない

・継続して要望や批判に耳を傾け、改善を図っていく必要がある。

設問 35. 総合的に判断して本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。



図Ⅱ－ 19. 本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足か

設問 36. 上記のように回答した理由を記入してください。

1　多種多様な研究内容と指導方法があるため
1　講義を受けながらも十分な時間を研究に充てることができ、それなりに満足できる研究結果を出すことができたため。また、研究した内容に関連した企業に就職することができ、今後より知識を深めることができると思うから
1　充実した研究生活を送ることができたから
2　たくさん実験ができてよかったから
2　楽しかったから
2　研究に関しては非常に良かったが、授業が多くて大変だった
2　なんとなく
2　充実していたから
2　講義内容や経済支援に不満点はあるが、生物学コースは研究に熱心な教員が多く、指導教員と議論しながら研究を進められたため、専門性を高めることはできたと思うから
2　やりたいことを試せてよかったと思うから
2　修士の 2 年間、研究に集中して取り組めたと思うので
2　コース内で受けた教育・研究に関する指導には非常に満足している。しかし、研究科として受けた講義を含めると不満な点もあったため
2　改善点はありつつも、満足した学生生活が送れたため
2　必修講義の内容以外は満足しているため
2　研究活動を行う体制が整っていると思うから
2　不満は感じなかったが、とても助けられたと感じる場面は多くなかったため
2　自分の思うように活動できたから
2　満足していました
2　指導教員が素晴らしかった
2　なし
2　自分がやりたいと思っていた研究ができた
2　学生の主体性を尊重し、手厚い指導を受けることもできたから

「強くそう思う」「そう思う」が 91%であり、令和 2 年度の 67%を大幅に上回った。肯定的な意

見としては、十分なサポートが受けられた、研究に満足しているという意見があった一方、否定的意見はなかった。

Ⅲ. 教員対象教育評価アンケート

１． アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため学部教育に関する教員の意識について調査することを目的とした。

調査方法：電子メールで教員に本アンケートについて周知し、Forms で回答を依頼した。なお、アンケートは個人を特定できない設定にして行われた。

調査対象：令和 4 年 3 月に学部、研究科および生物共生教育研究センター、白神自然環境研究センターに所属する教員とした。

調査期間：令和 4 年 2 月 8 日～3 月 31 日

調査対象教員数：76 名　有効回答者数：67 名　（回答率 88.2%）

調査項目：設問は以下の通りである。

設問 1. あなたの所属学科およびコースをお答えください。

設問 2. 本学部および本研究科の理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属する学科・コースの教育目的を知っていますか。

設問 4. 本学部の入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

設問 5. あなたが所属する学科・コースの教育目的は学部ホームページにあるとおりですが、学科（教養教育科目および専門教育科目）およびコースのカリキュラムはその目標によく合致すると感じていますか。

設問 6. あなたはシラバス作成時に、学科・コースの教育目的や教育目標に従った講義内容にしようとしていますか。

設問 7.

(1) 授業内容がシラバス記載の内容と異なることをどのようにお考えですか。

1. シラバスと授業内容が異なることは極力避けるべきである
2. より良い授業内容を提供するためには、ある程度異なっても構わない
3. 担当科目の性格から、異なることは避けられない
4. その他（　　）

(2) 何らかの理由で授業内容がシラバス記載の内容と異なった場合、あなたは受講生に対する説明の必要性についてどのようにお考えですか。

1. 異なる理由を受講生に説明する必要がある
2. 受講生に説明する必要はない
3. その他（　　）

(3) 上記の設問で「2.」と回答した理由を教えて下さい。

設問 8. 本学では「授業方法改善のための学生による授業評価に関するアンケート調査」が平成 15 年度後期から実施されています。その結果についてお尋ねします。

(1) 学生による授業評価の妥当性についてどのようにお考えですか。

1. かなり妥当な授業評価である　2. ほぼ妥当な授業評価である
3. どちらとも言えない　4. やや妥当でない授業評価である
5. まったく妥当でない授業評価である

(2) 授業評価の結果を授業の改善に利用していますか。

1. 評価の低かった項目の評価を上げるよう努力している
2. 評価が低くても現在の講義の内容を続ける
3. 評価を上げるためには授業の質をある程度低くするのもやむを得ないと考えている
4. 学生の評価結果はあてにならないと考えている
5. 評価結果を見たことがないのでコメントできない

設問 9. 本学では教育改善のための各種の研修活動（ＦＤ活動）が行われています。ここで言う「ＦＤ活動」とは、学部・研究科・学科・コース等で実施されている教育改善に関わる各種研修活動全般を意味します。この１年間でどのようなＦＤ活動に参加されましたか。参加された回数をお答え下さい（参加されなかった場合は０を記入して下さい）。

(1)-1 学部主催のＦＤ活動

(1)-2 学科主催のＦＤ活動

(1)-3 その他の活動

(2) 参加された活動は、教育改善に役立ちましたか。

設問 10. 担当科目において学生の授業時間外の学習を促すためにどのような工夫をしていますか。

設問 11.

(1) 本学部の以下の施設と設備についてどのように感じていますか。該当する欄に○を書き込んで下さい。

(2) 上記で「4. やや不充分」と「5. かなり不充分」を選択した場合、その理由を次の欄に具体的に書いて下さい。

設問 12.

(1) 卒業研究は必要であると思いますか。

(2) 上記のように回答した理由を下欄に分りやすく記入して下さい。

設問 13.

(1) あなたの学科の大多数の卒業生は、本学部での教育により大学卒業生に相応の知識と学力を身に付けたと思いますか。

(2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

設問 14.

(1) あなたの専攻の大多数の修了生は、本研究科での教育により大学院修了程度の専門知識を身に付けたと思いますか。

(2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

２．調査結果

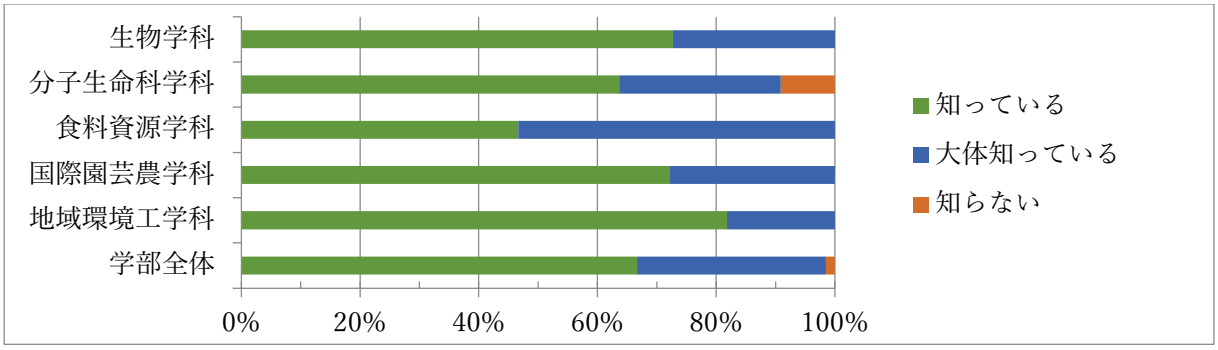
設問 1．あなたの所属学科およびコースをお答えください。

表Ⅲ- 1．回答率

学科	教員数	回答数	回答率	R3 年回答率
生物学科（白神含む）	14	11	79%	79%
分子生命科学科	14	12	86%	100%
食料資源学科	18	15	83%	75%
国際園芸農学科（農場含む）	20	18	90%	95%
地域環境工学科	10	11	110%	100%
学部全体	76	67	88%	88%

3 か年（令和元年度～令和 3 年度）の学部全体の回答率を見ると、91%→89%→88%と推移している。学科毎に見ると、「生物学科」(88%→79%→79%)、「分子生命科学科」(85%→100%→86%)、「食料資源学科」90%→75%→83%)、「国際園芸農学科」(100%→95%→90%)、「地域環境工学科」(90%→100%→110%）であった。なお、「白神自然環境研究センター（白神)」は「生物学科」に、「生物共生教育研究センター（農場）」は「国際園芸農学科」に含めて集計している。学部全体における本年度の回答率は昨年度とほぼ同様の水準であったが，「分子生命科学科」の回答率は昨年度に比べてやや減少傾向であった。一方で地域環境工学科の回答率が 110%となっており、重複回答が見られた。次年度のアンケート調査の実施方法は回答の重複が起きない Teams の設定で実施する必要がある。

設問 2．本学部および本研究科の理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

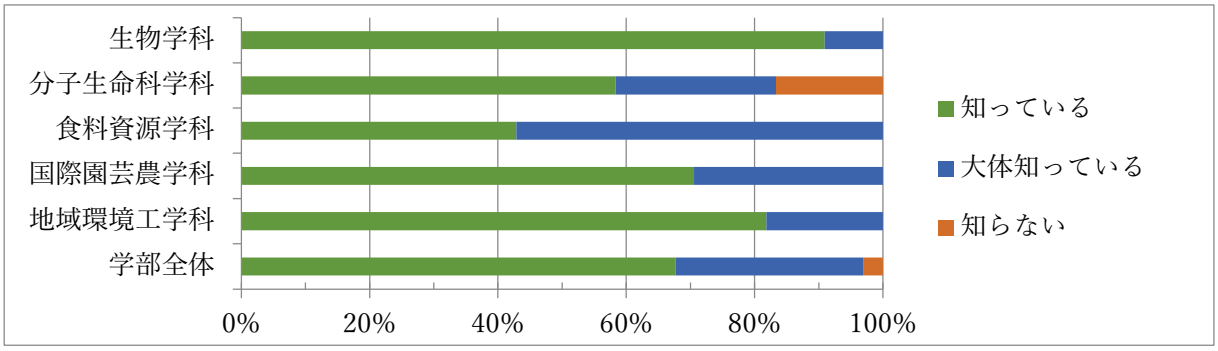


図Ⅲ- 2.　学部・研究科の理念・教育目的・教育目標の認識

学部・研究科の理念・教育目的・教育目標の認知について、3 か年の推移を学部全体で見ると、「知っている」(58%→60%→67%)、「大体知っている」(42%→40%→32%）と推移している。「知らない」と回答した割合は 2%であった（昨年度 0%)。本年度もほぼすべての教員が、学部と研究科の理念・教育目的・教育目標を概ね認知している。

3 か年の推移を学科別に見ると、「知っている」は「生物学科」(47%→73%→73%)、「分子生命科学科」(55%→50%→64%)、「食料資源学科」(67%→53%→47%)、国際園芸農学科」(52%→53%→72%)「地域環境工学科」(78%→80%→82%）であった。

設問 3. あなたが所属する学科・コースの教育目的を知っていますか。

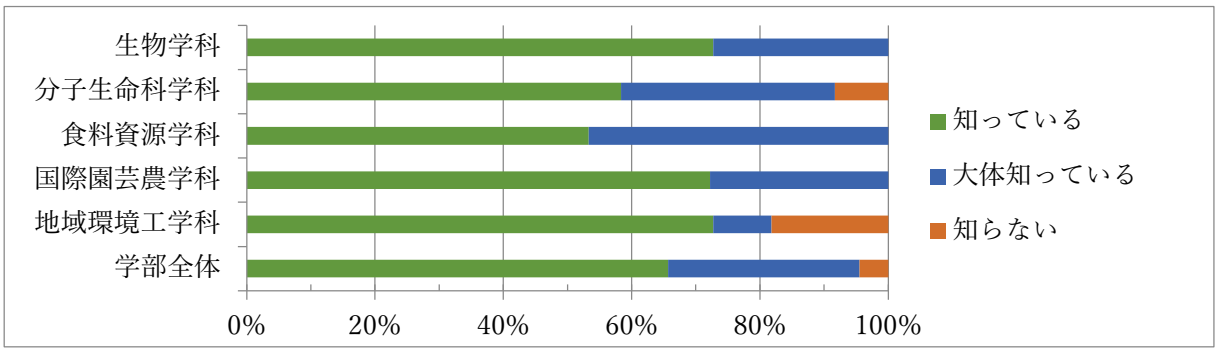


図Ⅲ- 3.　所属学科・コースの教育目標の認識

所属学科・コースの教育目標の認知について、3 か年の推移を学部全体で見ると、「知っている」（66%→64%→68%）、「大体知っている」（34%→36%→29%）、「知らない（0%→0%→3%）と推移しており、 全教員が概ね認知している。一方で「知らない」の割合は昨年度に比べて高い傾向であった。

学科別に「知っている」の 3 か年の推移を見ると、「生物学科」（53%→82%→91%）、「分子生命科学科」（64%→50%→58%）、「食料資源学科」（67%→53%→43%）、「国際園芸農学科」（67%→60%→71%）、「地域環境工学科」（89%→90%→82%）と推移している。特に「知っている」の割合が「生物学科」で最も高く、逆に「知らない」の割合が「分子生命科学科」で最も高かった。

設問 4. 本学部の入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

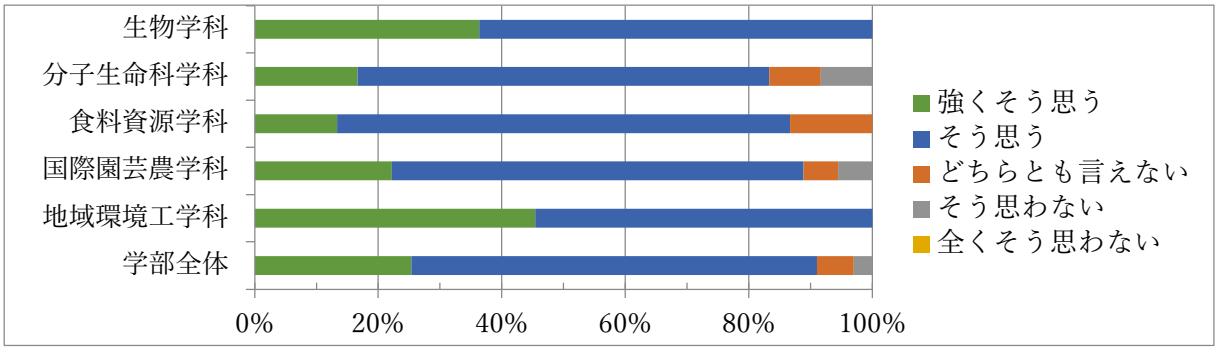


図Ⅲ- 4.　入学者受け入れ方針の認識

アドミッションポリシーの認知について、3 か年の変化を学部全体で見ると、「知っている」（66%→61%→66%）、「大体知っている」（34%→39%→30%）、「知らない」（0%→0%→4%）と推移している。このように、 教員全員がアドミッションポリシーを概ね認知している。一方で「知らない」の割合が 4%であった。

「知っている」の比率を学科別に 3 か年で見ると、「生物学科」（53%→73%→73%）、「分子生命科学科」（64%→50%→58%）、「食料資源学科」（72%→60%→53%）、「国際園芸農学科」（67%→50%→72%）、「地域環境工学科」（78%→80%→73%）となっている。また、「地域環境工学科」に「知らない」の割合が高い傾向であった。

設問 5. あなたが所属する学科・コースの教育目的は学部ホームページにあるとおりですが、学科（教養教育科目および専門教育科目）およびコースのカリキュラムはその目標によく合致すると感じていますか。

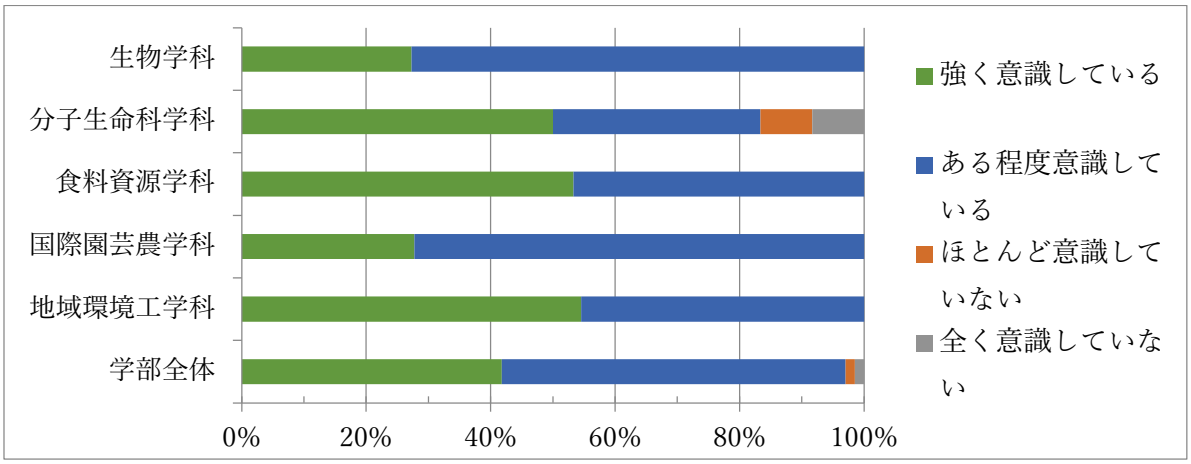


図Ⅲ- 5.　所属学科・コースの教育目標とカリキュラムとの合致

学部全体では肯定的評価（「強くそう思う」と「そう思う」）を 3 か年で見ると、92%→87%→91%であり、 ほとんどの教員が概ね合致すると考えている。

学科別の「肯定的評価」を 3 か年で見ると、「生物学科」が（100%→100%→100%）、「分子生命科学科」（100%→79%→83%）、「食料資源学科」（94%→80%→87%）、「国際園芸農学科」（62%→85%→89%）、「地域環境工学科」（100%→100%→100%）となっている。肯定的評価は昨年度に比べてすべての学科で増加した。特に「生物学科」および「地域環境工学科」は肯定的評価が100%であった。

設問 6. あなたはシラバス作成時に、学科・コースの教育目的や教育目標に従った講義内容にしようとしていますか。



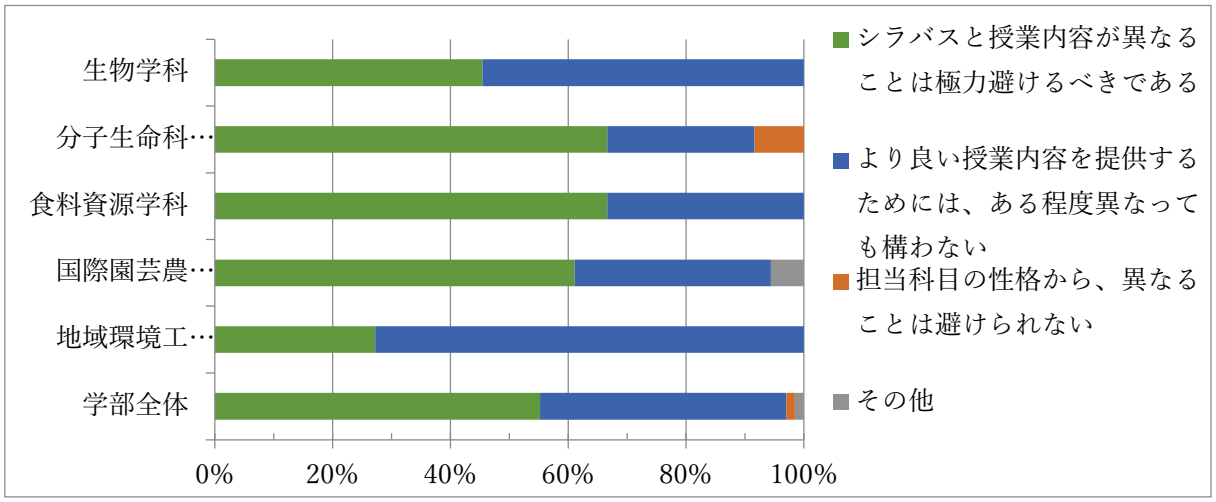
図Ⅲ- 6.　教育目的・目標に従ったシラバスの作成

3 か年で見ると、学部全体で「強く意識している」（34%→36%→42%）、「ある程度意識している」（66%→60%→55%）と推移している。「強く意識している」の割合は 3 か年のうち、最も高かった。ほとんどの教員が「強く」あるいは「ある程度」意識しており、全体として「教育目的・目標に従ったシラバスの作成」が意識されている。

学科別に「強く意識している」と「ある程度意識している」の合計割合を 3 か年で見ても、「生物学科」が 100%→82%→100%、「分子生命科学科」が 100%→93%→83%、「食料資源学科」が

100%→100%→100%、「国際園芸農学科」が 100%→100%→100%、「地域環境工学科」が 100%→100%→100%であり、「分子生命科学科」を除いたすべての学科で教育目的・目標に従ったシラバスを意識して作成されている。

設問 7. (1) 授業内容がシラバス記載の内容と異なることをどのようにお考えですか。



図Ⅲ- 7(1). シラバスと実際の授業内容の不一致に対する見解

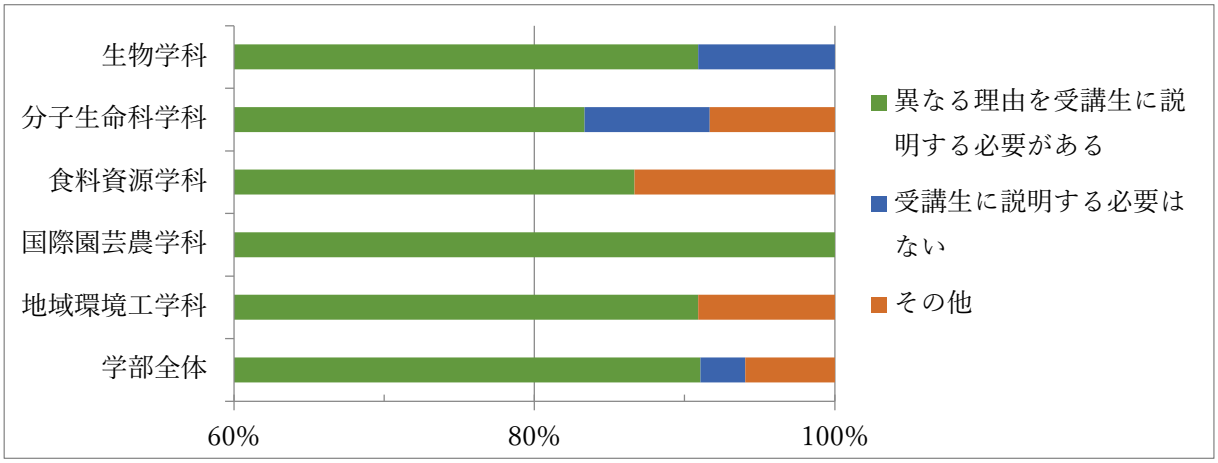
3か年で見ると、学部全体で、「極力避ける」(49%→43%→55%)、「ある程度異なっても構わない」(51%→56%→42%)、「異なることは避けられない」(0%→0%→1%) と推移している。このように教員の意見は、「極力さける」と「ある程度異なっても構わない」に大きく分かれているが、今年度は「極力避ける」の割合が「ある程度異なっても構わない」より高かった。

学科別の3か年の推移は以下の通りである。「生物学科」では「極力避ける」(53%→36%→45%)、「ある程度異なっても構わない」(47%→64%→55%)、「分子生命科学科」では「極力避ける」(55%→57%→67%)、「ある程度異なっても構わない」(45%→43%→25%)、「食料資源学科」では「極力避ける」(61%→33%→67%)、「ある程度異なっても構わない」(39%→67%→33%)、「国際園芸農学科」では「極力避ける」(52%→55%→61%)、「ある程度異なっても構わない」(43%→40%→33%)、「地域環境工学科」では「極力避ける」(0%→20%→27%)、「ある程度異なっても構わない」(100%→80%→73%) となっている。すべての学科で「極力避ける」の割合が昨年度より高くなっている。一方で「担当科目の性格から、異なることは避けられない」の回答が「分子生命科学科」から1名、「その他」の回答が「国際園芸農学科」から1名いた。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

・程度や内容の問題

(2) 何らかの理由で授業内容がシラバス記載の内容と異なった場合、あなたは受講生に対する説明の必要性についてどのようにお考えですか。



図Ⅲ- 7(2). シラバスと授業内容が異なる場合の受講生への説明

3 か年で見ると、「説明する必要がある」が 95%→91%→91%と推移しているが、「説明する必要はない」の回答も 3%→3%→3%である。

「その他」の割合は学部全体で 3%を示しており、「自由記述欄」には、以下の記述があった。

【分子生命科学科】

・シラバス通り講義を行っている。

【食料資源学科】

・状況に応じて説明する。

・気づいたら講義内で話す。

【地域環境工学科】

・大きく異なる場合は説明する必要があるが、小さい場合は説明する必要がない。

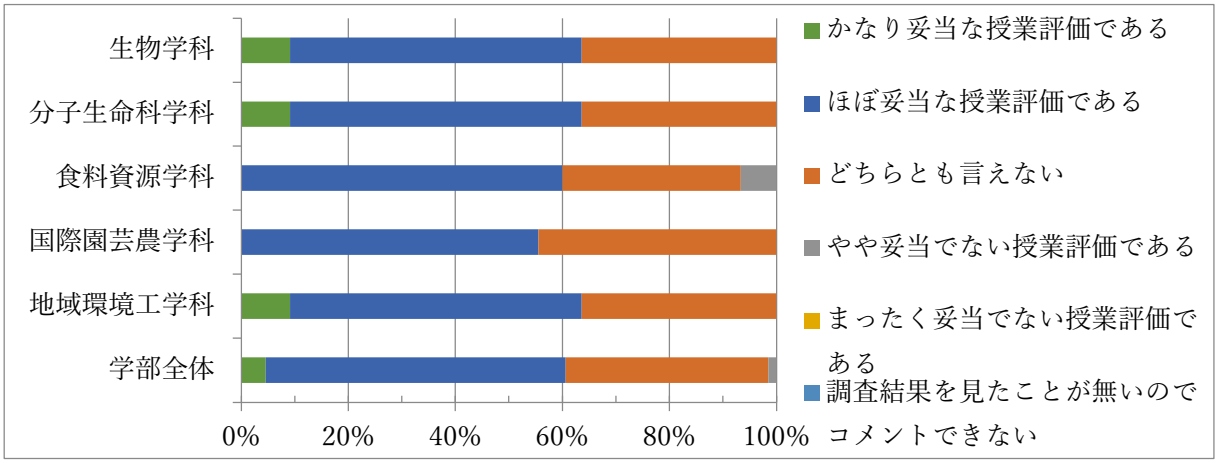
(3) 上記の質問で２．と回答した理由を教えて下さい。

・シラバス閲覧可能時から、講義内容に変更が生じる場合があり、学生も承知していると思うから。

・シラバスなど無意味。

設問 8. 本学では「授業方法改善のための学生による授業評価に関するアンケート調査」が平成15 年度後期から実施されています。その結果についてお尋ねします。

(1) 学生による授業評価の妥当性についてどのようにお考えですか。

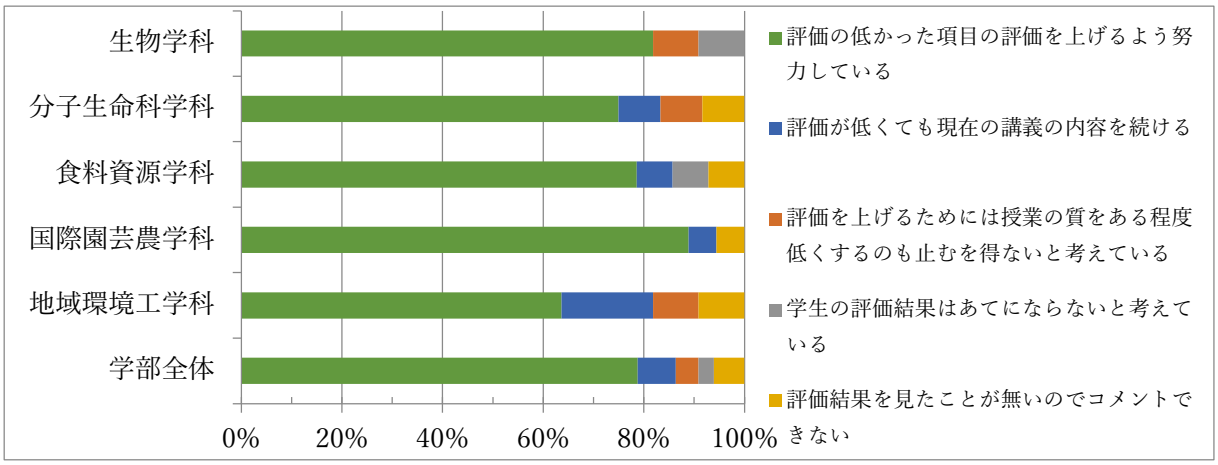


図Ⅲ- 8(1). 学生による授業評価の妥当性

3 か年で見ると、学部全体では「かなり妥当」と「ほぼ妥当」の合計の割合は 65%→63%→61%で、「やや妥当でない」と「まったく妥当でない」の合計の割合は 1%→3%→2%と推移している。約 6 割（61%）の教員は学生による授業評価を概ね妥当だと肯定的に受け止めているが、 約 4 割（38%）の教員は「どちらとも言えない」と懐疑的である。

「かなり妥当」と「ほぼ妥当」の合計の 3 か年の変化を学科別に見ると、「生物学科」（80%→73%→64%）、「分子生命科学科」（64%→50%→64%）、「食料資源学科」（50%→53%→60%）、「国際園芸農学科」（71%→70%→56%）、「地域環境工学科」（56%→70%→64%）となっている。本年度の「学生による授業評価」への信頼感の度合いは、すべての学科で 56%～64%の水準であった。

(2) 授業評価の結果を改善に利用していますか。



図Ⅲ- 8(2). 学生による授業評価結果の授業改善への利用

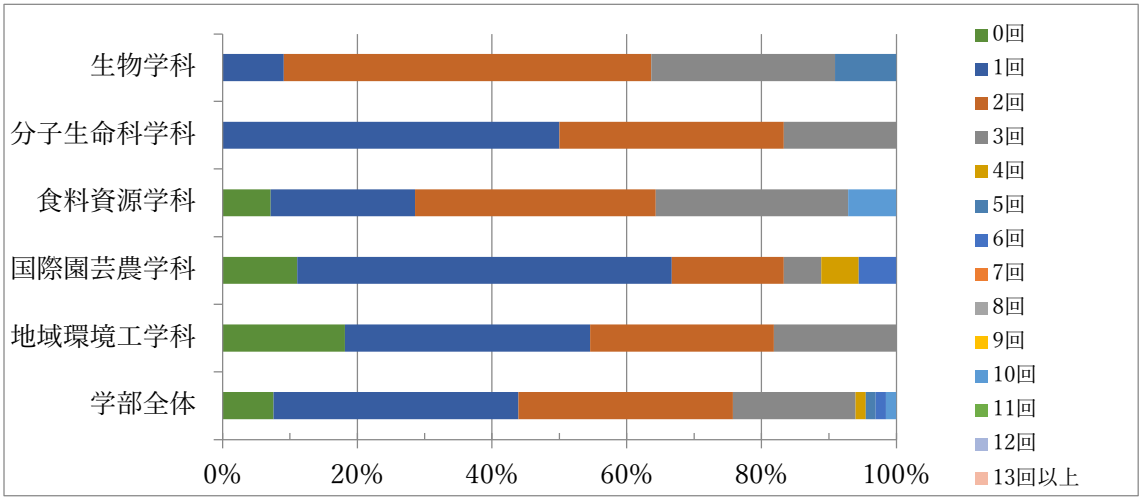
3 か年で見ると、学部全体では「評価を上げるよう努力している」（76%→80%→79%）、「現在の講義の内容を続ける」（6%→7%→8%）、「授業の質をある程度低くするのもやむを得ない」（7%

→6%→5%)、「学生の評価結果はあてにならない」(4%→4%→3%)、「評価結果を見たことがないのでコメントできない」(4%→3%→6%) と推移している。昨年度と同様に 8 割近くの教員が授業評価結果を授業の改善に利用している。また、「調査結果を見たことが無いのでコメントできない」が学部全体で 6%を示しているが、この回答は講義担当前の新任教員によるものと思われる。

設問 9. 本学では教育改善のための各種の研修活動（ＦＤ活動）が行われています。ここで言う「ＦＤ活動」とは、学部・研究科・学科・コース等で実施されている教育改善に関わる各種研修活動全般を意味します。

(1) この 1 年間でどのようなＦＤ活動に参加されましたか。参加された回数をお答え下さい。（参加されなかった場合は 0 を記入して下さい)。

1. 学部主催のＦＤ活動

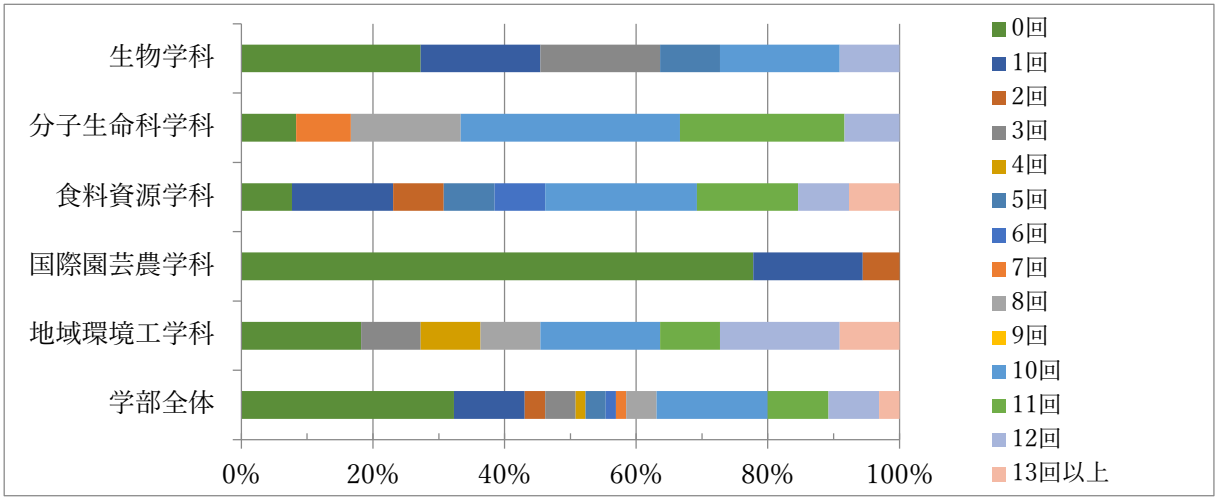


図Ⅲ- 9(1) - 1. 学部主催のＦＤ活動への参加回数

学部主催のＦＤ活動への参加回数毎の集計を 3 か年で見ると、学部全体で 0 回（12%→1%→8%)、1 回（54%→41%→36%)、2 回（25%→34%→32%)、3 回（6%→11%→18%）となっている。1 回以上のＦＤ活動に参加した教員は 92%を占めている（昨年度 99%)。

学部全体の延べ参加回数を 3 か年で見ると、92 回→134 回→127 回と推移している。教員一人当たりの参加回数を 3 か年で見ると、学部全体では 1.4 回→1.9 回→1.9 回となる。

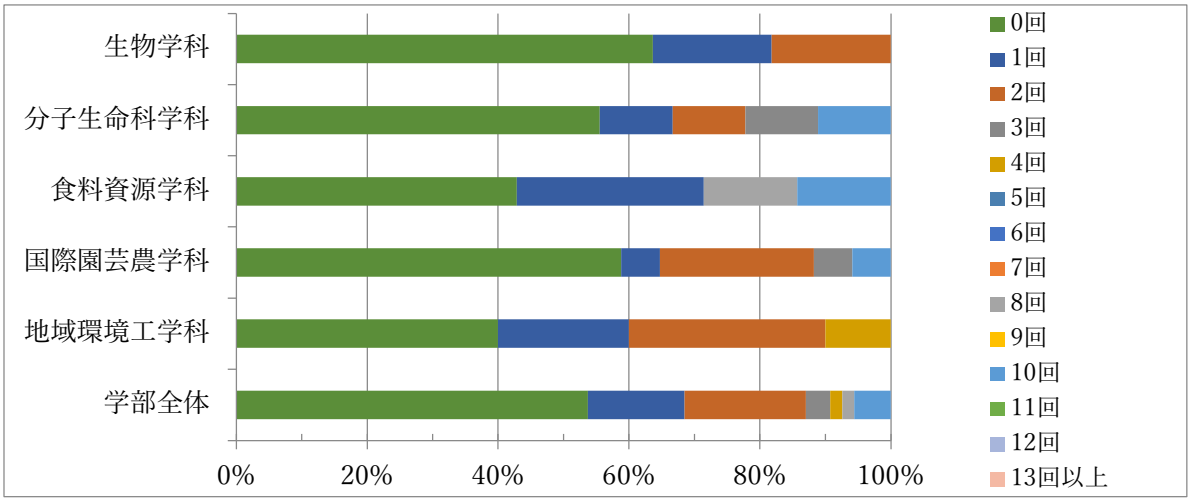
2. 学科主催のＦＤ活動



図Ⅲ－ 9(1) － 2. 学科主催のＦＤ活動への参加回数

学科主催のＦＤ活動への参加回数が 13 回以上と多い教員は「地域環境工学科」および「食料資源学科」で高い割合を示している。学科別の教員 1 人当りの平均参加回数を 3 か年で見ると、「生物学科」(4.2 回→2.5 回→4.1 回)、「分子生命科学科」(9.7 回→7.6 回→9.0 回)、「食料資源学科」(8.7 回→6.9 回→7.1 回)、「国際園芸農学科」(3.9 回→0.6 回→0.3 回)、「地域環境工学科」(8.3 回→8.9 回→7.5 回) となっている。「分子生命科学科」、「地域環境工学科」が継続して多く、次いで「食料資源学科」、「生物学科」で、「国際園芸農学科」が最も少なかった。参加回数の違いは、学科によってＦＤの位置付けに違いがあるためと考えられる。

3. その他の活動

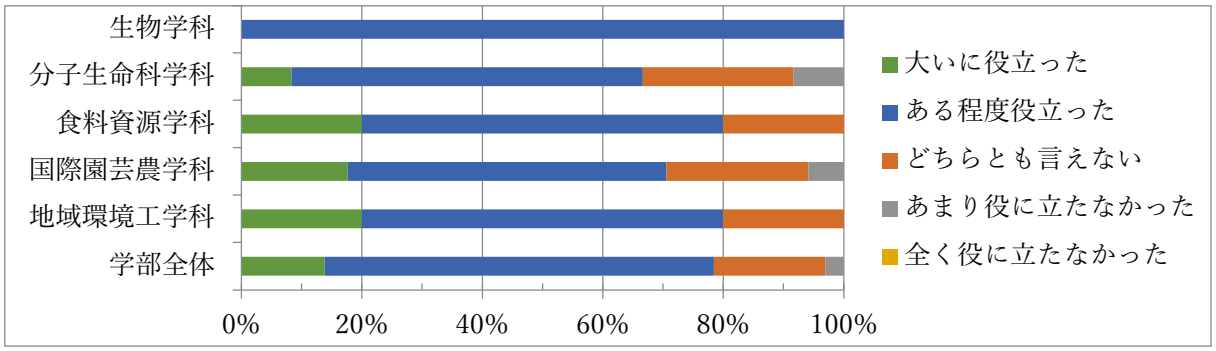


図Ⅲ－ 9(1) － 3. その他の活動への参加回数

その他のＦＤ活動とは、大学全体のＦＤ活動や学外でのＦＤ活動である。参加回数毎に 3 か年で見ると、学部全体では 0 回 (59%→42%→54%)、1 回 (33%→17%→15%)、2 回 (5%→21%→19%)、3 回(3%→15%→4%)となっており、今年度は 4 回が 1 名、8 回が 1 人、10 回が 3 名いる。

学科別の教員１人当りの平均参加回数を３か年で見ると、「生物学科」(0.１回→0.９回→0.５回)、「分子生命科学科」(0.２回→1.１回→1.８回)、「食料資源学科」(0.６回→1.９回→2.９回)、「国際園芸農学科」(0.８回→2.１回→1.３回)、「地域環境工学科」(0.７回→1 回→1.２回)と推移している。5 割強（54%）の教員が学部や学科主宰以外のＦＤ活動へは参加していない状況が認められる（昨年度約 4 割)。

(2) 参加された活動は、教育改善に役立ちましたか。

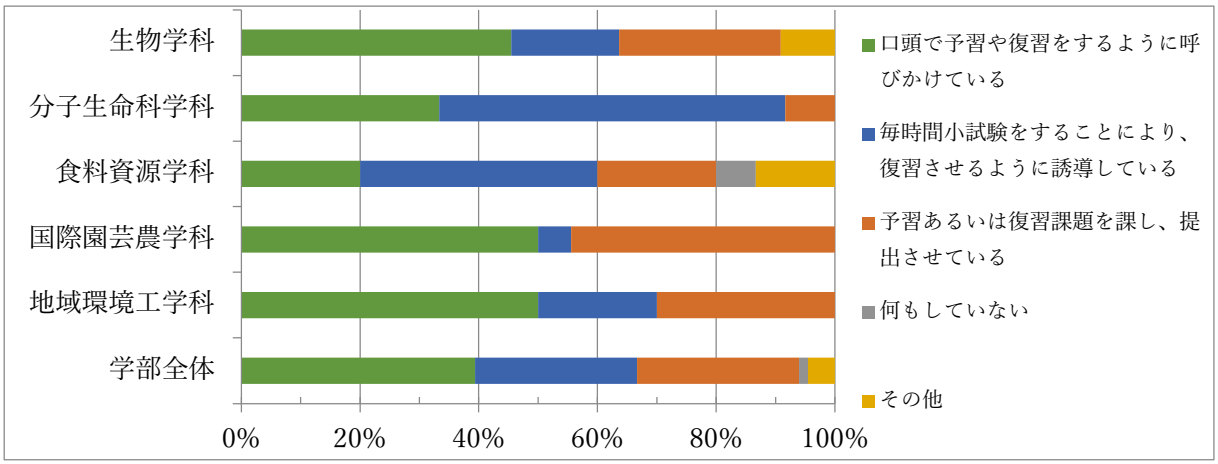


図Ⅲ－ 9(2)．参加したＦＤ活動の教育改善効果

学部全体では「大いに役立った」が 14%、「ある程度役立った」が 65%と、肯定的評価が約 8 割を示している。肯定的評価を 3 か年で見ると、83%→77%→78%と推移している。多くの教員がＦＤ活動の教育改善効果を認めているが、「どちらとも言えない」（18%）や「あまり役に立たなかった」（3%）の回答もある。

学科別に 3 か年で見ると、肯定的評価は「生物学科」(69%→82%→100%)、「分子生命科学科」（90%→57%→67%)、「食料資源学科」（94%→87%→80%)、「国際園芸農学科」（70%→70%→71%)、「地域環境工学科」(100%→100%→80%）であった。特に肯定的評価は「生物学科」で 100%と最も高かった。

設問　10.　担当科目において学生の授業時間外の学習を促すためにどのような工夫をしていますか。



図Ⅲ－ 10．学生に対する時間外学習の促進方法

3 か年の推移を見ると、学部全体では「口頭での予習・復習の呼びかけ」(43%→51%→39%)、「小試験で復習を誘導する」(24%→24%→27%)、「予習・復習課題を課す」(20%→22%→27%)、「何もしていない」(9%→0%→2%)、その他（4%→3%→5%）となっている。9 割以上の教員が時間外学習を促している。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

【生物学科】

・書籍や最新情報の紹介など。

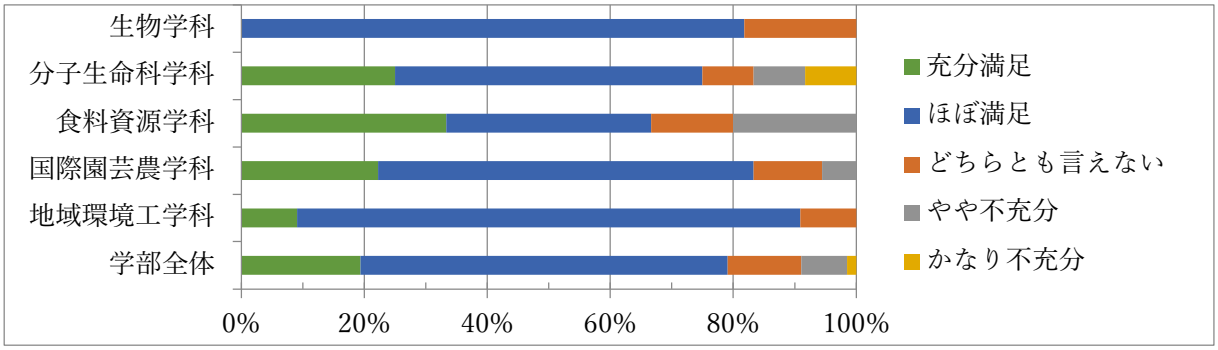
【食料資源学科】

・予習復習の有無が学生・教員共にわかるような授業をしている。

・向上心ある受講生のみ講義後のスライド参照を許可している。

設問　11.　(1)　本学部の以下の施設と設備についてどのように感じていますか。該当する欄に〇を書き込んで下さい。

1.　講義室

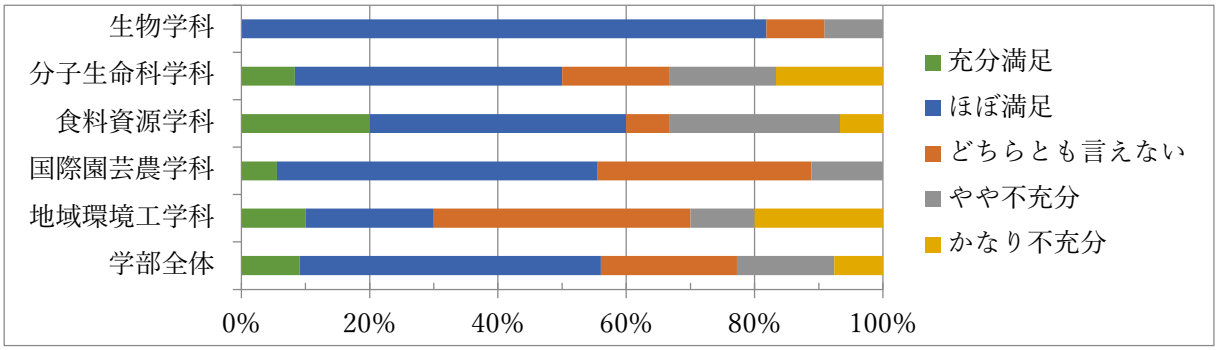


図Ⅲ－ 11(1) － 1．本学部の施設に対する満足度（講義室）

講義室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(69%→63%→79%)、「どちらとも言えない」(14%→17%→12%)、「やや不充分」(15%→16%→7%)、「かなり不充分」(7%→4%→1%) であった。昨年度まで「充分満足・ほぼ満足」は、暑さへの対応が不十分であったことに起因して減少傾向にあったが、エアコンの整備により改善された傾向はある。

「充分満足」・「ほぼ満足」を学科別に見ると「生物学科」(73%→55%→82%)、「分子生命科学科」(73%→71%→75%)、「食料資源学科」(56%→53%→67%)、「国際園芸農学科」(67%→60%→83%)、「地域環境工学科」(89%→80%→91%)となった。

2. 実験・実習室

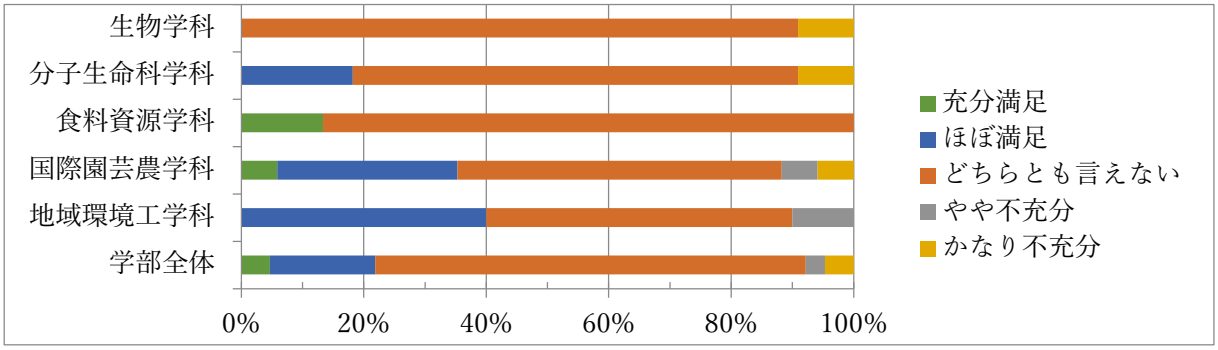


図Ⅲ- 11(1) - 2. 本学部の施設に対する満足度（実験・実習室）

実験・実習室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(48%→43%→56%)、「どちらとも言えない」(23%→27%→21%)、「かなり不充分・やや不充分」(29%→30%→23%) と推移している。改善傾向にあるのかは、今後の推移を注視する必要はある。

学科別に「充分満足」・「ほぼ満足」を見ると「生物学科」(60%→55%→82%)、「分子生命科学科」(55%→50%→50%)、「食料資源学科」(39%→20%→60%)、「国際園芸農学科」(50%→45%→56%)、「地域環境工学科」(33%→50%→30%) である。「かなり不充分・やや不充分」は、「生物学科」(13%→18%→9%)、「分子生命科学科」(27%→36%→33%)、「食料資源学科」(56%→60%→33%)、「国際園芸農学科」(20%→15%→11%)、「地域環境工学科」(22%→20%→30%) と推移している。

3. 蔵書室(4 階)

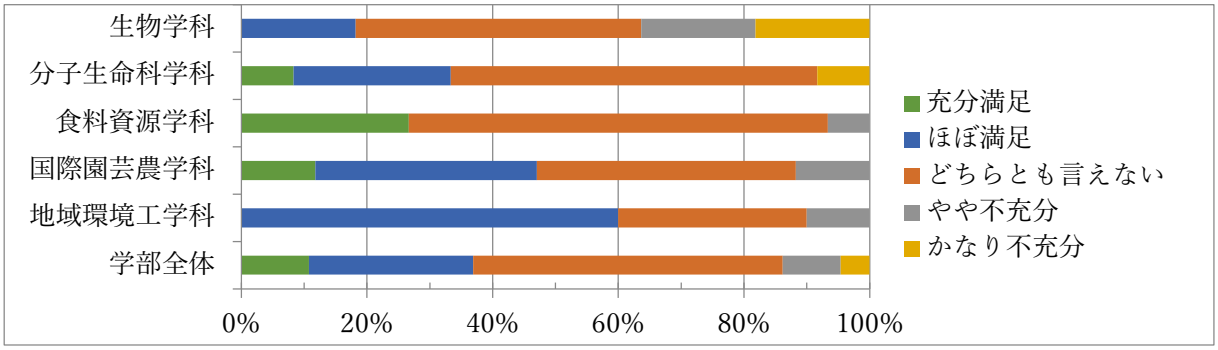


図Ⅲ- 11(1) - 4. 本学部の施設に対する満足度（蔵書室［4 階］）

4 階の蔵書室は、平成 28 年 3 月に 2 階の図書閲覧室の書物が移されて新設されたが、認知度が低く、あまり有効に活用されていない状況が考えられる。過去 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」が 25%→18%→22%、「どちらとも言えない」が 63%→74%→70%、「やや不充分」が 8%→9%→5%、「かなり不充分」が 7%→0%→5%と推移している。約 7 割以上の教員が「どちらとも言えない」と答えている。

学科別に「充分満足」と「ほぼ満足」の合計を見ると「生物学科」が 15%→9%→0%、「分子生命科学科」が 22%→7%→18%、「食料資源学科」が 27%→0%→13%、「国際園芸農学科」が 26%→5%→35%、「地域環境工学科」が 33%→0%→40%と推移している。

4. 学生自習室・学生控室（2 階）

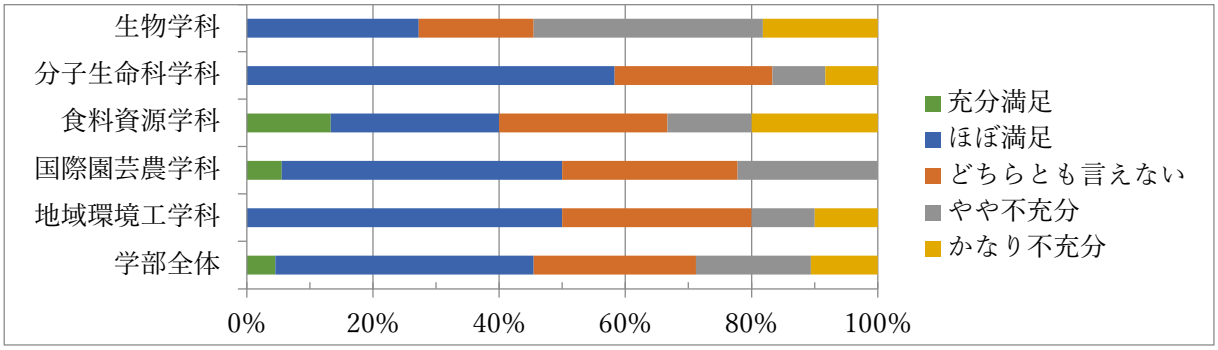


図Ⅲ- 11(1) - 5. 本学部の施設に対する満足度（学生自習室・学生控室［2 階］）

学生自習室・学生控室（2 階）は平成 28 年 3 月より新設された。過去 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」が 46%→38%→37%、「どちらとも言えない」が 46%→56%→49%、「やや不充分・かなり不充分」が 7%→6%→14%と推移している。「充分満足・ほぼ満足」の割合が 4 割を下回り、「やや不充分・かなり不充分」の割合が増加する傾向にあるのか、今後の推移を注視する必要はある。

学科別に「充分満足」と「ほぼ満足」の合計を見ると、「生物学科」が 64%→36%→18%、「分子生命科学科」が 40%→43%→33%、「食料資源学科」が 47%→38%→27%、「国際園芸農学科」が 42%→30%→47%、「地域環境工学科」が 33%→50%→60%と推移している。「かなり不充分」と「やや不充分」の合計は、「生物学科」が 0%→0%→36%、 「分子生命科学科」が 10%→0%→8%、「食料資源学科」が 0%→0%→7%、「国際園芸農学科」が 21%→10%→12%、「地域環境工学科」が 0%→20%→10%と推移している。

5. 研究室



図Ⅲ- 11(1) - 6. 本学部の施設に対する満足度（研究室）

研究室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(52%→50%→45%)、「どちらとも言えない」(23%→26%→26%)、「かなり不充分・やや不充分」(25%→24%→29%)と推移している。満足と感じている割合は約 5 割、不充分と感じている割合が 2 割程度で推移している状況に明確な変化はない。

学科別に「充分満足・ほぼ満足」を見ると、「生物学科」(36%→45%→27%)、「分子生命科学科」60%→50%→58%)、「食料資源学科」(44%→33%→40%)、「国際園芸農学科」(65%→65%→50%)「地域環境工学科」(56%→50%→50%) である。「かなり不充分・やや不充分」は、「生物学科」(29%→36%→55%)、「分子生命科学科」(10%→21%→17%)、「食料資源学科」(33%→33%→33%)、「国際園芸農学科」(30%→15%→22%)、「地域環境工学科」(11%→20%→20%) と推移している。

(2) 上記で「4. やや不充分」と「5. かなり不充分」を選択した場合、その理由を次の欄に具体的に書いて下さい。

【生物学科】
・教員 1 名当たりのスペースが狭いため、学生や研究設備が入りきらない。
・学生数に対して研究室や実験室が狭隘である。
・学生数に比して自習室・控室の広さは不十分である。研究室のスペース・設備も不足している上、教員間の不均衡がひどい。
・研究室が狭い、実験室と研究室が離れており、配置に問題がある。
・教員と学生が研究室で同居している。オンラインの会議や講義など、難しい局面が多い。
・学生の人数が多い割には研究室の面積が狭い。

【分子生命科学科】
・実験・実習室の設備をもう少し拡充してほしい。
・食事をとるスペースとして提供できていないのは明らかではないでしょうか？
・エアコンが故障し、すぐに修理できない。
・学生実験室で必要な装置を置くスペースがない。
・スペースが足りません。

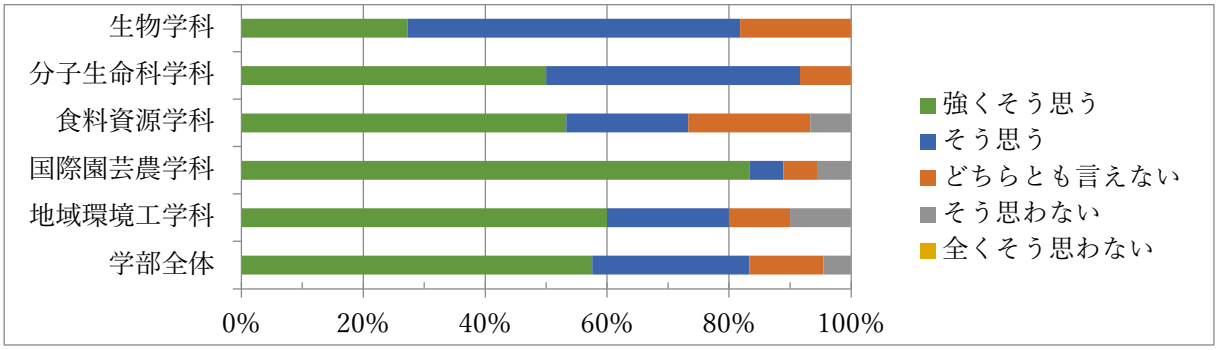
・講義室によってプロジェクターなどの取扱法が異なる。汚い。学生実験用の器具・設備が貧弱極まりない。
・建物のあちこちに実験室が分散している研究室がある。

【食料資源科学科】
・実験机に設置されている流しが小さく、ガラス器具の洗浄ができないため、流しをもっと大きくした方が良い。
・プロジェクター、マイクなどが定期的にメンテ・整備されていない。(使えない。または途中で落ちる。など)。
・空調関係（空気が汚い、冷暖房が不十分)。スペースが狭い。
・研究室が狭い、空調がない。
・ドラフトをよく利用するが、自分の研究室にはなく他の研究室のドラフトを借りて実験をしているため。
・学生控室がなく、実験室も狭い。
・新規の機器は搬入出来ない。

【国際園芸農学科】
・研究室のスペースが狭く、大学院生を増やすことが難しい。今のスペースだと、5,6 人が限界である。レンタルでも良いので研究費でスペースが借りられたら助かります。
・空調環境やスペースの面。
・研究室の実験スペースが不足している。
・全員分の机がない。

【地域環境科学科】
・場所が狭い。
・部屋が狭い。
・冷房も付いていなければネット環境も整備されていません。

設問 12. (1) 卒業研究は必要であると思いますか。



図Ⅲ- 12(1). 卒業研究は必要か

3か年で見ると、学部全体で、「強くそう思う・そう思う」(92%→87%→83%)、「どちらとも言えない」(7%→11%→12%)、「そう思わない・全くそう思わない」(1%→2%→5%) となった。8割以上の教員が卒業研究は必要と考えているものの、そう思わない教員の割合が微増している。

学科別に見ると、 「強くそう思う・そう思う」は、「生物学科」(80%→73%→82%)、「分子生命科学科」(100%→93%→92%)、「食料資源学科」(100%→93%→67%)、「国際園芸農学科」(90%→90%→89%)、「地域環境工学科」(89%→80%→73%) と推移している。

(2) 上記のように回答した理由を下欄に分りやすく記入して下さい。

【生物学科】

・学生が、自ら考え、行動し、結果をまとめるという一連の作業は、社会に出る上でとても重要であるから。
・最後に自分の学んだことをまとめ上げるのに良いことだと思う。
・最も効果的なアクティブラーニングだと思うから。
・目標に向かって、一つのことを成し遂げるための環境を学生に与えるうえで重要。
・卒業研究を通してのみ論理的な思考力を高めることができる。
・卒業研究をプレッシャーに思う学生には、代替の単位があっても良いと思うようになった。
・卒業研究の教育上の効果を否定するつもりは全くないが、指導の困難な学生が一定数おり、学生・教員双方にとって大きな負担となっているのも事実である。卒業研究とは異なる評価方法があってもよい。
・卒業研究は本来の姿として典型的アクティブラーニングだと思います。ただし、難しい学生も現れるようになり、必修であるかどうかは今後検討すべき。
・一部に研究を行うのが困難な学生がいるから。

【分子生命科学科】

・実際に自分の手や頭を動かして、これまで誰も明らかにしていないことを明らかにしよと取り組むことや問題解決に取り組むことは、教育効果が高いと考えるため。
・基準を低くする方向になっていっていると思います。Diploma policy に照らして、目標の達成度を評価するために、卒業研究は必須であると思います。
・学生が研究するモチベーションになる。

・高度なアクティブラーニングとして機能しており、卒業研究を始める前と比べて学生の成長が著しく、これと同等な教育効果を持つものを他に知らないから。
・自分で考えて仕事をするから。
・大学におけるアクティブラーニングの唯一の機会だから。
・卒業研究のない大学に存在意義はないと思う。
・専門教育の一環としては必要かと思うが、学生によっては対応できない場合もあるかもしれない。
・かつては強くそう思っていたが、昨今の学生を見る限り、アルバイト、就活等で実験に十分な時間を費やせない者も多い。また学生の構成も多様化し、リアルな実験作業に向かないと思わざるを得ない学生もときどきいる。DP を遵守しつつも、むしろ別のサブ的な卒業教育メニューを用意した方が教員も学生もすっきりするのではないかと思う。

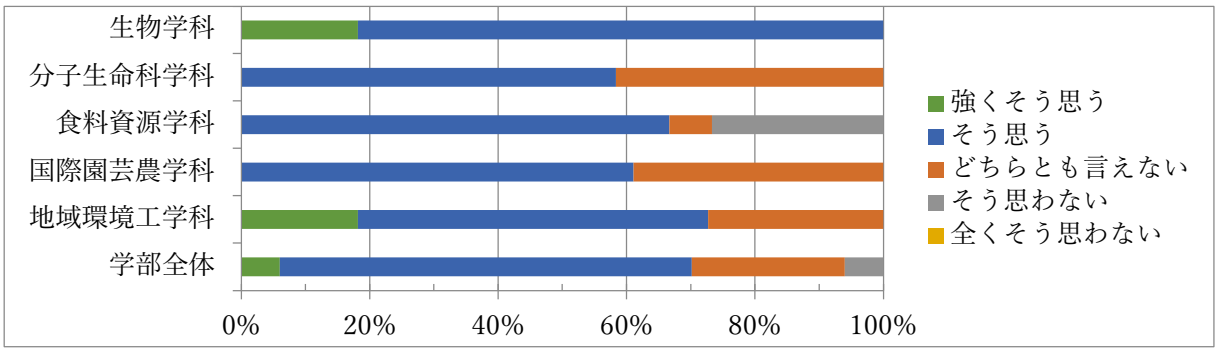
【食料資源学科】
・比較的長期間取り組む必要のある唯一の課題であり、他の科目では訓練できない能力を養うことができるから。
・これまで学習した知識を利用しつつ、自主的に学ぶ大きな機会だから。
・科学的思考力を養うために必要と考える。ただ卒論発表会などに参加すると、真剣に取り組んでいない学生も多いような気がするので、卒業研究の意義が正しく学生に伝わっていないのではないかと感じる。
・理系の学科の卒業単位として重要であると思うから。
・卒業研究はアクティブラーニングであり、座学よりも能動的学修、課題解決能力、答えのない答えの探究を磨く機会だから。
・卒業研究がないと専門性が身に付かない。
・大学での記憶は卒業研究が 100%に近いから。
・大学における学問修得において、卒業研究は最も自主的に専門分野の知識を包括的に捉え、さらに掘り下げる方策を講じる為の絶好の機会だと思われる。
・課題に対して自ら進んで取り組む姿勢が社会において活躍する上で必要な技術であるため、その姿勢を養う卒業研究は教育において重要な位置づけである。ただ、学生によっては、卒業研究が卒業するための授業である意識が強く、受動的態度で臨んでいる姿勢が認められるので、卒業研究による効果は十分には得られていないようである。その点を考えると、卒業研究は選択科目に移行しても良いのかもしれない。
・卒業研究ができない学生が一部いるように思う。そうした学生が今後増加するようであれば、選択性にすることを考えた方が良い。
・今まで必要であると考えていたが、就活に集中している学生たちを見て必要性を感じなくなってきた。
・選択が良いと思うから。

【国際園芸農学科】
・4 年間の集大成になります。
・卒論を通して学んだ理論を十分に生かせると思うため。

・主体的に研究に取り組み、物事への解決力、論理的思考のステップアップに大いに役立つ。
・に対する考える力、得られたデータをまとめる力、得られたデータからどのようなことが考えられるか考える力を付けることができるから。
・学生達が、これまでの大学での学習や知識を活かして、発展させる大きな可能性ある機会であると考えているため。
・論理的な思考力、作文能力を養うことができ、卒業後も役に立つから。
・計画－実行－まとめというプロセスを体験できるから。
・一人の教員で 10 人くらい面倒をみる私学との差別化のため。卒業研究を通して学生が成長するのを感じるから。
・学生には研究のトレーニングが必要だからです。
・実験系なので、卒論研究をしないと実力が何も身につかない。また、学生に研究活動をしてもらわないと研究室運営できない。
・つまらな過ぎる研究は要らない。

【地域環境工学科】
・学生の力が最も向上する科目だと思うから。
・学生がすべて主体的に行う良い機会だから。
・物事を深く探求する醍醐味を知ることが、大学生にとって大切だと考えているから。
・知識を体系立ててデザインする良い鍛錬になる。
・考える力を養ういい取り組みである。
・4 年間の集大成として、重要である。
・勉強しない。
・何のためにやってるのかよく分からないから。

設問　13.（1）　あなたの学科の大多数の卒業生は、本学部での教育により大学卒業生に相応の知識と学力を身に付けたと思いますか。



図Ⅲ－ 13(1)．学部卒業生に相応の知識と学力を身に付けたか

3 か年で見ると学部全体で、「強くそう思う・そう思う」（74%→66%→70%）、「どちらとも言えない」（24%→30%→24%）、「全くそう思わない・そう思わない」（1%→4%→6%）であった。約 7 割の教員が、「卒業生は知識と学力を身に付けた」と考えてはいるものの、そう思わないと思っている割合が微増傾向にある。

学科別に 3 か年で「強くそう思う・そう思う」を見ると、「生物学科」（67%→73%→100%）、「分子生命科学科」（64%→57%→58%）、「食料資源学科」（78%→67%→67%）、「国際園芸農学科」（71%→60%→61%）、「地域環境工学科」（100%→80%→73%）、と推移している。学部生の知識と学力が身についたと感じる度合いは、各学科で約 6 割以上と高い。「全くそうは思わない・そう思わない」は、「生物学科」（0%→0%→0%）、「分子生命科学科」（0%→14%→0%）、「食料資源学科」（6%→0%→27%）、「国際園芸農学科」0%→5%→0%）、「地域環境工学科」（0%→0%→0%）と推移している。

(2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

表Ⅲ－ 13(2)．身についていない理由（学部）

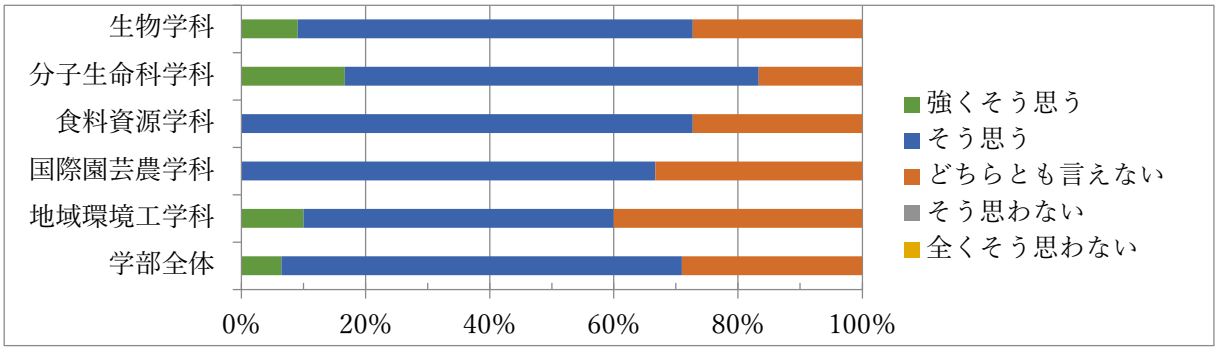
理　由	回答数（学科）
学生に意欲がない	1（食料資源学科 1）
学生の基礎学力不足	4（食料資源学科 2、国際園芸農学科 1、地域環境工学科 1）
講義内容が高度過ぎた	0
教員に問題	0
その他	1（食料資源１）

3 か年で見ると、「学生の意欲がない」（0 人→2 人→1 人）、「学生の基礎学力不足」（0 人→1 人→4 人）、「教員に問題」（0 人→0 人→0 人）、「講義内容が高度過ぎた」（0 人→0 人→0 人）と推移している。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

【食料資源学科】
・学生に別にめざすところがある。

設問 14. (1) あなたの専攻の大多数の修了生は、本研究科での教育により大学院修了程度の専門知識を身に付けたと思いますか。



図Ⅲ- 14(1). 大学院修了生は相応の専門知識を身に付けたか

3か年で見ると研究科全体で「強くそう思う・そう思う」(72%→73%→71%)、「どちらとも言えない」(28%→24%→29%)、「全くそう思わない・そう思わない」(0%→3%→0%) であった。

コース別に 3 か年で見ると、「強くそう思う・そう思う」は、「生物学コース」(73%→90%→73%)、「分子生命科学コース」(73%→64%→83%)、「食料資源学 (令和元年度まで生物資源学) コース」(88%→83%→73%)、「国際園芸農学 (令和元年度まで園芸農学) コース」(57%→76%→67%)、「地域環境工学コース」(78%→50%→60%) と推移した。

(2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか. 以下の中から選んで下さい。

表Ⅲ- 14(2). 身についていない理由 (研究科)

理　由	回答数 (コース)
学生に意欲がない	1 (生物学科 1)
学生の基礎学力不足	1 (生物学科 1)
講義内容が高度過ぎた	0
教員に問題	0
その他	2 (生物学科 1、食料資源学科 1)

「そう思わない、全くそう思わない」を選択した教員は 0%であったものの、上記のように学力が身についていない理由の選択もあった。また「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

【生物学科】
履修しなければならない単位が多すぎて、自らよく考えて行動すべき研究の時間が割かれてしまうため。

【食料資源学科】
修了生がでていないから。

Ⅳ. 教員対象授業アンケート（学部授業および研究科授業）

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部および研究科の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、学部および研究科の授業に関する教員の意識について調査することを目的にアンケート調査を実施した。

調査方法：電子メールで教員に本アンケートについて周知し、Forms で回答を依頼した。なお、アンケートは個人を特定できない設定にして行われた。

調査対象：令和 4 年 2 月に学部、研究科および生物共生教育研究センター、白神自然環境研究センターに所属する教員とした。

調査期間：令和 4 年 2 月 8 日～3 月 31 日

教員数：　76 名　有効回答者数：67 名　（回答率 88.2%）

調査項目：設問は以下の通りである。

［学部授業に関する調査］

ご担当の**学部専門教育科目**の中から最も重要と考える **1 科目**についてお答え下さい。なお、学生実験、実習、演習は対象から除きます。

設問 1. あなたが所属する学科を選択して下さい[注 1)]。

1. 生物学科　2. 分子生命科学科　3. 食料資源学科　4. 国際園芸農学科
5. 地域環境工学科

注 1) 白神自然環境研究センターの先生は 1 を、生物共生教育研究センターの先生は 4 をお選び下さい。

設問 2. 授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

(1) 予定回数（2 単位 15 回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）

（　　）回

(2) 実施回数（集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）

（　　）回

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

1. 休講回数分を補講した　2. 一部補講した　3. 何もしなかった　4. 休講していない
5. その他

設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。

1. シラバスに記載した内容に一致させて講義を行った
2. シラバスに記載した内容を意識し、できるだけ沿うように講義した
3. シラバスに記載した内容にはとらわれないで講義した

(2) 上記で、「3.」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

設問 5.

(1) 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。

1. 昨年度と同一であった　2. 一部変更した　3. 大幅に変更した

(2) 上記で、「2. 」または「3. 」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。

1. 教育効果が向上した 2. 教育効果は変わらなかった　3. 教育効果は低下した

4. 分からない

(4) 上記の設問(3)で「1」と回答した方は、その具体的な事例を教えて下さい。

設問 6. 学部の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

1. 大多数の学生のレベルを意識して展開した
2. より専門性を重視して展開した
3. その他（　　）

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。

1. 視聴覚教材（ビデオや DVD 教材など）の利用
2. 画像データ（OHP、スライドプロジェクター、プレゼンテーションソフトなど）の提示
3. 授業の合間に質疑や討論の時間を設けた
4. 小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた
5. 宿題（レポートを含む）を課した
6. その他（　　）

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

設問 10. このアンケート調査の実施や内容について他にご意見がありましたらご記入下さい。

[研究科授業に関する調査]

ご担当の**研究科授業科目**の中から最も重要と考える **1 科目**についてお答え下さい。なお、学生実験、実習、演習は対象から除きます。

設問 1. あなたが所属するコースを選択して下さい。

1. 生物学コース　2. 分子生命科学コース　3. 生物資源学コース　4. 園芸農学コース
5. 地域環境工学コース　6. 地域共創科学研究科

設問 2. 授業の予定回数と実施回数を選択して下さい。

① 予定回数（1 単位 8 回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）

1. 8 回　2. 7 回　3. 6 回　4. 5 回以下　5. 担当していない

② 実施回数（集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）

1. 8 回　2. 7 回　3. 6 回　4. 5 回以下　5. 担当していない

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

1. 休講回数分を補講した　2. 一部補講した　3. 何もしなかった　4. 休講していない

5. その他

設問 4.

① シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。

1. シラバスに記載した内容に一致させて講義を行った

2. シラバスに記載した内容を意識し、できるだけ沿うように講義した

3. シラバスに記載した内容にはとらわれないで講義した

② 上記で、「3. 」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

設問 5.

(1)本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。

1. 昨年度と同一であった　2. 一部変更した　3. 大幅に変更した

(2)上記で、「2. 」または「3. 」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。

1. 教育効果が向上した　2. 教育効果は変わらなかった　3. 教育効果は低下した

4. 分からない

(4) 上記の設問(3)で「1」と回答した方は、その具体的な事例を教えて下さい。

設問 6. 大学院の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

1. 大多数の学生のレベルを意識して展開した

2. より専門性を重視して展開した

3. その他（　　）

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。

1. 視聴覚教材（ビデオや DVD 教材など）の利用

2. 画像データ（OHP、スライドプロジェクター、プレゼンテーションソフトなど）の提示

3. 授業の合間に質疑や討論の時間を設けた

4. 小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた

5. 宿題（レポートを含む）を課した

6. 実習形式の授業を行った

7. その他（　　）

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

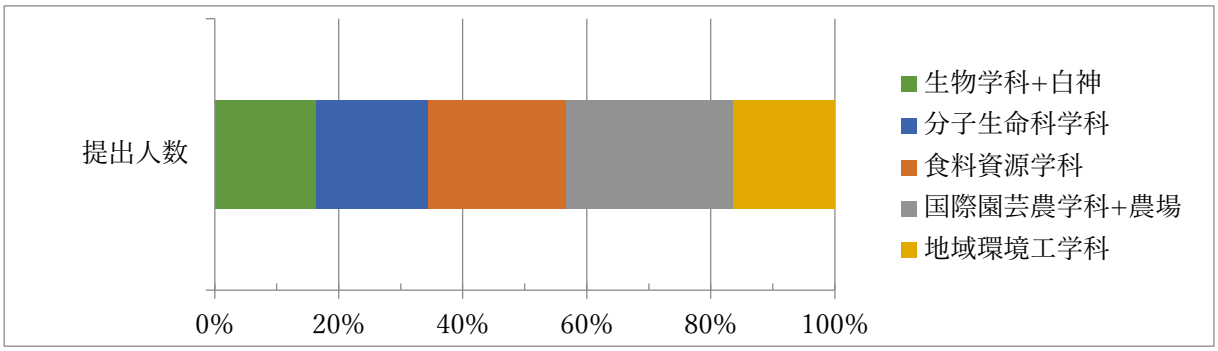
設問 10. このアンケート調査の実施や内容についてご意見がありましたらご記入下さい。

２．学部授業に関する調査結果

設問 1.　あなたが所属する学科を選択して下さい。

表Ⅳ－２－１．回答率

	教員数（人）	回答数（人）	回答率（%）
生物学科（白神含む）	14	11	79
分子生命科学科	14	12	86
食料資源学科	18	15	83
国際園芸農学科（農場含む）	20	18	90
地域環境工学科	10	11	110
学部全体	76	67	88



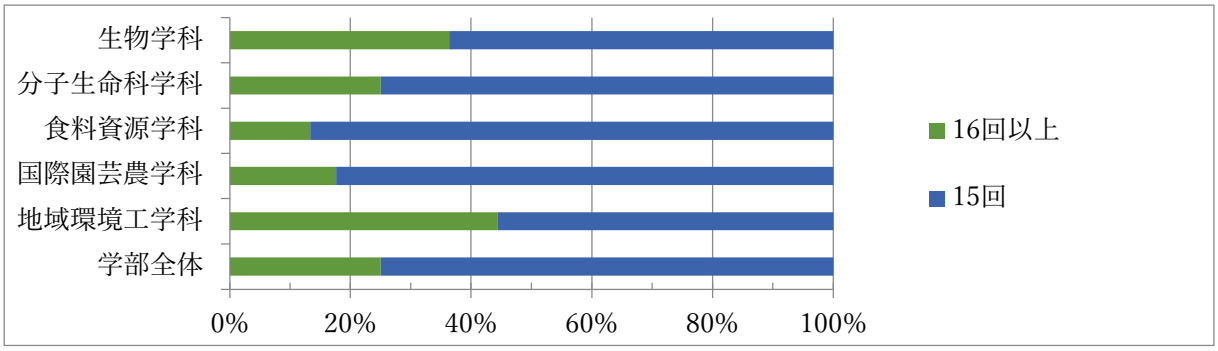
図Ⅳ－２－１．学科別回答割合

学部全体の回答率は 88%で過去 2 年(令和元年度:84%、令和 2 年度:84%）と比して上昇した。オンラインでの回答は前年度から始まり、今回が 2 回目である。学科別では生物学科が 70%代と比較的低い傾向にある。一方、国際園芸農学科は 90%と高い値であった。

地域環境工学科は 110%となっており、2 重に回答が送信される等の手違いが発生したことが考えられる。次回以降の調査票収集方法を検討する上で、留意が必要である。

設問 2. 授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

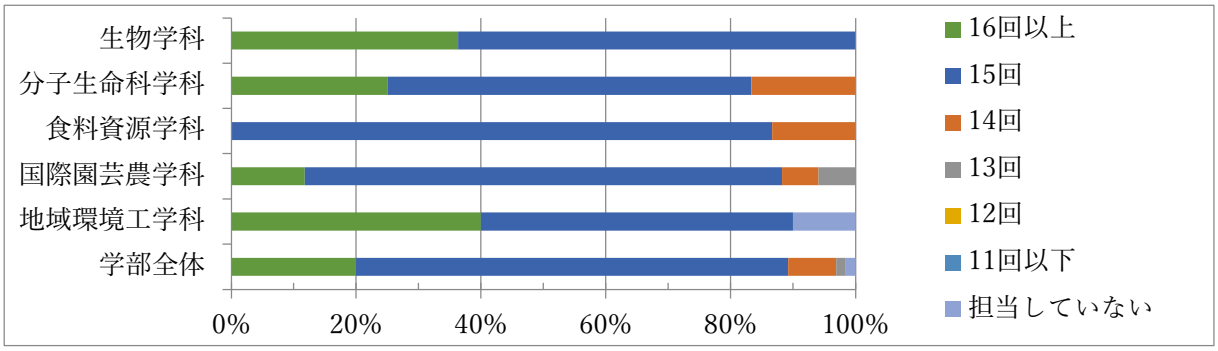
(1) 予定回数（2 単位 15 回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）



図Ⅳ- 2 - 2(1). 授業予定回数

すべての回答が 15 回以上である。また 16 回以上は 25%と昨年度の 19.4%、一昨年の 20.2%に比べやや高くなっている。

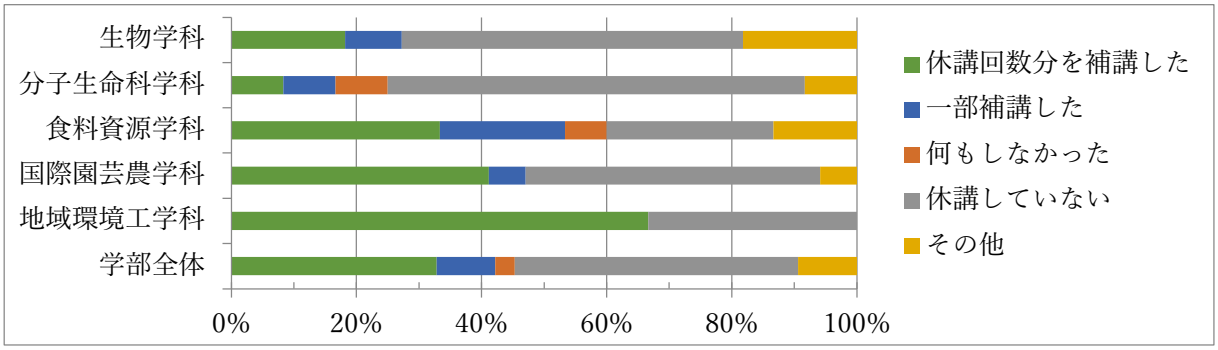
(2) 実施回数（集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）



図Ⅳ- 2 - 2(2). 授業実施回数

学部全体回答数は 59 である。実施回数 15 回以上が今年度 98.3%と過去 2 年間と比べて高い水準となっている（令和元年度:94%、令和 2 年度 95.5%）。また、16 回以上実施との回答も、今年度 22%であり、令和 2 年度の 17%、令和元年度の 20%と比べて高い水準である。担当していないとの回答は 1 名あり、新任教員だと思われる。一方で、14 回以下との回答は 6 名と令和 2 年度の 3 名に比べて増えている。内訳は、14 回が 5 名（分子生命科学科 2 名、食料資源学科 2 名、国際園芸農学科 1 名）、13 回が 1 名（国際園芸農学科）であった。

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。



図Ⅳ- 2 - 3. 休講の代償措置

学部全体の回答数は 64 である。休講したのは回答者全体の 54%（35 名）の教員であり、令和 2 年度の 36%を上回った。休講回数分の補講措置が取られたのは、該当者の 60%であり、令和 2 年度及び令和元年度の 54%を上回った。また、「一部補講した」・「他の措置」も併せなんらかの措置を取ったとの回答は該当者の 94%であり、令和元年度の 92%、令和 2 年度の 90%を上回った。

一方、休講への対応がなかった教員は該当者の 6%（2 名）であり、令和 2 年度の 2 名と同水準であった。下記の自由記述も合わせると、休講の増大の背景に COVID-19 の流行やワクチン接種があったものと考えられるが、同時に多くの教員が補講や代替措置によってできるだけ影響を最小限にとどめようとしていたことがうかがえる。

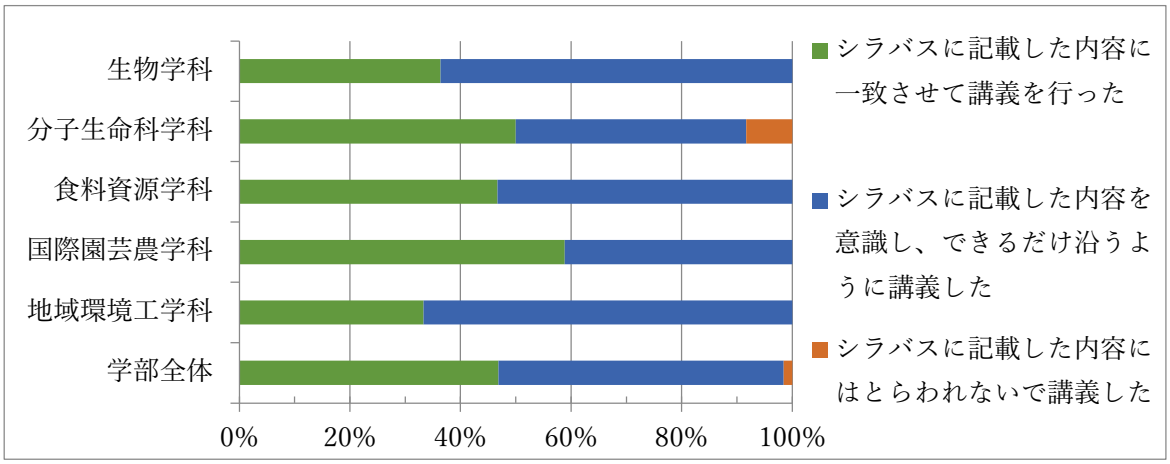
「講じた代替措置」については以下の記述があった。

・課題・レポートを課した。(生物学科・分子生命科学科)

・一部補講　一部レポートなど課す。(生物学科)

・ワクチン接種のため、受講人数が減となったことから期末試験の予定回をレポートに変更したため休講とした。

設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。



図Ⅳ- 2 - 4. シラバスと実際の授業の一致度

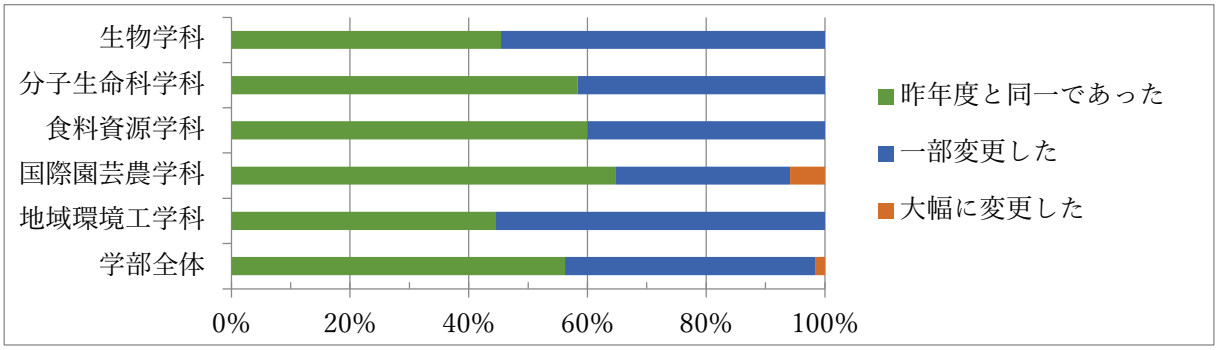
全体回答数は 64 である。学部全体で、「シラバスに一致させた講義を行った」が 47%であり、平成 30 年度の 49%、令和元年度の 52%と比べると低下しつつある。「記載した内容にはとらわれ

ないで講義した」の回答は分子生命科学科に１名あり、昨年度と同様であった。とはいえ、「シラバスに記載した内容を意識し、できるだけ沿うように講義した」は 52%に達しており、概してシラバスを重視して授業が行われていると言える。学科別では、「シラバスに一致させた講義を行った」は、分子生命科学科、食料資源学科、国際園芸科学科で比較的高かった。

(2) 上記で、「3. 内容にはとらわれないで講義した。」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

- 学生に訊いてもシラバスなど見ていないと答える。ならばシラバスなど作成すること自体無意味。（分子生命科学科１名）

設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。



図Ⅳ- 2 - 5(1). 昨年度のシラバスとの比較

全体回答数は 64 である。学部全体では「昨年度と同一」が 56%、「一部変更した」が 42%、「大幅に変更した」が 2%（1 名）であった。しかしながら、「昨年度と同一」は、令和元年度 67%、令和 2 年度 53%となっており、概ね半数の教員がシラバスを変更する状況となっている。学科別では、生物学科と地域環境工学科で変更する割合が比較的高かった。

(2) 上記で、「2. 一部変更した。」または「3. 大幅に変更した。」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

【生物学科】
・新しい情報を解説できるよう変更した。
・参考文献のアップデート
・シラバスチェックの指摘を反映させて、評価方法を一部変えた。
・学生にとってよりよい授業を行うため

【分子生命科学科】
・授業内容を一部追加・変更したため
・より教育効果の高い講義内容を考えた結果
・教科書が改訂された。
・学生に伝わりやすい内容に改善するため
・遠隔方式にした場合の授業の進行速度の違いを考慮し、内容量を調節した。

【食料資源学科】
・Teams を用いた授業により内容を一部変更したから
・授業アンケートを受けて理解が難しいと思える箇所については 2 回に分けて行うなど策を施したため。
・講義内容を一部アップデートしたので
・よりよくするため

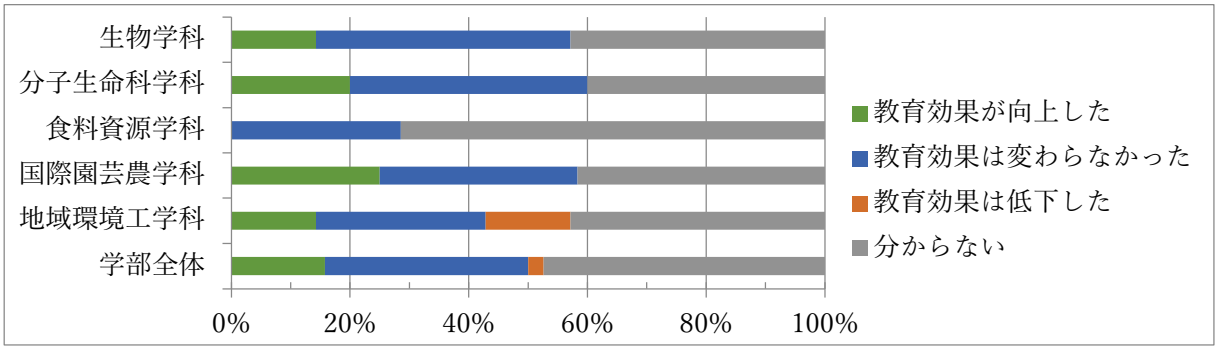
【国際園芸農学科】
・最新の研究成果を追加しました。

・よりよいものとなるように、取捨選択した。
・前年度に実施した講義の感触で、変更した方が良いと判断した箇所については変更したため
・Teams の使用に伴う変更、テキストの変更
・オンライン授業に関する事項を事後に付け加えた。

【地域環境工学科】
・より分かりやすくするため。
・より重要と考える項目に時間を充てるよう見直した。
・社会や時勢のニーズをふまえて
・前年度の状況を踏まえ、また、最新情報を提供するため、見直しをした。

メディア授業に沿った記載にするための変更や講義のアップデートが主な理由であった。

(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。



図Ⅳ- 2 - 5(3). シラバス変更の効果

全回答数は 38 である。学部全体では、教育効果は「変わらなかった」、「分からない」を合わせて 82%であった。令和元年度の 77%、令和 2 年度の 84%と比べて次第に上昇している。「教育効果が向上した」は 16%（6 名）であり、学科別では、生物学科、分子生命科学科、地域環境工学科でそれぞれ 1 名、国際園芸農学科で 3 名であった。この具体的内容については(4)で述べる。

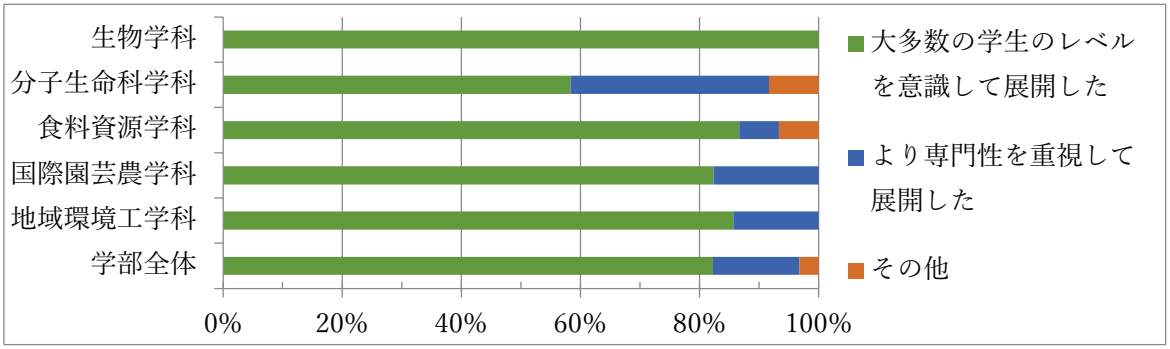
(4) 上記の設問 3 で「1. 教育効果が向上した」と回答した方は、その具体的な事例を教えてください。

【生物学科】
・授業の感想として、新たに取り込んだ内容について関心が持てたという感想が届いた。

【分子生命科学科】
・基礎的な項目の説明にかける時間を多くした結果、全体の理解度が高まった（試験結果を集計した印象）。

【国際園芸科学科】
・学生の理解度の向上（2 名）
・難易度を少し易しくしたことにより、学生の理解度が上がったと感じた。

設問 6. 学部の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

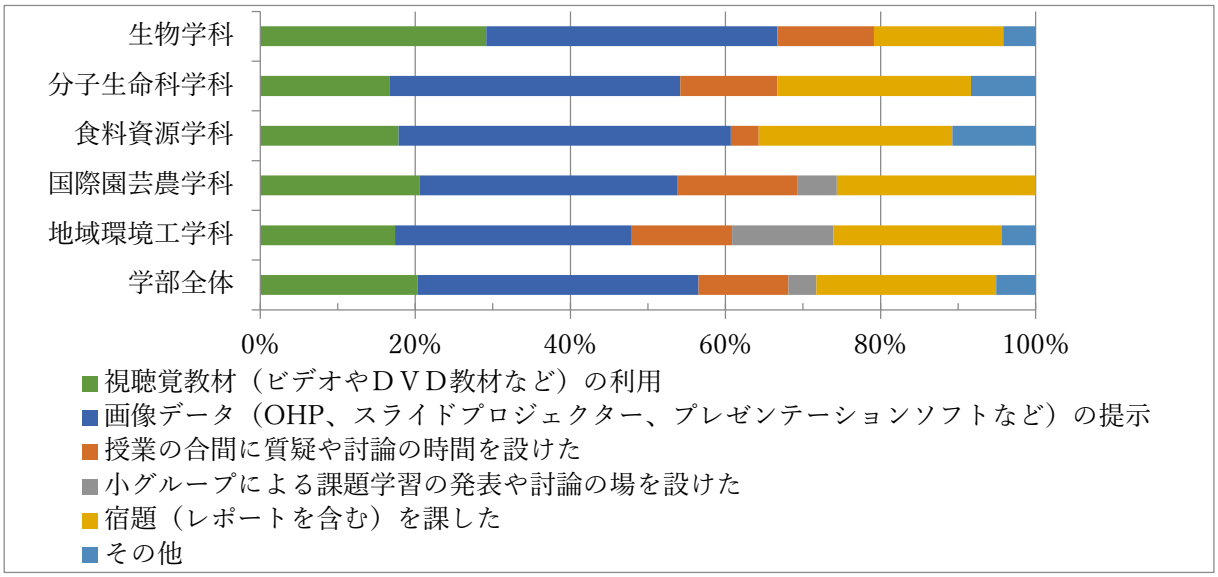


図Ⅳ- 2 - 6. 講義展開の考え方

全回答数は 62 である。学部全体では、82%が学生のレベルを意識した講義を行っており、令和 2 年度の 77%より上昇した(令和元年度 90%)。学科別では、分子生命科学科が比較的専門性を重視して展開しているとの回答（4 名）であった。

「その他」との回答内容は、「中学生でもわかる程度の説明を心掛けた（分子生命科学科)」「レベルに関係なくわかりやすさを重視した（食料資源学科)」であった。

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可)。



図Ⅳ- 2 - 7. 授業の工夫

回答は生物学科、分子生命科学科、食料資源学科、国際園芸農学科、地域環境工学科からそれぞれ、11 名、12 名、14 名、16 名、8 名（計 61 名）から得られた。全体では、「画像データの提

示」がほかの授業の工夫と比べると過去 2 年度と同様に最も多く、82%の回答者が選択した。続いて「宿題を課した」を選んだ回答者は 52%いた。これは科目の単位取得が、授業受講だけでなく自己学習を含めたものであることから、授業外の学習を重視した取り組みが行われていることを表している。

「その他」について、以下の回答があった。

【生物学科】
・資料プリントを提供

【分子生命科学科】
・授業毎の小テスト
・対面でも Teams と Forms の活用

【食料資源学科】
・理解を助ける図や表をできるだけ利用した。
・配布資料に設問（空欄）を設けておき、進行に合わせて回答させる。
・スライドを利用した。

【地域環境工学科】
・計算過程の行間を省略せず、高校数学レベルから丁寧に説明した。

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

【生物学科】
・これまでにそのような学生はいなかった。(2 名)
・疑義に対して理由を述べて、納得させている。
・解答用紙の開示
・一緒に答案など見て説明・議論
・疑義の申し出があれば応じ、納得いく説明があれば成績を修正する。
・直接説明している。

【分子生命科学科】
・テストの返却
・評価基準の明確化し、答案を返却している。
・必要があれば答案の返却や説明をする
・採点の前に評価基準を作成しておく。
・試験等はすべて返却している。正解は掲示している。集計ミスがあった場合は修正している。
・説明をする。
・面接して説明した
・評価法を説明する。

・つねに本人に具体的に説明できるよう心がけている。

【食料資源学科】
・試験結果を開示し、納得するまで説明した。
・提出課題やテスト回答の内容など評価に至った根拠を示して学生に説明する。
・今までに疑義は無かったので取組していない。
・採点の仕方、科目の重要性を説明することで、ほとんどの学生は納得している。
・答案の開示と説明
・疑問に思う点をきき、答えてる。
・評価の方法を初回に説明する。
・学生の言い分を良く聞き、必要に応じて採点した試験やレポートを示して納得してもらうように努める。
・テストの解答を見せて説明する。
・評価基準を明示する。
・口頭で解答
・特に疑義を持つ学生はいなかった。

【国際園芸農学科】
・根拠データを開示します。
・疑義を持った学生はいなかった。
・成績評価の基準を明確にし、不服申請があった場合にそれを提示する。
・丁寧に調べて対応している。
・疑念が晴れるように、点数の付け方を具体的に説明する。
・レポート課題を返却し、講義の中で採点の方法を説明している。
・評価法を学生に説明する。
・基準・根拠を示せるように心がけています。
・提出物等の具体的な資料に基づいて説明する。
・平均点、評点分布、評価基準を改めて詳しく伝えることで、当該学生の評価が低い理由が納得できるように努力している。
・試験や課題の採点基準を明確にし、説明できるようにしておく。
・点数をみせる。
・納得のいく説明を行う。

【地域環境工学科】
・成績評価方法の開示、レポートと試験結果の 100%返却。
・理由を説明する。
・テストを返却して説明する。
・採点結果を明示。
・採点基準、解答例、配点を明確に提示している。
・答案を返し、説明している。

・成績評価の根拠を説明すると同時に、学生の主張を十分に聞き、相互理解に至るように努める。

昨年度同様、成績評価に疑義を持つ学生に対して評価基準を説明・開示したり、理解するまで説明する等の対応が多い。さらに、答案の返却が行われるなど、さまざまな取組がなされており、多くの教員は学生の疑義に対し積極的に対応している。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

【生物学科】

・学生とのやり取りで困った最近の事例を書いてもらって、教員間で共有できるようにするとよいと思う。ヒヤリハット集のような感じにまとまるとよいと思います。新任の教員の方にも役立てていただけると思うし、古株の教員にとっても最近の学生の気質を知るきっかけになると思う。

設問 10. このアンケート調査の実施や内容について他にご意見がありましたらご記入下さい。

【生物学科】

・自由記述欄。なくなってから具体的な改善点やよかった点が分からなくなった。

【分子生命科学科】

・追加するとすれば、入学前に学部の教育内容についてどのようなイメージを抱いていたか、入学後にそれはどのように変化したか？など。また、学部の教育により地域の産業や活動について何か理解するものがあったか？など。削る方では、質問 2 は要らないと思います。多様性を尊重した結果、「大学生としてふさわしい」がとてもわかりづらくなったと思います。

【食料資源学科】

・特になし。(3 名)

【国際園芸農学科】

・1 授業アンケートの結果が高いと思う理由、低いと思う理由について書いてもらうといいと思います。

【地域環境工学科】

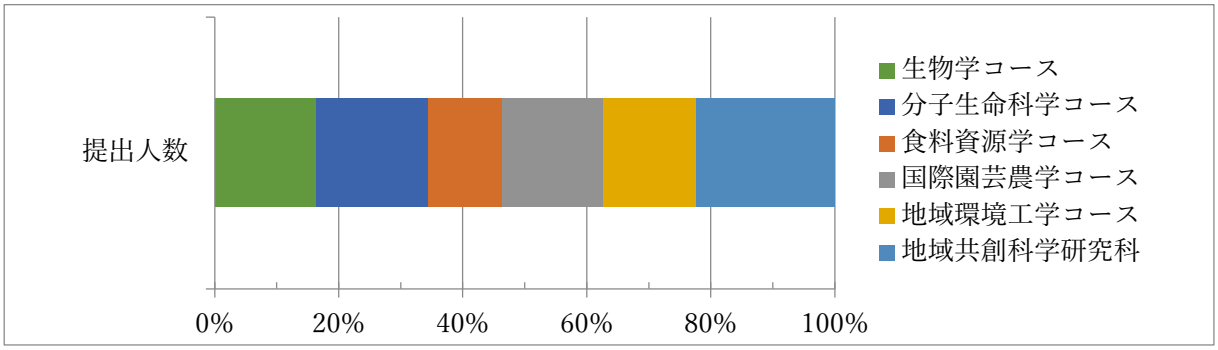
・特になし（4 名）

３．研究科授業に関する調査結果

設問 1．あなたが所属するコースを選択して下さい。

表Ⅳ－３－１．回答数

	教員数（人）	回答数（人）	回答率（%）
生物学コース	12	11	91.7
分子生命科学コース	14	12	85.7
食料資源学コース	10	8	80.0
国際園芸農学コース	12	11	91.7
地域環境工学コース	10	10	100
地域共創科学研究科（非対象）	18	15	83.3
全体	76	67	88.2

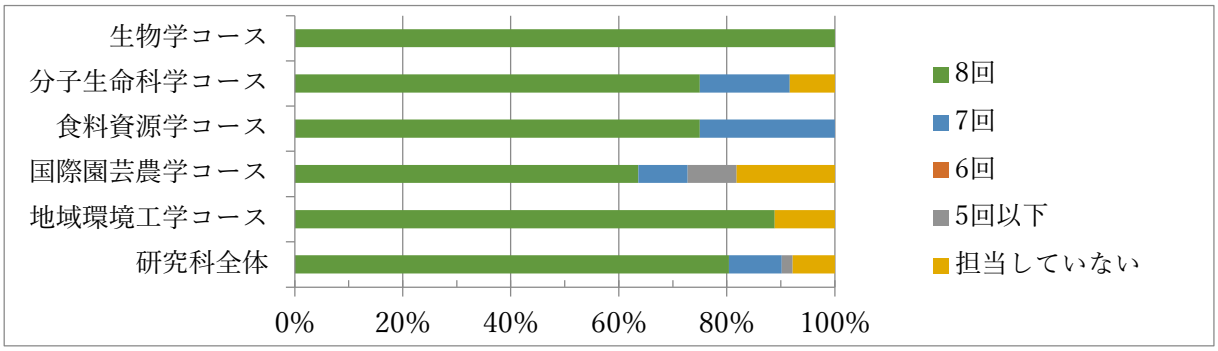


図Ⅳ－３－１．コース別回答割合

研究科全体での回答割合は92%で令和２年度(89%)よりわずかに改善した(令和元年度78%)。食料資源学コースの回答率が80%と他のコースに比べて低く、改善が必要である。

設問 2．授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

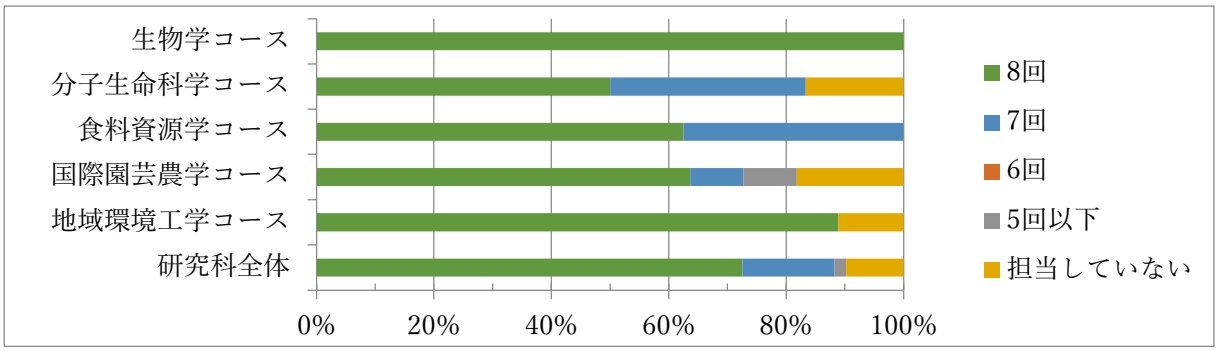
(1) 予定回数（1単位8回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は90分間を1回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）



図Ⅳ－３－２(1)．授業予定回数

全体回答数は 51 である。研究科全体で授業予定回数は、8 回が 80%、7 回が 10%、担当していないが 8%でほとんどが所定講義数を満たしている。5 回以下との回答者は国際園芸農学コースに 1 名いるだけで、昨年度と同じである。

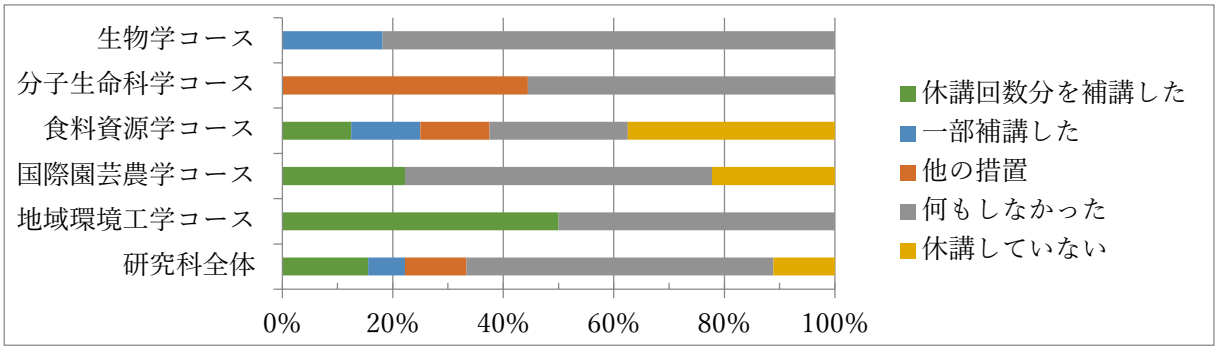
(2) 実施回数（集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）



図Ⅳ- 3 - 2(2). 授業実施回数

全体回答数は 51 であった。研究科全体では 72%が 8 回講義をしており、昨年度から増加した（昨年度 61%）。担当しているが 8 回の講義を実施されなかったケースは、食料資源学コースと国際園芸農学コースでやや多く、38%と 40%であった。生物学コースと地域環境工学コースでは講義を担当している場合は、すべてで 8 回以上の講義が実施されていた。

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。



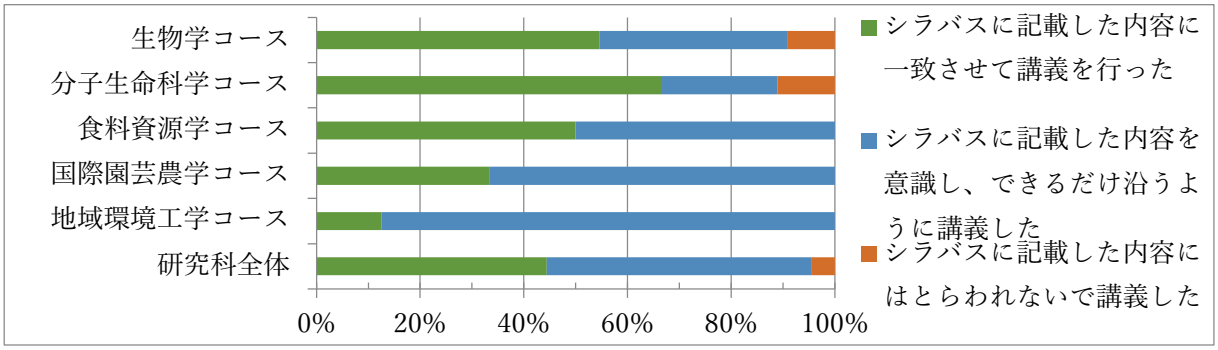
図Ⅳ- 3 - 3. 休講の代償措置

全回答数は 45 であり、前の設問に比べて回答数が低下している。これは、講義を担当していない教員が多くいるからだと思われる。昨年度と比較して、「何もしなかった」の割合が研究科全体で 56%と大きく増加している（昨年度は 8%）。その一方で、「休講していない」の割合が昨年度の 61%から 11%と大幅に減少している。この変化が何に起因するのかその原因ははっきりしないが、Forms を利用したアンケート形式への変更が影響した可能性があり、データの解釈には注意が必要である。これらを除くと、補講またはその他の措置によって代替措置が図られている。「他の措置」については、以下のようであった。

【食料資源学コース】
・授業と同等の教育効果が期待できる課題を出した。
・レポート提出を課した。
・課題を課した。

【国際園芸農学コース】
・代替となるような自習用の課題を課した。
・課題を出して学習させ、レポートを提出してもらった。

設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。



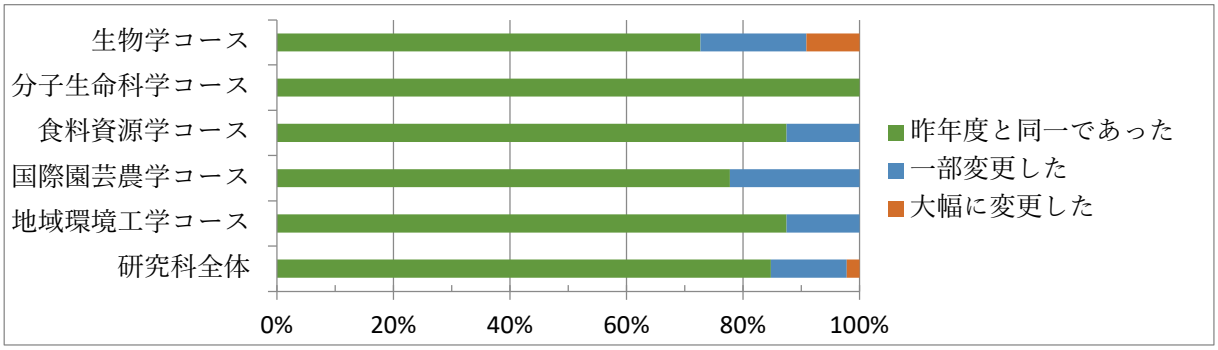
図Ⅳ- 3 - 4. シラバスと実際の授業内容との一致度合

全回答数は 45 であり、若干少ない。これは、講義を担当していない教員がいるからだと思われる。研究科全体では、「シラバスと一致」、「できるだけ一致」と合わせると 96%で、昨年度 (97%) とほぼ同様であった。概ね大学院でもほぼシラバスに沿った講義が行われていることが分かる。シラバスに記載した内容にとらわれないで講義したと答えたのは 2 名のみで、コロナ対応によりやむを得ず変更した場合と、シラバスの意義自体を否定するものであった。

(2) 上記で、「3. 内容にとらわれないで講義した」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

【生物学コース】
・コロナ禍の影響で臨海実験所での開催が難しくなり、学生に相談、説明の上開催場所と内容を変更したため。
【分子生命科学コース】
・シラバスなど無意味。

設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は前年度と同一でしたか。



図Ⅳ- 3 - 5(1). 前年度のシラバスとの比較

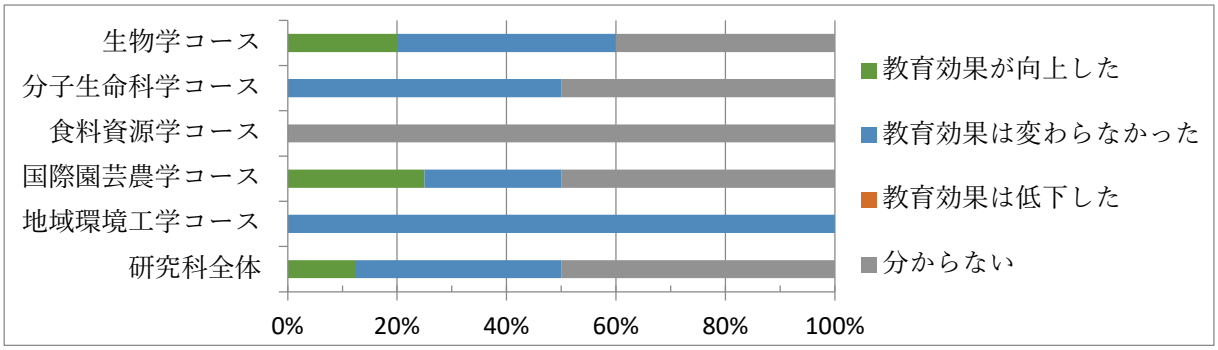
全回答数は 46 であり、若干少ない。これは、講義を担当していない教員がいるからだと思われる。研究科全体で、「昨年度と同一」と「一部変更」がそれぞれ 85%、13%であった（昨年度は 72%と 28%）。「大幅に変更」は一人のみで、その理由は回答なかった。多くの教員が、基本的に前年度のシラバスを踏襲するも、少しずつマイナーチェンジをしながら講義を構成していることがうかがえる。

(2) 上記で、「2. 一部変更した。」または「3. 大幅に変更した。」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

【生物学コース】
・近年の研究内容を加えたため。
・最新のものを取り入れた。

【国際園芸農学コース】
・最新の研究成果を追加しました。
・新しい研究内容を取り入れるため。

(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。



図Ⅳ- 3 - 5(3). シラバス変更の教育効果

全回答数は 8 件である。該当者のみが回答しているので、回答数は多くない。研究科全体で、「教育効果が向上した」と回答したのは 2 人（13%）いて、過去二年より減少した（令和元年度：

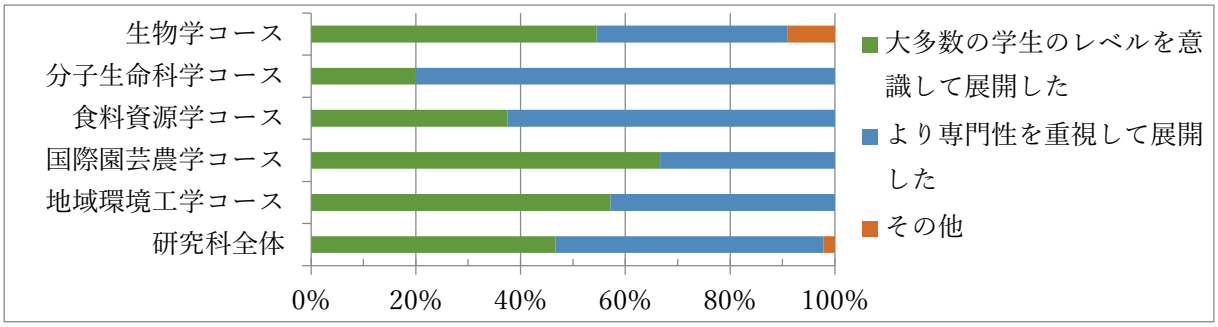
23%，令和 2 年度：25%)。「教育効果は変わらなかった」が 38%（令和 2 年度 55%)、分からないが 50%（令和 2 年度 25%）とこれらを合わせると全体の 88%を占めており、シラバス変更による教育効果をすぐには実感できないことを示している。学生側のシラバス利用の実態と合わせて検討する必要がある。

(4) 上記の設問(3)で「1」と回答した方は、その具体的な事例を教えて下さい。

【生物学コース】
・意欲のある学生は、興味を示し、勉学により取り組むようになった。

【国際園芸農学コース】
・学生の理解度が上がった。

設問 6. 大学院の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

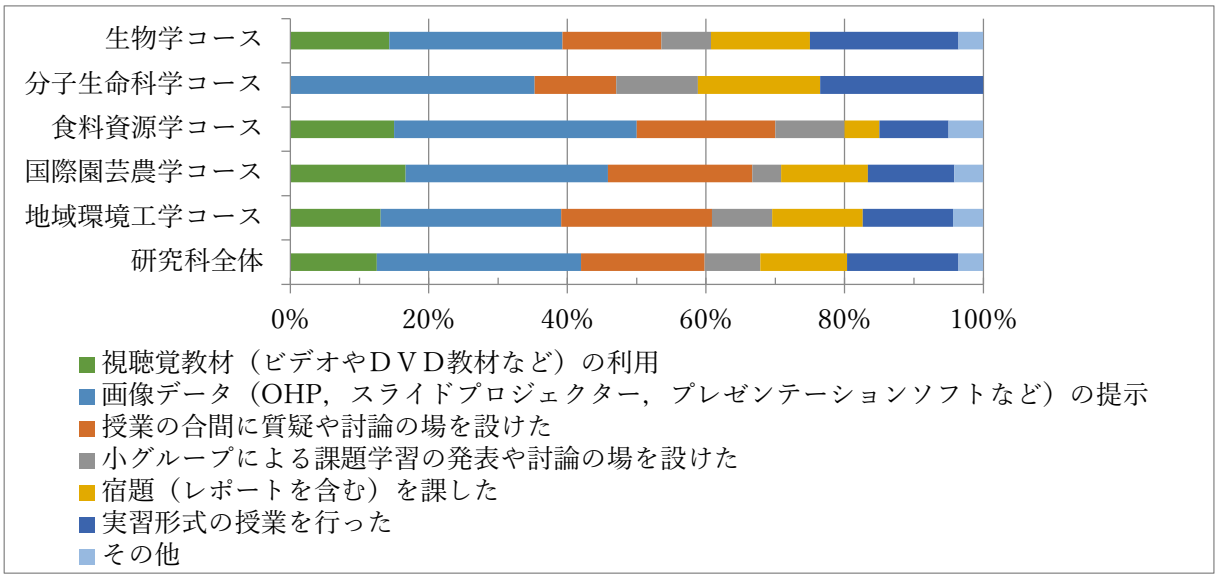


図Ⅳ- 3 - 6. 講義展開の考え方

全回答数は 45 である。研究科全体では、「学生のレベルを意識」が 46%（令和 2 年度 41%）で「専門性重視」とした回答が 51%（令和 2 年度 56%）であり、やや専門性を重視する傾向があった。学生のレベルと専門性を両立させながら講義に取り組んでいることがうかがえる。

「その他」との回答の理由は「研究の邪魔をしない（生物学コース)」であった。

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。



図Ⅳ－３－７．授業の工夫

全体回答数は 112 件であり、複数回答が認められているため多い。何らかの工夫をしているという回答は生物学、分子生命科学、食料資源学、国際園芸農学、地域環境工学の、11 名（11 名中）、10 名（12 名中）、8 名（8 名中）、9 名（11 名中）、7 名（10 名中）からそれぞれ得られた（計 45 名）。担当授業のあったほとんどの教員が何らかの工夫を行っていると推測される。研究科全体で、「視覚教材」と「画像データ活用」が合わせて 42%を占めた。次いで、「授業の合間に質疑・討論の場を設けた」り、「小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた」り、「実習形式の授業を行った」など学生の能動的学習としたケースが合わせて 42%であった。

「その他」とした回答は 4 件あり、以下にその具体的内容を記す。

【生物学コース】

・情報、資料提供

【食料資源学コース】

・理解を助ける図や表を用いつつ、最新の研究成果やその研究の背景を消化して、受講生が興味を抱く内容を紹介した。

【国際園芸農学コース】

・分かりやすい配布資料を提供

【地域環境工学コース】

・フィールドワーク

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

【生物学コース】
・そのような学生はいなかった。(3 件)
・答案の開示。
・相談に応じ、納得すれば成績を修正する。
・直接説明する。

【分子生命科学コース】
・そのような学生はいなかった。(2 件)
・個別に対応。
・必要があれば答案の返却や説明を行う。
・申し出があれば対応している。
・理由を説明した。
・具体的に本人に説明することを想定して評価しています。

【食料資源学コース】
・そのような学生はいなかった。(2 件)
・提出課題の内容に対しての評価など、評価に至る根拠を示しつつ説明する。
・成績評価の方法について、事前に説明している。
・そのような成績になった理由を説明する。
・成績評価の基準を明確にする。

【国際園芸農学コース】
・そのような学生はいなかった。(3 件)
・根拠データを開示します。
・丁寧に調べて対応している。
・疑念が晴れるように、点数の付け方を具体的に説明する。
・採点について講義の中で説明している。
・点数を見せる。
・納得のいく説明を行う。

【地域環境工学コース】
・ひたすら説明する。
・レポートの解説をした。
・成績評価の根拠を説明すると同時に、学生の主張を十分聞き、共通理解を得るよう努める。

設問 9.　教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

【生物学コース】

・自由記載欄。

【分子生命科学コース】

・大学院講義で出される宿題や予習・復習が研究活動の妨げになることはなかったか？

【食料資源学コース】

・特になし。(2 件)

【地域環境工学コース】

・特になし。(2 件)

設問 10.　このアンケート調査の実施や内容についてご意見がありましたらご記入下さい。

【生物学コース】

・修士の学生に対する講義が多すぎる。学生にとっても教員にとっても負担は多いにもかかわらず、学習効果は自ら考えて調べて作業を行う研究に比べてかなり低い。修士の学生の履修単位数と講義時間をもっと減らすことが、学生にとっても教員にとっても有益である。

【分子生命科学コース】

・特になし。

【食料資源学コース】

・特になし。(2 件)

・食料資源学コース、国際園芸農学コースに修正してください。来年度からで結構です。

【国際園芸農学コース】

・アンケートだけでは教育改善にならない。具体的なアクションが必要ではないか。

【地域環境工学コース】

・特になし。

・担当の教員、事務の方々には、ありがとうございます。

Ⅴ．アンケート調査結果に対する各学科の見解

生物学科

今年も卒業生・修了生・教員アンケートの調査結果がまとめられた。毎年、学部卒業生からの声がやはりいちばん“刺さる”ものが多く、今年も注意深く読んだ。ただ本年は回収率が 60%ほどで、今回はその点を差し引いて考える必要があろう。生物学科は例年、他学科よりも学部・学科の教育目標、教育目的、AP の理解率が低い傾向があるが、今回はだいぶ回復した。所属学生の本分が、学生本人に理解されないまま卒業に至るようでは残念である。引き続きガイダンス時などを活用して、意識的に教育理念を伝えていく。生物学科では、3 年生の前期に研究室配属されてからは、学科全体でのガイダンスは行われない。学生にとってガイダンスは、1 年の見通しを得る貴重な機会だと思う。各研究室で十分なガイダンスが行われるよう、教員間でさらに意識づけを行っていく。

今年は、学科の専門教育に対する満足度が大きく高まった。幅広い生物学の分野の内容を専門的に教授するという我々の教育の基本方針が、基本的には学生にも支持されているととらえた。ただ、例年通り、学科教員の指導内容、あるいは指導力そのものの個人差に対する指摘は多く見られる。実際のところは、教員にも差があるのと同様に、学生の側も多様であるのが現実であろう。しかし現代的にはその分、教員は、各学生に合った教育を提供する能力が高度に求められるような変化となって、現れ出てきていると思われる。教員個人の自省や研鑽とともに、教員間での情報交換を広く行うことで、引き続き学科の教育力の向上を行っていく必要がある。

本年は、卒業研究への満足度が非常に高かった。学科教員が、研究室での研究活動を通して教育を行うプログラムが、依然十分な効果を持っていることを示しているだろう。他方、コメントで「学生と教員の立場が平等でないと感じた」との感想も寄せられた。このようなコメントからは、平等意識が強く、友人関係もフラット、権威を“静かに”認めない現代的な気分を感じる一方、教育が強制労働のように受けとられるかとられないかは、教員側の発言や匙加減次第である、という緊張も感じ取った。この緊張感ともどこかでつながっているかもしれないが、生物学科での学びが進路開拓に必ずしも結びつかないいらだちも、アンケート結果から読み取れる。大学においては、もともとは職業訓練の場としての価値は二次的だったはずだろう。しかし、昨今のステークホルダーには、「就職につながる」ことが最も求められる現実がある。キャリアセンターなど大学がオフィシャルに機能として備えている就職支援の利用を積極的に促すとともに、教職や公的職員に無理なく挑めるようなカリキュラムをもう少し前面に押し出して学生に示していくことなどはできるだろう。研究力を備えた教員や公的職員が輩出するのは地方国立大学の機能としても望まれるものである。

修士課程修了生アンケートについては、モチベーションをもって進学した学生に対して、現状、良い教育環境を与えられているととらえた。今後も研究室での研究活動を通して教育を行うプログラムを、本学科・コースの屋台骨と信じて高いレベルで維持していきたい。

（令和 4 年度学科長　西野敦雄）

分子生命科学科

分子生命科学科では、アンケートの回収率が芳しくないことが例年の課題であったが、令和 3 年度はコロナ過の影響もあり特に回収率が 44%と悪い。アンケートは教育改善には極めて有効な手段であることからも、学科を上げて取り組む必要がある課題といえる。アドミッションポリシーなど学科の教育目標については学生・教員とも周知されていると言える。教育内容について「満足している」と答えた回答が多いことからも、上記のことがうかがえる。指導内容についての学生からの評価は分かれるが、例年「教員間で差が大きい」という回答があることから、学科 FD などを通し言及していく必要があろう。予復習に充てる時間が他学科に比べ低い傾向にあることは気になる点といえるが、時間外学習についての学生の受け止め方も異なるため、方法を探りながらより学習に目を向けさせる努力が必要であると感じた。実験や実習については前向きな回答が多かったと言える。海外研修についても評価は高かったと言える。設備について様々な意見が寄せられている。これらは、予算と密接に連動するので簡単ではないが今後どのように展開するのか学科として十分に議論する必要があろう。卒業研究や進路についてはおおよそ満足いくという回答がほとんどであったことは、学科の一教員としてはほっとしている。一方、「就職活動に対して寛容になって欲しい」といった意見も寄せられており、学生の希望する進路に即した指導について考える必要があると言える。修士課程のアンケートでは、全体評論でも述べられているようにプレゼンテーション演習の意義についてより一層の学生への周知が必要である点を除き、押しなべて評価は高かったと言える。

（令和 4 年度学科長 橋本 勝）

食料資源学科

アンケートの回収率を上げるために卒業研究発表会の際にアンケートを回収するといった工夫をしてきたが、アンケートのオンライン回答になじまなかったのか、当学科の回収率は学部全体とほぼ同じ 52%で相対的に低い回収率であった。アンケート方法の再検討も必要かもしれない。

教育理念、教育目的および教育目標（設問 2）および学科の教育目的（設問 3）において、当学科の内容を“知っている”とはっきり理解している割合は相対的に低かった（ただし肯定的な評価としては学部の割合と大差はない）。また、アドミッションポリシーの理解度（設問 4）でも、同様の傾向が見られた。しかしながら、学科の教育目的とカリキュラムは、約 8 割以上の学生が合致していると考えており（設問 5）、回答理由にも肯定的な理由があげられていることから、幅広い専門分野を含む食料資源学科の特徴と考えられた。食料資源学科で受けた専門教育に対する満足度が相対的に低い傾向があったが（設問 9）、実験・実習が一部オンライン開催となってしまったこと等が影響したと考えられ、講義・実習・演習などに対する満足度は高いと推測された。

学生の主体的学習について（設問 16）、ほぼ例年どおりの“1.0 倍未満”の割合が相対的に多く、学習時間としては決して多くはなかった。興味のある分野は意欲的に取り組んだ等の記載や実験・実習は講義よりもより積極的に取り組んだという記載もあり、学生自身の主体的、意欲的な学習を教員と学生が一緒になって改善していくことも重要と考えられた。卒業研究を行った研究室の施設の満足度が本年度は低下した（設問 23）。研究室のスペースが狭いと感じたことやクーラーなどの空調設備にやや問題があったようだ（設問 33 の教育活動の中で最も早急に改善すべき点で

も同様の意見あり)。ただし、卒業研究そのものについては満足しており、学生の卒業研究環境を少しずつ改善することが重要と考えられた。大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたかどうか（設問 30）という問いかけに対して、肯定的な評価は約半分程度であった。肯定的な評価は、教養知識・専門知識をしっかり増やせたということが主な理由であり、否定的な評価は、勉強不足を感じることが主な理由のようである。肯定的な評価と否定的な評価は表裏一体と考えられ、教員が学生の得た新しい知識を強調してあげることも重要なのではないかと考える。

（令和 4 年度学科長　松山信彦）

国際園芸農学科

学部学生のアンケート回答率がそれまでから大きく低下した昨年度の 64%をさらに下回る 50%となった。学部内で分子生命について最低の回答率であり、オンラインでの回答を求めた昨年度から引き続いて低下した。学科の専門教育などに対する満足度は昨年度と同様に約 90%に達しており、本学科で 2 年次に通年で必修としている農場実習を含む実習系科目の評価は高いようである。一方で、実験については受動的な内容が多いとする意見やコース分属後の 3 年次の履修を望む意見など、文理融合の学科において両分野の学修内容を一定の質を確保しつつ網羅する上での課題を示す回答が得られている。多分野を網羅する学科の特性とあきらめるのではなく、各教員それぞれの専門分野における教育研究の一層の充実が必要であろう。

（令和 4 年度学科長　泉谷眞実）

地域環境工学科

卒業生のアンケート回答率は 53%で例年より低く、全体を把握できていない可能性があるため、アンケート回答率の上昇に努める必要がある。教育目標等の認識に関しては、近年 8 割程度を維持しており、各学年に対する年度初めのガイダンス等で本学部の教育理念や教育目標等を説明した効果であると考えられる。特に教育目的とカリキュラムとの合致については 100%が肯定的であり、学科の教育目標をよく理解していることが伺える。一方で、ガイダンス内容の適切さについては例年より低下し 8 割を切ったため、より丁寧で適切な説明を心掛け改善を図りたい。学科で受けた教育への満足度および教員の指導や対応について、「強くそう思う」と「そう思う」の回答が合計で 9 割以上となり、例年通り本学科の教育は学生に高く評価されており、学科教員の教育への努力に対する成果であると考えられる。学生の主体的学習に関して、授業時間の 1 倍未満の学生は例年並みの 6 割程度で、2 倍以上の学生が 10%未満となり例年より低下した。課題を課す等で予習復習を習慣づける工夫が必要であろう。施設・設備面では、実験・実習室について 3 割程度の学生が不充分と回答しており、自由意見から空調に不満があると考えられる。設備面については実験棟改修やエアコンの設置等適宜改善が進んでいるので、今後のアンケート動向に注視したい。教育活動全体に関しては、早急に改善すべき点について、「学生に対する教員の指導方法」と「成績評価の方法」がなくなり、勉学相談や施設面の不満がみられた。卒業後の進路に関しては、カリキュラム、進路支援への取組みとも 8 割を上回る肯定的な回答を得ており、例年通り高い水準である。

地域環境工学コース（修士課程）の教育活動に関しては、肯定的な自由意見が見られ、大きな問題は存在しないものと推測している。

教員対象教育評価アンケートに関して、本学科教員は例年と同様に学科の教育目標とカリキュラムとの関係を強く意識し、予習復習を学生に課し、学生の反応を見ながら授業運営していることがいずれの設問からも伺える。また、学科会議内で行われていた学生に関する情報交換を学科主催 FD と位置付けているため、FD の参加回数が大きく増加している。施設・設備面については、研究室の広さやネット環境に一部否定的な回答があり、改善できるところは対応していきたい。卒業研究の必要性の意識は毎年度高いが、卒業生に相応する知識と学力を身に着けさせたとの回答は 7 割で例年より低下しており、今後注視したい。

教員対象授業アンケートに関して回答率は 100%であった。本学科では JABEE プログラムの影響が大きく、学部の授業実施では規定回数に達しない授業は皆無で、休講時には補講が実施されている。授業実施に際しては、7 割がシラバス通りではなく、シラバスに沿うように授業を行っており、シラバス変更の理由からも常に教育改善を意識して、授業実施に当たっていることが分かる。また、研究科の授業実施についても、学部と同様であると推測される。

以上、地域環境工学科では教育実施に対し、各教員が継続的な教育改善を実施しており、一定の効果が得られていると考えられる。一方で、学習時間の少なさ、受動的な授業への参加、学習面の相談への要望が散見され、学生が主体的に学んで行く工夫を凝らすことや相談しやすい体制や環境を創出する等、引き続き教育改善に努める必要がある。また、要望の多い施設・設備面についても改善を求めて行きたい。

（令和 4 年度学科長　丸居 篤）

Ⅵ. 教育改善委員会（令和3年度教育改善にむけたアンケート調査についての意見）

・学部卒業時・研究科修了時学生対象教育評価アンケートについて

（１） 学部・研究科の教育理念、教育目的、教育目標、学部の教育目標、アドミッションポリシーについて

学部の教育理念、教育目的および教育目標の認知度は75％と昨年度と同様に高い値を維持した。このことは、学生への教育理念等の周知について掲示板を利用して行ったことの効果と思われる。当年度では8割を超える学生が学科及びコースの教育目標とカリキュラムの内容が合致していると答えており、近年になって肯定的な評価が増え続けている。 今後もこの調子で、学生に対して周知を継続していくことが望ましい。

（２） 学科／コースの専門教育について

学部の専門教育では9割弱の学生が満足していると答えており、昨年度と同様に高かった。一方、研究科では7割弱の学生が受けた教育に満足したと答えており、昨年度と同様に学部よりも低かった。修士学生は研究活動が最重要課題であると考えているためかもしれないが、受講する意義や必要性を感じることができなかった旨の少数意見にも配慮し、授業内容を改善していくことが必要である。また、研究科では授業評価アンケートを行っていないことも一因と推察される。

（３） 教員の指導について

教員による指導、対応については、学部全体でみると8割以上の学生が満足していた。平成27年度の69％から実施する年を重ねるにつれて微増ではあるが増加し続けている。学科別では、地域環境工学科での肯定的意見が多かった。研究科では肯定的な回答が88％と昨年度(74％)よりも大幅に増加したものの一昨年度(95％)の高い水準には戻らなかった。学部、研究科ともにほとんどの学生は教員の熱心な指導に感謝していることが伺えるが、少数ながら教員との関係を上手く築けなかった学生がいたことも事実である。そのような学生に早期に何でも相談室などと連携する仕組みを今後も継続する必要がある。

（４） 主体的学修について

主体的学修に充てた時間については、講義室での学修時間の2倍未満と答えた学部学生が9割程度であり、例年とあまり変わらなかった。研究科では講義時間の2倍以上の時間を予習や復習に充てたという回答は38％で、令和２年度(28％)、令和元年度(21％)よりも大幅に増加した。しかし、大学設置基準（第21条）を満たしていない大学院生が過半数を占めることから、引き続き自主的学修を進めるための声掛けを行うなどといった改善が必要である。講義に対する姿勢については、単位を取得して進級することを最優先にしたなど、単位取得のみを目的とした記述が目立った。主体的に学ぶための目標を設けるなど、根本的な対策が求められる。実験・実習に対する姿勢については、講義に関する主体的な学修よりも積極的に取り組んだとの回答が多かった。研究科では多くの大学院生が主体的および意欲的な姿勢で取り組んだと回答しており、教員の提示した要求に応えていると思われる。

（５） 教育支援、施設・設備について

施設・設備については、講義室への冷房設備の導入を加速して行ってきた効果のためか、教育環境の満足度が10％増加した。学生からの要望意見もあるので、今後も冷房設備の導入を継続していただきたい。蔵書室の認知度が低いため、その役割と存在意義について考える必要がある。「研究室スペースが狭い」というコメントが（特に教員から）複数要望があったことから、機器の共用化や共同学生居室の拡充などの研究室のスペースを確保する方策を検討する必要がある。

学生生活に関する相談は、令和2年度と比較すると学生センターでの学生生活の相談が大きく増えた。教育面、学生生活の面での支援体制の役割分担が認識されてきたことと思われるが、今後の推移を確認する必要がある。進路に関する相談も、昨年度と比較すると学生センターでの相談が大きく増えたことから、多くの学生が学生生活と進路の話題を学生センターで解決しようとしていると読み取ることができる。今後の推移を注視する必要があるが、学生センターが生活相談と進路相談を行う先として利用しやすくなっていることを示しているのかも知れない。進路相談については、学生センターと就職支援センターへ相談するケースが圧倒的に高かった。続いて指導教員やクラス担任が相談窓口になっていた。

（６） 卒業研究、修士研究に対する満足度

卒業/修士研究について満足していると肯定的に回答した学生は学部全体で約8割、研究科でも8割を超えており、評価が高いといえる。否定的な評価としては、卒業研究の中身の問題である場合や指導教員との研究の進め方に齟齬があった場合などがあげられていた。日頃から教員と学生のコミュニケーションを良好に保ち、丁寧な指導を続けることが求められる。

（７） 進路指導について

本学および本学部の進路支援について十分であったとの回答は学部全体では5割強を占めていた。進路支援の取り組みについての評価は学科間の差が大きく、地域環境工学科では十分と答えた学生が8割近くに達したのに対し、生物学科、分子生命科学科では4割程度に留まった。こうした学科間の差は就職／進学率の違いを反映していると思われる。

（８） 教育のあり方について

卒業/修了時に相応の知識や学力が身に付いたかとの問いに対し、学部全体では60％、研究科では65％の学生がそう思うと答えていて、過去３年間と同程度であった。今後も継続して傾向を把握し、修得度の低下が客観的にも認識されるようであれば、理由とともに分析し改善する必要がある。教育活動の中で最も早急に改善すべき点についてみると、昨年度は学部全体で「学生に対する教員の指導方法」が50％程度を占めていたが、今年度は5％程度と著しく低下した。一方、コロナ禍の影響か、経済的に苦労したとのコメントが多かった。学生たちが少しでも安心して学修・研究・就職活動に取り組めるような経済支援の拡充が必要である。本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢についてみると、教員の熱心な指導への感謝、研究への高い評価など多くの肯定的コメントが見られ、多くの学生は満足して卒業・修了している印象を受ける。一方、学生支援や学生への指導で不満を抱えながら学生生活を送っている学生も少数ではあるがいる。これら学生の早期発見、早期対応が本学部への満足度のさらなる向上には必要である。

・教員対象教育評価アンケートについて

学部/研究科の理念、教育目的、教育目標、学科/コースの教育目標とアドミッションポリシーについてはほとんどの教員が認知していた。ほとんどの教員がシラバス作成時に教育目的、教育目標に沿った講義内容にしようと意識していると答えている。学生の授業時間外学修を促す工夫については最近3か年の推移（令和元→令和2→令和3年度）を見ると、学部全体では「口頭での予習・復習の呼びかけ」(43%→51%→39%)、「小試験で復習を誘導する」(24%→24%→27%)、「予習・復習課題を課す」(20%→22%→27%)、「何もしていない」(9%→0%→2%)、その他（4%→3%→5%）となっており、9割以上の教員が時間外学修を促している。しかしながら、学部生対象アンケートで示されたように、学修時間は授業時間の2倍未満が多く、授業時間外での学修時間を増やすための取り組みが求められる。施設・設備については、「研究室スペースが狭い」というコメントが複数あったことから、機器の共用化や共同学生居室の拡充などの研究室のスペースを確保する方策を検討する必要がある。

・教員対象授業アンケートについて

学部では9割以上の教員が15回以上授業を実施し、研究科でも９割弱の教員が７回以上授業を実施していた。シラバスについてはほとんどの教員がシラバスと内容を一致させた講義を行った、もしくはシラバスに沿うように講義を行っていた。学部では学生のレベルを意識した授業を行った教員が８割強を占めていた。研究科では専門性を重視した授業を行った教員と学生のレベルを意識した授業を行った教員はともに5割程度であり、学生のレベルと専門性を両立させながら講義に取り組んでいることがうかがえる。アンケートには教員側から見た学生の評価を知る項目がないようである。次年度に実施予定のアンケート内容に、「こんなに成長できた学生がいた」、「こうすると一生懸命頑張るようになった」、「こんなことで学生対応に苦慮した」などの教員の声を回答させる項目を追加することで、教育改善に繋げていくことが期待できる。

（令和4年度教育改善委員会副委員長　中島 晶）